

懐中よりお梅が文取出してぞ渡しける。久米之助も心堰成程く其咎。そなたも知ての上なれば隠す事少しもない。外の者に添せては生て居られぬ二人の中。親の命と有るのらは法印了簡無逆も。暇乞すて出易し先文見んと封め切り。讀んどすれば南無三寶上包の梅が文。久米様との名宛にて中は吉祥院法印様參、成田武右衛門親の文。、扱は聞へたか梅が常く男手と能書く故に。國元の状とも人頼するなどト書書て渡せしが。隠し忍んでする事逆封違へて我文が。法印の手に渡つたか是はくど色違へ。立ても居ても詮方無狼狽廻る折柄に。主膳立出是々飛脚。法印直に問事有り。先休息召れとの事なりと言も敢ぬに久米之助なふ主膳殿。最前の文と法印様は早御披見なされたか。封め切りなされずば卒度取て来て下され。一期の御恩と言ければ。イヤ其状は法印様繰返し披見有り。反古細へ入れ錠卸し。手が穢れた勿体無いと跡で手水となされたか。如何成る状で御座るとぞ問へ共譯は話されず。はつと斗に胸踊らし詮義に逢ばとふせふと。飛脚の九兵衛が心造。細谷川の丸木橋踏返れとぞ祈りける。時に籠の山とよむ木道に法のひんよゑい。聲播磨路の大名より御慕引こそ殊勝なれ。則宿坊吉祥院僧衆立合石塔請取給ひければ。使者は座敷

に直りける法印頓て出迎ひ。遙々の御使者御太儀く。いざく是へそれ御盃か茶持て參れと挨拶有る。使者の侍慇懃に。旦那が悲母第七年に當りし故。御當山に石碑と建日はいと備へ申そに付。祠堂銀五百枚奉納致され候御受納有て末世末代。ふたいてんの御回向頼み存候と包の白銀目錄添て渡しければ。武門の御身に御信心御孝行の御追福感入候。抑々我山に卒塔婆一本殘せし人は。五十六億七千万歳の後。みろくの出世に逢せ給へん御誓願なごの疑ひ候べき。先此銀子の請取認め申さんと。法印奥に入り給へば兼て用意の勝手より。銚子盃重箱や早吸物の椀かしきせん盡したる馳走なり。ごぢうの弟子祐辨律師と始として。納所とらじゆく入替り立替り。山中と申し風情は無く共御時分よし。お吸物でもお換なされ。夫小性衆相手に成て御酒一ツ。ゆるりとわがつて下されと待遇へば。愛敬の小性はか合と色あきける。使者も數献と傾け扱く御器量成小性衆。何れもか名は何と申。御生國は何國くの御方ぞ。仰聞られよと云ければ。我等は有村主膳と申當國田邊の者。私は世繼八彌と申大和の者。身共は伊賀の上野の生れ小栗右門と申。私は此鹿神谷の宿雜賀屋の花之壺。年は十九で法印様のお内儀。私が妹にお梅と申てすんごさやらめで御

座れ共。惜い事は女子で坊様の口へ這入ませぬ。私が顔は花の様で花之丞と申升る。妹とお梅と云ふ譯はとふした事の知らぬ共。あの梅と云ふ物と此方は割て見さしやつた。中に平たい物が有る。こちらのお梅が中にも夫が有るやら無いやら。ついで割て見させぬ。念な事とど真顔なる。使者も返答仕兼ねれば傍輩の笑止がり。是去いくと袖と引。久米之助のお梅が噂聞に付ても彼文の。法印の手に渡り今や詮議の有るの迎。思ひ痛める胸の中釘と打る、八寸の。給仕も更に手に附す目に涙持斗なり。使者重て御自分のお年のさど見へ申。お名の何と生國のと問ひければ。吾等の播州飾磨成田武右衛門伴同苗久米之助。と扱の同國武右衛門子息高野に在り此方かと。見上てり泣出し見下してり涙に呉打萎れて見へければ。身に思ひ有る久米之助心便も無折のら。故郷の人の染くの涙にはたされ傍に寄り。一見に馴く敷事ながら同國のよしみと申御落涙の様子。御心休の優しさも押置つて頼み奉る。私事此山に一夜も足と留難き身の難義出来致し。幸國より迎ひも参る。具の事の麓にてお物語致しません。お詞と添られ法印より暇と取り。今日中に此山と連てお出下されば。生く世くのお恩に受命の親と存じさせふと。身の置所無き儘に粗忽の無

心も懸路故若氣故こそ是非なけれ。使者の膝と立直し是久米之助。お主が山へ登たの末の出家の善なるに。今此山が出度とい遠俗仕度心よな。と出家する因縁と忘れたの恨めしい。お手前十二歳の時傍輩伊吹重太夫が二男。卯之助と云ふ十一に成る友達と。鷄合の友達喧嘩敢無くお主が手に掛つた。卯之助が兄伊吹千右衛門との身共が事。其頃の数年の在江戸後日に聞ば殿より。切腹との御評定父母が了簡にて。子の可愛ひの同事親達へ歎と掛討れし者の爲でも無し。出家させて幼者の後世弔せんとの扱ひにて。我親共が命と助け當山へ登らぬ。一人の弟が死骸とも見ぬ懐敷さ。責ての筐に其方と一目見たさに。此度のふ使と望み受小性衆の名と尋ね。久米之助と聞よりも弟が有るならば。今年十八替ひ花難面も討たると思へ共。改めて恨と言はん様も無く。仇と思なる出家して後世と助けて呉るのど。思へば形見の心地もする恨めしいと床敷と。未練の涙と溢たが悔しいと久米之助。譬へ親の敵でも出家の格別。在家となれば見通し置れぬ弟の敵。此山が下度とい夫こそ望む所。麓に下つて八年以來鬱憤と散せん。法印に断り申爲御意と得んと立處へ。法印駈出様子委敷承る。やれ若衆め己の未髪こそ剃ね。九字をまんばう傳授して。禮拜けき

やうも勤れば出家も同前。殊に大師此方潔戒清淨の御山。假令にも女犯の穢か有ば一山暴て震動し。其身は狗竇に五躰と裂れ木の枝に掛らるゝ。目にも見せ話も聞ふ夫と知て此寺と能もく穢したな。國元の親ら珍しい文と得た。此年になれ共思ひより一も御げんの如く二世三世。くされくど血判すへた小舌たるい女子文。手に觸たれ今日始梅よりどの誰が事。皺の寄た此法印と梅干に譬たの。師匠相應な弟子でも無あのお使者の手に懸り死が生よふが構無い。あれ引摺出せ叩き出せ十一のら教た經文も眞言も。魔道へ捨たの勿躰無いと腹立涙に暮給へば。久米之助の伏沈み有あふ小性同宿も。傍のら何と千右衛門惘果たる斗なり。祐辨律師走り出。久米之助が袴とし。割るゝ斗に踏付く引起し。齒嚙となして涙と流し。見損なふた粹め。其根性との夢にも知らず。兄弟の契約の念頃またの何事ぞ。雑賀屋にの梅と云ふ若い娘も有る程に。出入するにの行儀が大事淨名ばし立られな。若衆の嗜是第一。兄分に恥るゝとなど立居に言たと忘れたの。是千右衛門殿。今迄愚僧が存せしゝ彼れゝ敵持たる身。若も規ふ人有らば扱身の下へ此法師が。駈入て討れんと一命遣たる中なれ共。只今念頃切る上は金貽兩部の大日も。御照覽ましませ不便

共存せず。御舎弟の敵御手に掛られど。座敷の下へ取て投。俗の女と慕ふより法師の身にて少人と。思ふの幾千増るぞや其兄分と袖になし。心指と無下にした憎や無念や深聞しやど氷の様成眼より涙とはらくとぞ流ける。千右衛門續いて下心無いに似たれ共寺と出れば弟の敵。討でゝ武士の道立すとするりと扱て。ひね打に四ツ五ツ丁くと打つけ。是のら死たる人此方意恨無上の。心次第に師弟の中何卒挨拶致し度と。遺の武士の神妙は久米之助わつと聲と上。只今のひね打も討て打るゝ身の報ひ。恥辱共思ひね共山の名残に法印様の御機嫌損ふ悲しと。二世と頼し兄分と袖にまたどの恨みの詞。悲うてく死でも迷ひと成升る。疾に爰と刺たらば此悔も有まいもの。坊主天窓の素氣無顔兄分に見せる悲しさに。責て廿と越迄と鬘と撫顔造り。身嗟が身の敵お梅に思ひ染られた。是も前世の因果のやお梅に逢て斷り立。縁と切て來ましたら元の様に。念頃にも可愛がつて下さるゝ。おんでも無事女と縁さへ切たらば。身に換ても法印様へ詫言申て念頃せふが。誠縁と切すば大師の罰と受ふと云ふ。誓文と立ふの。いにも誓文立ませふ。立何と。そこちの切ふと思へ共。お梅が合點せぬ時の何と仕ませふ。悲しやとのつばと伏て泣ければ。夫

其心の附こそ、罰の當た印ぞや。早出て失ふとぞうと伏供泣するこそ道理なれ。其隙に法印以前の文と取出し。山に置の穢らひし持て失ふと投付給へば。取しそふに密と取り肌懐に入れけるが。男女破戒の御咎め俄に吹來る天狗風。岩も枯木もぞうくく。靈動雷電雨霰。天地ひとつに黒雲覆ひ。長夜の暗とぞ成にける。すの山の大車なり不動坂迄追ひ出せと。下僧下部が小腕引立。棒よ杵よとひしめいたり。流石好味の花之丞。是久米殿。妹が事ハ氣遣さつしやんな。こなたの居所知れる迄ハ。己が女房に持て遣ると。聞も苦敷名残の山。髪も髻も引みだるれ涙亂れて目も眩く。さらばくと振返り。泣音もかるゝ驚や。お梅に通と失ひし。久米が心を憐なる

中の巻

逢ぬ昔しの白紙も。忍び重ねて厚紙と人に裂るゝ横紙に。袖濡紙の波易さ。浮名やばつと散紙の。嵐に脆さはな紙やまた十七の懐子。名さへお梅の氣もすしや。親與次右衛門いさくとして外より歸り。お梅が祝言いよく今宵に極た。今朝云付た通り市助傳九郎餘とあけ。夏よ雜煮の用意せい。竹膳立も綺麗にせい。賀殿ハ京島丸の人なれば黒梅が能らふ

。塗盆のいらぬぞ年のいらぬ娘じや。土器と三寶に口取り鬘斗昆布。着の鯉車海老。野のら貰ふた鹽貝が有ふ。鹽貝の序に女房共の何所に居ると。嬉しがるのも親心。おる様の中二階に。お梅様の髪梳てと言ければ。二階の口迄駈上り。こりやく宿老殿へ往て談合した。皆内証勝手づくの祝言なれば。弘め重ねて下つた時。今宵盃濟たらば娘ハ最早盤の物。どんと先へ渡いて女夫連であと早く。登して退いと云るゝと勢ひ掛る親の顔。見るよりお梅の涙ぐみ。急な事云て下さんす。盃さへ延てはしけれを親の後見。是非無ふて何様なりともと云ました。京登ハ先待て氏神へも参りたし。阿房でも兄ハ兄。花様にも知らする善日頃懇切遊ばして。御守よ御符よと御恩と受た祐辨様。お山にのまた外にもと其人の名ハ言兼て。思ふ邊とのすらする是も思ひの餘りかや。母親も打領さつ、夫もそふじやがこんな事。念頃な方へ知らすれば。北向の祝儀のと厄介掛るが迷惑じや。兎角翌御の心次第。御座れど。納戸へ入れば與次右衛門是。盃の供の者共是の内の奴等にも。何のなしに三百宛お引と遣る合點じや。筒さのしの顔でつらりと九文十文づゝ。百の口と扱て置や。此方もあんまりな。お梅が一世一代に何が惜いぞ。矢張九十六文で。百宛遣て

置しやれと連て納戸に入にけり。お梅の幼き時よりも。甘やのされて二親に我儘言し習しし。心に疵と持たればいふりもならず拗強られず。九兵衛のなせ遅いぞ。久米様の返事いど。そろく表へ出けるが。女子丁稚が口くによふお梅様。晩に立聞致し申しよ。京のおか様にならつしやると。黽られても浮くせず。何いやる京へ往やら冥途へ往やら。知れた事のと門に立。坂と見上て居る所へ久米之助の類冠。九兵衛も投首して辻へ見ゆれば走寄。なふよふ來て下さんした文に言て遣る通り。京の奴めと今夜盃する筈で。私が氣の今朝のらとんと死んで居たのいと絶り付て泣にけり。和女の氣が死だが私に叩られ引摺れ。身も心も死まする嘘なら是と手と取て。袖から脊中がハア。たんと腫て有るのいの。髪もそけた顔も泣た顔じや。是やとふぞいのと入わりも。いはず知らずに泣居たり。九兵衛不承な調子にて。そ、鹿相なお梅様文と封違へて久米様への溜文が。法印様の御手に入。何が日頃法印様眞言陀羅尼讀だ目で。くどくの御見思ひ入りと。讀ではらそらぎやていと立。ぼじそわか成顔附。念者坊の祐辨様の踏殺す迎にへさつしやる。一災起れば二災起る。お國のら弟の敵じやとやら申て。理屈臭侍がむね打と喰する。弘法大

師御入ぢやう八百年此方の。一山の大騷ぎ飛脚の詮義も有そふで。私の据た膳も取すに隠れ居る。其間にお山が暴て來て天狗殿が鼻と怒ららし。大雨大風雷鳴大事の山と久米之助が。穢したと叩き出されて斯の体にて在します。お兩人のお蔭で烟草入と落しました。中に頼母子の掛錢七十四文有つたもの。定めて狗寶に掴まれたで御座らふ。正眞の天狗頼母子じやとぶつくさ云も道理なり。其様な事内へ沙汰したもんなや。山の暴ても崩ても久米様に逢ば嬉い。こな機嫌う無のいの。少笑ふて見せて下さんせと。言ても後先思ひれて泣顔見ゆる不便さよ。親のお梅よくと門口見遣て誰じや。久米様の。九兵衛是の何として。呼に遣度處へ能こそく先内へ。久米様が御座つたぞ暮たになせに火の灯さぬ。お梅が祝言常とい違ふた。二階の蠟燭庭もあうへも燈心と。掴み込んでくつくとどやれと。勇む所へ母親の形振と心得難くや思ひけん。いつの間に九兵衛の爰へも寄す山へ往て。お梅が祝言聞てお出なされたのど。不審そふなる顔色と九兵衛見て取りつと出。久米様のお仕合まだお聞なされぬ。ね國の親御御隠居で跡目とお繼なさる、等で。私も在所のら。早飛脚に雇われ打通りに上りました。日頃の念頃暇乞の爲。一寸連て寄て

くれ。祐辨様も退付そこへと有る事。今日あらは是七百石の御世繼。旦那様物の談合。お梅様の御祝言。だ盃なされぬ先。あちらと變替なされて久米様へ進せられまいか。私しやお爲と申さそ。祐辨様も大方其お心と見へました。千貫目持ても商人の。一時の損が知れませぬ。照降なしに七百石すればお前もお手柄。雑賀屋の舞殿がひん／＼刻るじや／＼馬に乗つて。娘御の金物の乗物に乗らつしやる。ましやんと打ませよと手と廣げても。イヤまお打まい。ねちみやくしたそんなら厨御夫婦も。乗物やじや／＼馬と。乗てもいゝな乗らばこそ。いや／＼馬は馬連牛の牛連。今日祝言する婿殿の。京三條鳥丸簀屋の作右衛門。お梅とほしいばつり年／＼の殘銀九貫五百目。百六拾兩で帳けして。此秋の買入に紅の花の様な小判貳百五拾兩。先へ預けて置れた今宵の物入仕拵へこちらに一文入させず。娘と裸で請取婿の世間ちつと有兼る。何と九兵衛と言ければ。いや久米之助様も小判の事ハ請合れぬ。お梅様と裸でなら鬼に鉄棒で御座りましよ。コレ阿房な事言す共聲がおヒやるの出て見よ。コレお梅久米様二階へ連まして。新しう出来た兼道具と見せましや。こりや女子共着と鼠に引るゝなど鼠の用心仕乍らも。二人二階へ上たるは是こそ猫に纏なれ。

二階に元渡の大紋純子の夜の物。二ツ枕の總附と嫉ましそふに久米之助。よく京の男と此枕と並べて。此夜着と被て二人志つぱりと寐さんしよの。まひよんな物見せて。又泣せて下さるゝとほろ／＼涙と流しける。嫌がらそ様な事聞きたふない。京の奴どなんの寐よ。今夜中に連立て走るぞ。胸と極めて下さんせ。此夜着蒲團に今の奴が寐くさる筈。嫌らしい右留左やと踏ちや／＼くつて投はしり。是は又私かの新しい寢道具。祝ふて寝初てはしけれと人が來ると氣遣な。ましんさやと疊みし夜着に凭れ合。誰もなこそそのせき心。花のお梅に驚の人くと厭ふわりなさよ。時に簀屋の作右衛門小者と連てつゝと入り。與次右衛門が誓と取て引寄する。女房始め下／＼も是の聊爾と取付と。寄な／＼と搦拂ひ捕て引すへ。こりや與次右衛門。京の者と陥立またら返りと喰ふ用心せい。親代／＼の得意で廿年此方。二千貫目足すの商ひに九貫目のはこりと取。先も見へぬ秋買に十五貫目の先金取り。祝言の仕入に四貫目取。男の有る娘とつづつて去せて構はぬ工面じやな。爰らでいまだ流行の。京大坂でい其手のもがりの魔つた。ま娘の首と渡その廿八貫目戻すか。二ツ一ツの返事と聞ふ。ヤ一升入袋の海川でも壹升。方の能者の仕合見よ。盃せぬ斗で廿

八貫目拾ふた。戎大黒が乗移つた作右衛門と欺そふや。置てくれとぞ罵言ける。與次右衛門眞直者くつとせいて。マ京くど喧しい頼げたが過る。七拾方石の下に住與次右衛門。氣の狭い己らがさげしみの違ふ。銀返すの安けれと言詰られて戻したと。言ひるゝが口惜い娘にも疵が附く。マ男の有る證據と出せ。何處ぞで菓と焚れて銀が惜うなつたか。慮外申た御免あれと詫言させて其上で。是非に祝言させれば娘の垢が抜ぬ。マ證據と出せとにちければ家内の上下まみこほり。二階にの遊ばも無死るより外分別の。なひつ震ふつ狼狽る。作右衛門押静め。證據くどすゝしそふにいやるな。身の明日立つ合點で今朝からお山へ上たが。八時でも有らふか俄に山が暴出して。大雷雨風一期に覺へぬこはい事。さる寺へ駆込で様子と具に聞たれば。南谷吉祥院の小姓久米之助と言おと。雜賀屋のお梅と數年密通して山と穢した其崇り。夫故今遣ひ出さるゝと一山が見物後姿と己も見た。飛脚の様な僕が供して麓へ下つた。言より九兵衛もじりくゝと門の方へ後退り。亭主もはつと二階と見れば女房かしくいやくゝ。其分での胡亂なこちらの人。娘が垢と抜つしやれ。狼狽て娘一人り捨さつまやるな。是くど膝と附ば合點し。マ呑込だこりや男。雷が

鳴た迎こちらの娘が不義の有る證據に成まいぞ。とふでも今宵祝言させくゝり附て去さねば。雜賀屋の與次右衛門が町へ面が出されぬ。手柄に婿にまて見せふ。マ、己が身体見かけての定めて婿にはしめらふ。廿八貫目の金での疵の無手入すの女房が持るゝ。己が銀で拵へた夜着蒲團のら取てくれふと。二階へ上れば與次右衛門。腕捻折ふと引卸し上と下へと掴み合ふ。久米之助は脇指抜てそのと言はと縫り付。お梅がわつと泣聲も下への聞かず叩き合ふ。女房中と押分てこちらの人から黙らつまやれ。待て下され婿殿とわなたと拜此方と拜。漸く兩方押静めらつばと伏て泣けるが。都兼共覺ぬ物の情の無事や。是程迄取結びマ祝言の場と成て。打破つてこち夫婦世間か立ふか身が立ふ。男と持ぬ娘子の誰が身の上に。何事の有るまい共言難し。過つる事を二親が迷惑すると聞ならば。氣の細い娘なり先の小性も堪兼て。死ふとそるゝの必定留に往るるしぎでもなし。必らず死るな死まいぞ。爰の死ぬる場は無を親に歎きと懸るといひ。其身もない難受る事。親孝行と思はば必らず死で呉るなど。先斯言て留たらばよもやとの思へ共。若い心の一筋に取しいと斗り。若や死ふか悲しやと。知らせの詞ひとつとも皆兩方へ掛橋の。二階にも聞取て扱たる脇指

流石又。死にもやられず聲立す。抱き合てぞ泣居たる。なふ親のどれも變らねど。母の名汚すも雪の娘の育ちの善悪から。お梅が一期の統付ば。三十年添ふたこの人に面ひ拭て添れもせず。是非に一旦盃して男の手柄に何時でも。退去の世の習ひ子が立てこそ慾もわれ。家財かさい代なしても。返す物と返さず置き與次右衛門でさらしくなし。母が此款と聞か梅が爰へ出るならば。夫とまはに和睦まて祝儀と渡して下され。醫へお梅が我と立て座敷へ出まいと云迎も。先の小性も木竹で有るまいし。先往や〜といやる等。夫も聞ねば不孝者子と獨り育るに。生るせの死ぬるせが七度有るとの幼い内。十七八に脊丈伸び親に夜の目も寝させぬ。憎い者に世話やかぬ子と持たれば思ひ知るふぞ。恨めしの世の中やと。聲と上てぞくどきける。久米之助も聞取て。後にもあれ親御の心安める爲。涙も拭ふて下てたも拜む〜と進められ。口惜涙ひつし無く階子とん〜踏鳴し。駈下て是願様徒らも悪性も。男持ぬ先ならば云ぬるまひと有るまい。それに意地無地いふ人のほのらひて置まやんせ。私が斯うして出るのの詫言と云ふもの。夫でも合點ないのらゝ氣に入ぬで有ふ迄。田舎育ちの私じやもの。何の都の目に入ふと身振も拗強

て見へにけり。婿のお梅にもすられ莞爾と笑ひ。是親仁か我黙らつまやれ。あれが爰へ出て呉て今の詞で千倍じや。天窓の上で踊つても去る事での御座らぬ。寢所へと手と引ば二親家内打うるはひ。目出度い〜去年先爰で盃事。其間に夫〜と氣と附てもがけ共。いや〜今宵も四ッ過願て夜中寝る間が無い。目出たふ寢所の盃と寢所急ぐ氣の毒さ。平に爰で酒盛なされ此間に内外の者。一献くめや酒とくめ。そりやくめ〜とあがいても。何國へ落さん久米之助。夜着引らづき身と締め生たる心地なかりけり。婿の蒲團に伸上り〜誰ぞ寝たやら暖か。去らば此夜着と着て盃せふと。久米之助が臥たる夜着と取らんとす。是〜こな様斗寢よふでの。とんと二人が一度に寝る。盃濟送いかな事夜着に手とも掛させぬと。凭れ掛りし夜着の袖。足とさそり手と〜つまに力と附ければ。ひとつに寢よふの忝い銚子早ふと呼内に。夜半の鐘も鳴渡る下には夫婦手に汗握り。九兵衛其外小隅へ寄り供の者にも酒盛て。酔た時分に臺所の火と消て聞にせし。二階の酒のまもんだ頃祝儀の石と打込んで。騒ぐ拍子に蠅と踏こらし。どやくや紛れに久米殿の手と引門へ扱そふぞ。仕そこなへばお梅が首が無ぞぬるなど。示し合せて酒肴下での下人盛つふし。

二階と母の酌人の怪我有せしの氣遣や。作右の母に辭義もなく酌つさゝれつ作法。大盃四五杯引掛なふお袋。姑めに酌取らせむやくまいの知らね共。斯う召さつたが能苦。作右衛門程の媚の慮外乍ら取憎い。久米之助の若衆で前髪の有ふが。己が様に小判の前髪の有るまい。あの様な奴等が娘子供とそゝのかし。京大坂にも有る事大方果の心中。き様な事。お梅の命拾やる親御の娘拾やる。己の盃拾はふと又三杯引續け。ア寝ませふ。お袋あちへいなまやれど。夜着引立んとする所へ大石とはたと打つ。是れと驚く天窓の上障子雨戸と打破り。大石小石透間無くはらりと投げれば。お梅の爰と大事ぞと久米之助に抱き付。作右衛門のひよるゝ足お梅危ない夜着被さやと。立寄れば母親燭臺と踞倒し。やれ闇いの火と灯せと。云ふ聲に與次右衛門下の火残らず吹消して常闇の夜と成にけり。母の這ひ寄久米之助が手と取て引出と。悔りそも夢心地お梅の久米が帯と取り。附て出るも闇の夜の母の斯共知らばこそ。作右衛門のどと失ひ。お梅のどこに爰に居ます。闇りて怪我まやんなお袋のどこへぞ。火と取にでがな御さんまよ。こな様勝手知らずじや。動ろすにござんせ。私も爰に居ますると聲が殘れば母親も。獨と思ひ連れて出るお梅の跡も

恐ろしく。母に知らせぬ足音とば火と照如く爪立て。震ひゝゝ靴脱忍び出。母久米之助に呷きて。こなたの命の無山人なれどお梅が歎く不便さに。こちら夫婦が了簡で今宵の命と助ける。お梅の男定まれば思ひ切ねばならぬぞや。是れお梅が呑た盃是と盃の縁切と。懐中に入れければ二人の死る覺悟の上。心の中の服乞顔の見られぬくら暗に。ま一度聲ととためらへば遅ひゝと氣とせきて。急ぐり吾子の死と急ぐ産出そも母死なすも母。生死二ツの門口と明て出行先も闇。跡も子故の暗の夜に迷ふ親子を悲しけれ

下の巻

久米之助お梅道行

幻や。ア定業の限りとは。如何に如何なる娑婆やらん。世は何の譬へぞや。達初て早三歳。影斗の契りにて。妻は野中の一ツ井戸。名は後の世の筐のや。殘と筐は親の爲。吾はそ様の前髪の。永き來世も私が此直さぬ額此儘で。見たり見せたり六道の。辻の街の多く共はぐれまいぞと。夕月の早入果て更渡る。まだ如月の八重葎。隠れ忍ぶによけれ共。顔が見憎の臙夜や。ふたつ能事嵐吹く。木の下露の玉川の。毒の車も降ならば。身に疵附す死たやと。顔と顔とと摺寄て。こぼす涙の自らの互ひの口に傳ひ入り。末期の水となりけら

し。刃と急ぐ我命。未短夜の春の霜。浦山しやな朝まで。消殘るかと白妙に。里の夜なべも時過て。乾や神谷の宿はづれ。生れ在所の名殘さへ。親より殿と思ふぞや。我のそもじの親御の恩。戀と思ひに縛られて。情のさづな縛の繩。不動坂にも差掛り。死出の山路と越るると心細しや卒塔婆谷。爰なつかいと引留め問へば。爰に古への刈萱殿の。まるし茂りし春の草。問ふて語つて味氣なや。彼刈萱の弓どりの。狂き心やあづさ弓彌生の空の月の前。櫻が本の盃に開いた花は散もせで。花の茎に身と捨し。無常の世語り身の上に。十九十八一盛り今宵散行く初櫻。兒が涙とぞ涙ぐむ。あれへ越れば尼の口。去年母様と連立て拜みし事の忘れず。憐れ佛の御母も。女の罪のねぢ岩や。夫さへ有るに我身の料り。早月雨よはと戀慕ひれて。ついに。秋田のよかど志水。山の眠りて物言ず。谷の流れよ聲立て。人に語るな此姿。わしが心とこなさんに隠す事迎持ね共。頼む佛の御名問ば我とば外の不動様。二親よりも捨難き。嗚や若木の花の兄歎き恨みの敵くも。二人が上に罰受る。天竺山の山おろし。締た肌へにきみくくと。悲しる。いと老といふも。今の間の冥途の苦患覺束な。此世のらさへ嫌ひれて深く心とおくの院。渡らぬ先に渡られぬ。

微妙の橋の浮雲さも。後世の見せしめじや柳や。鬼が千疋責ふぞ責られつ。さいなまるゝと離れまい。放すまいぞと取のり。袂の涙手に珠敷。頼めや頼め一筋に。一心重來滿徳圓滿釋迦如來信心舍利。彌く佛になる迎も。又の三途に迷ふ共。ひとつ回向の水汲や。手向の梅の花折坂たどり越れば曉の。五しやうの雲に埋るゝ女人堂にぞ着にける。若い心の一向に。死んで來世でくと。思ふ心のがつくりと。着ました嬉しやと男むの跡の歎きなり。堂の内には吾より先泊りし女中の目と覺し。申々と呼かくる。あいとふものもおぢけ立。身と抱合て居たりしが。いお氣遣ひな者でいなし。私に播磨の飾磨にて成田武右衛門娘さつと申す者。南谷の吉祥院に久米之助と申す弟と。尋ねて今日の暮方下人共と登せ問せても。有り共なし共知れ難く。坂の麓神谷の宿と尋よと言ふ人も有り。皆様所のお衆の若御存も有るまいと。他人に見なす姉弟後世の間路も知られたり。弟の骨肉恩愛の涙に暮て返答も無く。暫ためらひ居たりしが。久米之助とは聞たる人。昨日の晝より俄に大病引受て。今宵限りの命なりと申せしが。夜明なば生死の定説隠れ有るまじと。涙と隠と聲つきと姉の夫共猶知らず。去ばこそ思ひ當つたれ此お山の万年草の。人の命の生

死と示し給ふと申故。余りの事の訝しさ。守に入し万年草とあの谷川の水につけ。久米之助と心ざし半時斗りひたしても。次第に枯て凋しが弟が命有るまいとの。大師様の御告の遙くと尋ね来て。昨日にも着ならば切て死目に逢ふもの。男の身ならば一山と断廻つても逢ふもの。女と生れし悪業の。淺間しや悲しやと聲と上てぞ泣ければ。夫婦も俱に伏沈みお梅涙のひまより。親御様ともお誘ひか但姉様斗り。なふ其事と爺様が去年の冬のら頼らひで此二月の朔日に。六十九にて御臨終明る二日に畑りとなし。今日七日の吊らひと兄弟一所に拜まんど。此お骨と持て上りしに。弟も同じ骨となし寥々歸つて母様に。何と申さん定なの浮世やと。又さめざめと泣ければ。久米之助の我親の骨と聞より氣も亂れ。お梅の一目も見ぬ眞。縁と言ふの因果と言ふの。心に含み目に洩る。涙と袖にせき兼てわつと絶入る斗りなり。傍に伏たる供の下女あれ申。七ツの鐘が鳴ます。善の悪の夜が明たら知れませふ。こちの草臥て。何が善やらあくびやら。ふらく眠る心なさ。夫もそふ御用有るも存せず。引留て長物語り是も他生の御縁でこそ。若久米が事お聞付なされなばお知らせと頼みます。何れもに別るゝも。殊更名残惜うて久米之助が臨終の。暇

乞とする様で心細ふて悲やと。物が知らざる血の由縁。涙すゝむる斗にて言はず知らせず別れしり。はいなくも又憐なり。堂の小蔭に身と潜め片時も婆婆に居る内の。見るも聞くも皆罪障夜明も近付此上に。如何なる苦み恥との見ん。いさ死ふと叫げば。早ふ死たふ御座んする。去乍こな様の余所乍も姉御に逢。親御のお骨の傍にて浦山しい最期じやが。私の爺さお願様の悲しい中にも不孝者と。叱られふかと氣にかゝり是が迷ひと成ますと。又泣出せば是く。宵に母御の下されし盃の爰に有り。手に觸られし物といひ心ざしの籠つた。篋の是ぞと取出す。有難い脊丈の伸た私と。親の心で毎も責と思ふて。抱て寐て下さんした其心で死ましよう。盃肌の手と合せ方と待たる其顔容。奇麗な奇麗な和女の母の篋と持。我の父の骨の傍夫婦親子一蓮の。示しの時刻延されず。只今ぞと脇指抜き。胸に押當おんあぼさや。べいろしやのまのもたら。まにはんをまじんばらはらはりたや。うんと突込切先の。臆に當ればのり返り。はりたやうんどくり通す。阿吽の息も消々とのつつ返しつ苦しむ聲。姉主従の驚きて。走り寄て南無三寶人殺し。人殺しよと呼ばれ共。山中夜中聞く人も泣て麓へ走りけり。久米之助身と隠し立歸れば骨桶に。櫛と添て殘したり押

戴き三拜し。分て給ひる骨肉とひとつにかへすあはれはんふしやう。あじの一刀是なりと咽にぐつと突立て。死骸の上へのりの花梅と枕と並べける。地水火風の風ハ山水ハ谷水土ハ又。土砂の功德の眞言秘密。善男子善女人堂心中斯くとぞ聞へける。

心中萬年草終

二郎兵衛 今宮の心中

近松門左衛門作

るい〜く〜るい〜、月見花見は何所も同じ、諸國名所のろの中々に、類浪花の舟遊び
老も若いも下人も主も、男女がござ〜船に袂涼しき川風は、秋と云ひても虚でないよの
、じやれでもないよの本町橋と、漕出て見れば天満川、市の側なる初甜瓜買ふて冷してひい
やりと、爪とニツに打割は似たりや似たり燕子花、紫帽子河水に映らふ影と水汲が、汲
で荷ふて持や桶の棒、坊主頭と振立て、道正坊の金柄杓、あれあれ撫て通れば一撫に、は
や本復の伊丹酒茶舟で下る樽肴、在所嫁御の里歸り、上荷で送る葬禮や、世の有様のござ
〜と一時に見る舟遊び、是常になさお肴と一とつ勤むる盃や、然れば船のせんの子と
、君にす〜と書たり、船の屋形に三味弾は納屋に油の白と引、はしのいよ此橋のうへに
て賣る聲は、煙管團扇煙草入役者、評判扇賣、浪花藝者の風俗と橋々名所に擬へて、書集
めたる藻鹽草、いせかの海士に有らねども其は、狹野八重桐と龜井橋じやとふしやる。心
はの、先はふたびの神のけて、跡先に又續く者がないは扱、袖島源治は新敷じやとふしや

る、それ何故に、鹽物町のしたゝるたる。然も藝には骨が有るといひ、桂木常世はゑのこ
じまとよ、なせくゑのころころ抱寄せて手飼に愛らしや、扱又貞三十郎のつは座橋
とふしやる、心はの、何の料理に遣ふても仕出しが甘い扱、櫻山庄左衛門福島じやとい
しやる、心はの、小体なれども張詰て舞臺一はいのさも有り、藝に味も有る口中のしより
くしたるすゝめすし、夫でたでは何所やらがひりゝとするとぞ答へける、音羽二郎三
と雑魚塲とは、敵が有るとの譬のや、上村吉彌は伏見堀じやといしやる、義理はの、舟板
町の舟板の末には沖に乗出し、帆と充分のしるしとして今やら人々焦るゝと云ふと、扱市村
玉がしは梅田橋と見立たり、夫何故に、はて渡れば色町越れば火屋、濡にも憂にもよふ
つるは扱、杉山平八と四ッ橋とは是とふじや、江戸からも京からも四方へ引つり引張た、
踏ばたのつて山村がくはつと擔げた兩足は、百間堀と思ひ出す、善悪二ツと噛分けて、り
くぎと糺す芝崎に思案橋と思ひ出す、篠塚二郎左と見る時は大佛島と思ひ出す、三代續く
奴風嵐が風俗と譬ふれば、其江戸堀と思ひ出す、嘉十郎が貌付に炭屋町と思ひ出す、敵
は三原重太夫、序にて作りし悪心の、切で返報のくる時は、猪喰屋橋思ひ出す、思ひ出し

く陳ね行く、先是迄が片かゝりて、裏の御堂もあだくと立賣堀と滑廻し、辨當渡は渡家
具も、釜もちやくく洗屋橋、跡へはんなり入花の茶びんを橋はこちくと、寄よく
濱際の瓦町橋にぞ着にける、發屋介五郎は如法なる氣も丸領差爾に、申し婆様母様、此永
き日の馳走より亭主由兵衛を草臥、暮も近し是のらか上りなされと有りければ、隠居の
貞法七十三眼鏡いらす秋つす、齒は一枚も抜目なき男勝りののみ様にて、それく是
由兵衛、念の入た馳走でいひ思、此方の内から出た人が、店一軒の主に成り商賣もし
にせて、親方一家と響應とは此方ともくはいけい其身の手柄、然りながら女房が無れば、
人の世帯は落付ぬ、身代葉の女房と早ふ持て落つさや、左様でないのと有りければ、内儀
も共に打笑ひ、何故に女房持やらぬ、但何所ぞに思ひ入が有るのいの、由兵衛思ふ國に
乗りて、誠け今日はお心よふお遊びなされし、忝なさ、其上女房の事までお尋ね、御意の
通り些思ひ入御座れども、此女房がいさやすふていきにくい、とよでのみ様おえ様のお口
と借ねば参らぬと、はて此方達が云ふて濟事ならば氣も入らひで何とせふ、其思ひ入の名
は何と云ふ誰ぞいの、由兵衛殆ど笑聲に入り、さ有難い忝ない三度禮拜仕る、名と申せ

ばつ御存じ去れども、先唯今は名とば多申すまいよのしやんく、是のらが本酒、
亭主のら又はじめ、憚りながら介様へ、お肴にせ殿一節願むと云ひければ、介五郎盃
うけ申しの、様、二郎兵衛が法隆寺より戻つたら伴て来て、彼れが好の心中と語りももの
、去ればいの切てささが居たらば、祭文と聞ふものと、云へば由兵衛眞隠願、二郎兵
衛は母親の年忌に當り、在所へ参ると申したの、ささも一所に二郎兵衛と連れだつて参つ
たの、つがもない、ささは此比風ひいて頭痛がするとして宿へ往たと、聞さるあへず由兵
衛、内方も此方等が居た時分と違ひ、自墮落になつたなめ、青二才の二郎兵衛め了雅上
りの分として、母の年忌で候ふとして此忙しい最中に、十里ぢのひ法隆寺へうせさまが氣に
入らぬ、殊にささが煩ふて宿へ歸つた時分に、同じ様に家と出で餘な事は仕出すまいと、
波多無正に一人腹人も知らぬ心と背ち、船辨慶に有らぬとも、知盛が沈みし其有様に、又
由兵衛がしんさともやし、舟離れて盃離わり前後と忘るる事なり、菱屋一家の人々
は何の心も付されば、はや日も暮れた最早是のら歸らふと、上り支度と由兵衛危ないとは
些とも無し、提灯用意致せしと取出せしが南無三寶、願望と忘れた是久三、太儀ながら一

走り此通りの百貫町、四五丁往びおきさの宿、定て知て、有ふぞ由兵衛が申、蠟燭一挺
貸てたも、些と氣色が能ならば鳥渡愛進出てたもと云て同道しておじや、序の内に氣と付
て誰もないの見廻しや、早ふく合點の心得ましたと帶もせず、緋袴一つの裸身や百貫
町へぞ走りける、昨日今日前髪取つて下手代、未だ新物の二郎兵衛ふきさと深き中入の、
南京綿の上へには手のない様に仕立口、在所はいなな横堀の知邊の元に隠れ居て、暮れば
其處へと通路の、仄に見ゆる彼の舟の屋形には、眞法様ねる様、船には安東寺町の由兵衛
、是ならぬ、隠しませふありや何様ぞや、菱の提灯久三が持て、跡のら來はあささじや、
様子が無ふては叶はぬ筈と、氣ももやくつて蒸暑き、材木納屋に立隠れ事の様とぞ窺ひけ
る、ささは程なく走り寄、是はく皆様今日はお慰みと、只今久三の物語私が氣色も云
々とは無けれ共、のみ様おる様へ頼み上す御訴願事、直に是へ参りしも、ま、おとましい
事出来まして、一倍氣合お當りですと、溜息吐て居たりけり、眞法も熟見て、此方へ訴願
の事有とは何様した事ぞ、咄して見や成べき事なら聞いてはと、左も懇切の詞の末、お別
染として忝なや、昨日の暮れた三田のら私しが父親登られ、幼少時のら在所で約束しとい

た、男の姑の頼ひゆへ急に嫁入と急いで来た、此度お暇申し請け、三田へつれて歸りて嫁入さすとの申分、御存じの通り私は幼い時より大坂に育ち、手いたいとは仕付ず殊に病者な身と持て、在所の手業がなんとして、夫故當座の間に合に内方ののみ様が御懇切に遊ばし、さうこうなした若い者共數多の中、ひとつにして此大坂で物の美事に嫉て遣ふ、必外へ約束すなと常々のお詞、是が反古に成る物の在所へとは歸るまいと、私は申します夫では親の一分が立ぬと、云ふての親子争論多分是へ見へませふ、私が口の合ふ様に在所の嫁入とお止なされ下されと、つぎつぎと語る下心、二郎兵衛は合點にて彼の云分は我故、男に親と見返る心中者めと、材木に抱付ぞくく悦び居たりける、親はとぼく尋ねつき、菱屋殿のお船は是の、ささが親三田の太郎三郎で御座ります、ヤ、親仁殿の、それ酒進せ茶進せと、取々挨拶ありければいやお茶もたべました、定めてささめが咄でお聞きなされませふ、在所でなづけの方より、急ぐに欲いと申すにつき、中途ながら一生の身のため、道理立てお暇取れと申せば、在所へは往くまい大坂で男と持つと申す、夫は我儘親の云じよと背くると、叱つても聞き入れず、おれが男は内方ののみ様次第に任せて有、

是非とも親のこう言に在所の男持てならば、己や死るが合點の、娘殺ると云ふ事のと大聲上げて泣ます、お主のお慈悲に御意見と頼みます、在所の婿と申すも喰兼ぬ身代、行さよれば彼奴が果報、世帯佛法はら念佛、口に喰ふが一大事彼奴が喰ふは違ふて、大坂の男に喰付たの、やい其處な虚氣者、在所の男じや大坂の男じやとて喰ふに二ツの味なし、一人の娘に親の身でもむない男と喰をふの、エ、親の思ふ程にもないと涙と流し恨みける、おささも流石親心思ひやれども、二世のけて交せしとも捨られず、唯のみ様のお情と頼みますると斗りにて、同じ泣ひて居る姿、眞法も不憫さに親仁の云分理が聞へた、去ながら彼のささが病者で、在所方の荒働と一年と續くまい、身に藝もないこの銀の湧く手と持つて居る、二百目近ひ給分と唯の女子にのこふの、廣い大坂に男養ふ商賣とは彼れらが職、五人三人は針一本で樂々と過す手と持ちながら、山家在所へ頼ひに往ふとは、無分別のと思はる、此談合は取ひいて、ささは此眞法にとんと預けて置てたも、此方の家にも子飼の者候る者がたんと有る、能い婿取つて後々は親達も大坂へ呼ぶ様に仕て遣ふと、念の入たる割口説、由兵衛扱は彼のささと我等へ隠居の心當、日頃の念願成就と是親仁、隠

居様へ任せて在所は變がいたがよい、此由兵衛も旦那の蔭で、安東寺町に手も擴ふ商賣し、手代の一人も遣のふて今日の様な變態に、二兩三兩遣ふも皆親方の光り、未だ女房と持ぬはらみ様へ、とんと任せて彼方の媒約待て居る、らみ様のお心で此方と私が婿對に、成るまい物でも御座らぬなふおささ左様じやないと、云へどもおさは胸盛り、何様やら知りませぬと打傾ふきて居たりけり、太郎三郎一々に聞届け、おさめが申した分ではさらく胃の腑に落させぬ、らみ様のお御意ではつき致した御尤もく、親方の嫉らるゝと申すに先は幸一門中、何の子細も申すまい此上はおさめが縁附は、何様なりとも最ふお暇と立んとすれば、由兵衛分別顔にて、是真法様、是は大事の請取物おささる若い人の事、後日のもや／＼驚し／＼ちよつと親子に手形させ、おさが縁付真法様のお指圖背くまい、外から一言邪魔させまいとの手形が取たい物と差込ば、真法打領さ、是は由兵衛が云ふ通り手形と取つて置たい、夫でも父様無筆なり明日でも私がおみ様へ手形して上げさせふと辭退する程由兵衛、いや／＼たとへ無筆でも判がなくなれば筆の軸、手形は我等筆取と煙草登の硯引出し、はや書つける挑灯の蔭二郎兵衛見すまし聞すまし、ヤ、彼奴が極めて手形させ

八

らみ様賺してささ／＼貸ふ分別、此判させては一大事何とせふぞ、石と打て挑灯と打消してのけん、石と尋ぬる其間に手形の文言思ふ通りに書濟し、是宛名は菱屋四郎右衛門様真法様、親三田村太郎三郎、印判と云ひければ御念が入つて忝ない、私の荷が下りましたと、巾着の印判くる／＼と、おささ我身も判とすや、いや私は印判持ちませぬ、左様なら父が裡判と、同じくすへて真法様、いよく頼み上ますと差出せば、く是では此方も如才がならぬと、珠數袋に納むる内二郎兵衛藩の石とあげ、由兵衛目がけて打石が油板に當つて一はづみ川へさんぶと水散て、由兵衛一縷り夫や暴れ者が石うつはと、立上る所と續けて打てば由兵衛が額を當つてあいたし是は危し、皆々屋形へささる乗つて戸と立やと、無理無休に舟に乗せ親にも早ふ去つしやれ、負債さつしやれなと云ひければもいや／＼是は目出度、おさが嫁入の談合に石打とは吉左右、目出度御座ると云ふ小鬘にはたと當れば南無三寶、こりや何様じや目出度過ぎて目が出たと抱へてこそは歸りけれ、額も續けて打つ石に提灯も打破れ、由兵衛も敗もうしおささに心有る奴が、威儀のはくふ紛れない船頭船とやつたも、久三おじや、此奴と踏んでくれふまのさつしやれと上ると見て二郎

兵衛横へされてぞ歸りける、由兵衛久三大汗にて何方へうせたくと、橋へ廻れば年頃なる浪人侍、髭奴の草履取何心なく來る所と、己奴覺へたると久三郎奴を橋へ横なげに、眞向と四ツ五ツたゝみかけてくらはする、主人是はと立歸り久三と掴んで打つけ、踏つけく踏む所へ由兵衛駆つけ、爰にけつゐるのよふ舟へ石打つたと、掴み付く手としのとり取り、何さ石打たとは誰が事、慮外者めと云ふと見れば歴々のお侍、まゝ御免なりませ、人違で粗相致しました御免されて下されませ、お慈悲で御座ると泣叫ぶ何のお慈悲と捻上げ、向脚とはたと蹴返し是奴賜の出る程此奴踏め、任せておけると土足にうけ、うなよく身と打せたす、覺へて居ると胸骨尻骨うんと踏めばぎやつと云ひ、うんと踏めばぎやつと云ひ目玉も出る斗りなり、もふよいはく、死ぬ程にしておけさ、此方へ來いと主従は優々として歸りけり、命のらく由兵衛あいたくと起上り、久三其所に、お聞へぬぞや、今の様に踏居ると見て居やる等は有るまい、此方が聞へぬ、此方故に最前くらはされたり踏れたり、お振舞喰ふた斗りに言れぬ人の肩持て、阿呆くさい振舞が戻つた、御座れ戻ると立上る、其方は切て振舞と喰ふたが、此方は物入ふるまふて、わけくにした

りの踏れた、向後響應致すまい、御馳走が身の養屋、酒持つて尻踏れたと獨言して歸りけり

中之巻

本町や新物店の若衆は、女とも見へず男なりけり女子交りの針仕事、つい一針が永き世の縁の端縫しどけなく、尻も結ばぬ糸櫻統ひのゝる太甚さよ、二郎兵衛は在所より戻つた顔して二三日、仕事は常より精出せ共ささに拗強言倭言、乾反し直し上下と盤にのけて打けるが、是は糊加減の悪い袴じや、よそくの人の心の様に、彼方へはひつたり此方へはひつたり、移り易い胴根性なふおささ殿、此方が頼てるみ様の肝煎で、安東寺町へ嫁入の時、此袴と婿殿に着せたらよる、其夜お石打れて小鬘先割れぬ様に、抱締て居さつしやれいの、おささ殿やいのおささ殿う、チのしましい、巳や蟻じや御座らぬ、是此私が仕立る布子も、誰やらが氣によう似て、なんば直に縫ふても横へくといきゐる、開分の無い物は此方に似合ふ着さつしやれ、私等が氣には入ぬと云へば、氣に入らずは打破つてのけたがよい、お打破つてもだんない、夫は何様して打破る、まづ此様に打破ると、権振

あけて打盤ととんくく、何處やらの男とよそくの女と、渡らぬ先にとんくく、
 とんとんとぞ打にける、重手代口々にやい／＼はたへな、夫向ひの出現世のら旦那のわ
 せる見へぬのと、云ふ所へ四郎右衛門は、眼病に毒とは知れど渡世の世話、なんと仙臺の
 注文は仕舞たる、秋田の荷と積たらは今橋へ往て銀請取りや、ヤト庵老は未だ見へぬの、
 下庵が見へたら灸とせふ女子の手が薬じや、さきに點へて貰はふし二郎兵衛に助手さしよ
 、手のふるはぬ様に仕事しまへ、残りの者は出現世へいけと云ふ所へ、物もふ濫川下庵御
 見廻申すと、つゝと入ればすお出る待兼ました、先是へと上座へ通せば下庵、今日は廿三
 夜なれと一向宗はか搦ひない、明日のらはつせん土用前一段とよふささる、をれ脈と見ま
 せふの、愚老の申た通薬、陰となさるゝの、さうふ脈がよふつた、玉子とまいる暇し
 に左の脈がふはくと打まする、魚の中にも鱈などは大らん物、兼て無用と申したよ
 りや喰ひはなされまい、右の脈があたさちなは若し桶木をどは巻らぬの、風氣もなし點
 と致そふ硯々と云ひければ、奥で點と頼みませふ、是ささ二郎兵衛、油火灯して灸ともみ
 、先二三ひねつて置やと打伴れ奥に入りける、あつと云ふて二郎兵衛行燈灯しつ土器

あふり交出して揉んとするときは立寄り胸倉とり、是あんまりじやぞや酔いぞや、先度
 のら染々と物云ふ間も無い故に、心底が語りたさ傍へ寄ればびりしやのと拗強の有じやう
 、安東寺町とは何事じや、マ嬢らしい、是なふ誰しも此方の年衆では、十六七の振袖
 と好このも最中に、四ッも五ッも年長の私に惚て下された、私や其心に打込で親兄弟も捨
 たぞや、在所は生れ古郷なり兩親の傍に居る物が、往ともない筈はない何の由縁に大坂に
 、執心はなけれども此方と云ふ人に離れるが悲さに、お主と欺し親に背き身と狂はす心と
 、可愛やとも云はずに面白そうに拗強、死んで見せふの死兼は仕ませぬ、二郎兵衛殿と
 抱さつさ聲とも立す隠し泣、二郎兵衛もしはくと、こらやくと背中と撫で共に涙と流
 せしが、先度の手形の文言は、何様ぞくと云ふ所へ、下庵奥より立出る、是はもふ
 お歸りなされませすの、されば歸らふの、まそつと遊んでやひとぎやらの相伴せふの、やあ
 るいと煙草盈引寄する、二人は艾拵へながら此首尾に語りたし、早ふ去ねがなくと
 腕けと去る氣色なく、なんと灸行言つけは無つたの、冷寒の素麴の、なまな茶漬位にな
 らいつと戻つて寝てくれふ、内證知しやと云ひければ、ささは悦び差心得、旦那様は海賊

で夜喰はあがらず、卜庵様へはつい茄子の浅漬で、茶漬進せと内儀様の言つけ、早ふ歸つて御寝なつたが増しで御座ると誰せども、何じや茄子の浅漬じや、一段よのらふ。夫れに出花とつけたらばと茶臼形になると見て、おきさる呆れ寧ろ泊つて御座んせと、佛頂顔に二郎兵衛艾に火と付庭の隅、卜庵が石駄の裏物は試と煽ぎ立煽ぎ立てぞ煽らする。呪咀は理外にて卜庵氣にや徹しけん、是は不思議千萬、俄に宿へ歸りたいも往まじよ、滅多に往たふなつて来た、ハチちつとお遊びなされませ、いや〜俄に往たふなつて足の裏がこそばいと、塵に足とすりつけ〜降ければ、二郎兵衛石駄とちつくと直し申卜庵様、旦那の眼も直りま升灸が早ふ驗ましたと、云共我身の上とは知す、卜庵が名人御覽あれ、一柱で驗が見へまじよと足の腫のさび惡げに石駄擦せて歸る、旦那の出来ぬ間に手形の文言早ふ聞たい〜、去ればこの文言は何様やら讀でも聞せず、宛名は菱屋四郎右衛門様貞法様、親子が印判しましたと語れば二郎兵衛はつと驚き、由兵衛めが文言と聞さぬは曲者、娘さよと由兵衛殿へ遣はさふと書たやら知れぬ、日比和女に心と盡す由兵衛め、何様こけても已奴が爲のよい様に誓たは定、三田の親仁も粗相な、手形の文言吟味なしに判す

ると云様な、是後の邪魔とは其手形、必ふを手形と盗んで破つて捨たい物じやと云へば、荷且にも盗むと云ふは恐い〜、錢銀の手形の慾徳になるにこそ、朋輩由兵衛との色づく旦那に損徳のらぬと、何時も彼の算筒に手形を置く、鍵はそこらに見ぬぬの何の爰等に置れふぞ、おる様のみ様旦那様、三人の外介さまへさへ持されぬ、何時ぞ序にのみ様頼み文言見たがよいはいのと、云ふ所へ四郎右衛門なんとささ二郎兵衛、艾が未だ出来ずは向ひの出見世へいて、女房共にも擦つて貰へ、更ぬ先にしまひたいとよじや〜氣がせく、あい〜灸も皆出来ました、御勝手に遊ばしませ、そんなら爰で斯う向いて、それ二郎兵衛菓子盆、あられ煎豆さんせうに、こふ圓敷けと捨くるりと灸のば、前と後に目は見へす何とせうとも願いて、くすり〜の灸ばし痴話の便りの薄煙り、十四の灸に水が湧く盛りの女盛りの男、手としめ身と撫で口と寄せ、誰と忍ばんさしも草是を因果の皮切なる、やう〜灸もすへおるす主人の帯の前巾着後へ廻る紐とけて、繋ぎし鍵は巾着より半分こぼれあゝりたり、二郎兵衛見つけて、算筒に指しきさに目成せ、天の與へと取んとす〜は嫌じやと手と振れば、大事ないとて頭ふる、手とふる頭ふるひ〜、手と出し

手と引くから猫のおきとひらふ危ぢや。申し旦那様熱くばらと押へましの、いふ熱うは
 ないが精がつきた、よい加減にかきたい、さちつとでござんす夫最些じやく、夫やよい
 はと鍵引出は狼狽て、はしの灸と取落す熱やく、もふく是でしまはふ奥へ往てら
 と寝よう、二人ながら休んでくれ能ふ仕てくれた過分なと、悪事と知らぬ主の慈悲、仇と
 なつたる身の果の冥加に盡しも道理なり、二人は顔と見合せて鍵と取りは取たれど、主の
 目と晦ませば胸が慄ふて恐ろしい、誰ぞ来るの番しやと合せて見たる箆笥の鍵にあたるも
 地獄の錠前と、明て捜せと衣類の外は三原の合口時代の印籠、箱に入しは蓮如様の名號
 合點のいふぬ、手形箱は何時土藏へは入らぬが、戸棚に入たる知らぬと常見覺へし戸
 棚の鍵、なんの苦もなく戸と引明け捜せば一通上書に手形と有り、忝ない是が欲さの
 狂亂と、釵さくニツ三ツにひきなき、懷中に捻込で跡しまはんと爲る所へ、門と明けた
 は誰ぞ、だんない者と由兵衛上り口までつらくと、陸と見るより二郎兵衛戸棚の内へ還
 入ば、ささは前にひつそふて、由兵衛殿の、上らしやんせと後手にそらく戸棚と錠にけ
 る、由兵衛とつくと見澄し、旦那は灸となされたげなと、つくと上つて是やなんじや、大

事の鍵も取散し箆笥の口も明て有る、是かさ退や、此世間物騒に戸棚の錠は何故か
 さぬ、左らば錠も腰につけ錠とあるして置ませふ、マシやんとなとあるす錠の音、内に響
 けば指入る心地さはわなくくと、直に死たい計りにて前後にくれてぞ見へにけ
 る、由兵衛ささが手とむす取り、是かさ、先度舟へ石打れた其疵が是未だ治らぬ、此
 打人が知れました、今夜旦那の戸棚へ入た盗人と同人、定めて此方も助けたらふ、戸棚
 と明けて沙汰なしにして遣り、旦那の耳へ入らう此方の心一ツじや、なんとくと云ひけ
 れば、手と合せて懸みする、日頃は恨も有る等と打捨て其詞、生々世々迄忘れませぬ一
 生の内此御恩、何方してなりとも送りませぬと鍵貸んせ明けましよと、取付は押退け、
 マラまいこと云やんな、何時ぞくと今迄釣れたは何十度、此以前貴様が津山玄三殿に奉
 公した時より惚て居た此由兵衛、是非思ひと晴さふなら、和女の口へ手拭捻込で、寝る術
 も知たれども夫は戀とは言れぬ、此戸棚が明けたくば此首尾にのちよつと、身と汚して
 下されちよつと、取付は突放し遁て廻れば追廻し、抱付く所とわた面倒なと突倒し
 、由兵衛の生首生、文言知れぬ手形に能ふ判とさしやつたのふ、今其方と寝たらばなんじ

や戸棚と明てやらふ、忝ない嬉しい、夫が嫌さに此苦勞云ひたくば言や大事な、二郎兵衛殿と此ささと念比と仕て居る、戸棚の中なは二郎兵衛私も科は脱れぬ、靡ぬ仇に訴人しや生畜生の死畜生と、所存極し涙の体由兵衛聲とたて、若い衆は出見世に、盗人が入つたぞ久三や竹は宵の口、何所に居ると呼はる聲眞法始め長兵衛權兵衛、皆跣足にて駆付る由兵衛威丈高になり、是御覽あれ、旦那衆の腰と離れぬ此鍵と盗み出し、彼の如く箆筒と明け戸棚と明し所へ、身が来るを見て戸棚の中へ逃こんだ、所としやんと錠かゝるした中に居るは二郎兵衛、手傳は此かさ証據人は此由兵衛と、出来し顔の腕捲り、ささは涙に性根もなく、内外の者ははつと斗り顔と眺めて居たりけり、眞法鍵と腰につけ四郎右衛門は最ふ寝てる、旦那に聞せて兎も角も思案か有ふと有りければ、由兵衛先町代と呼びにやり、宿老殿へ報せて町中挑灯繩と棒よとひしめければ、奥より由兵衛くと、手と扣いて呼はる、わいと答へて奥に入れば、四郎右衛門小手招き次第とつくと聞届けた、子飼と思ひ肌と免し扱もく憎い奴、炙の間に錠取る、恐ろしい仕方、去ながら己が聞ては六のしい、夜中にわやく町内の外聞も能らず、外へ物さへ散すば己が聞ぬ分にして、濟し様も有

ふこと、何云ふても夜が更る二郎兵衛めは籠の鳥、其分で戸棚に置き、ささめは今夜請人の姉めに急と預けにやりや、急ては粗相も有る物とつくと分別して見よふ、女房子供が恐がらふ直に出見世に泊らしや、手代ども、向ひへ、母者は爰へ来てお寝みなされと申し、其方も歸つて明日おじや、必ず何にも穩便に宵の中に皆寝さしやと蚊帳に入れば、由兵衛元の所に立出で、夜中に旦那のお耳に入り眼病に障れば如何、何事も明日の事これ長兵衛權兵衛、太儀ながら此かさ証據人の姉めとに、急度預けて直に出見世へ往て寝や、ささ立と云ひければ、申しかみ様参ります私身は構はねども、二郎兵衛に科の無い段は中譯の有る事、おゑ様へもお取成萬事頼み上とする、盗人の名と取り是が悲しう御座んすと、わつと泣出し送られ行く目もあてられず不憫なり、眞法機奥へござつてお寝み、我等も明日早々久三も表と罷ふしめて、夜裡に寝やとて出ければ欠伸と直にあくと云ふ返事、眠たき夜なる聲廿三夜の代待や、門の通りは未だ四ツ、内は静まる燈火も心も細く更にけり、物の憐深さこそ後生願ひの心なれ、人も寝入て眞法は寢醒の床と起出て、戸棚の傍に差足し、こりや二郎兵衛いきすりめ、聲聞きたる阿呆めと、ことくと敵るるれ

は地獄で地蔵に逢ふ心地、このみ様のお耻しや、庖丁でも薄刃でも柄と服て戸の間うら、
 密と入れて下されませ、お馴染だけのお慈悲ぞと泣聲漏る斗りなり、や死る程の性根で卑
 しい事と爲る物ると、袖と覆ふて錠鍵の音せぬ様に戸と明けて、其所へ出かれ町人と云ひ
 年寄の婆なれど、菜刀でなり共己が首は切て遣ふと、故意と詞とあらゝるに叱られてしよ
 ぼくと、這出る帷子も汗にひたりて、暗の間に顔も瘦たる酷らしさ、流石子飼の主心叱
 る心はわきへなり、思はず涙と流さるゝ、二郎兵衛顔振上げ、眞法様面目も御座りませぬ
 お主の罰と罰りにてはたと俯伏し泣さけるが、御存じの通り今迄に一錢掠める我等でなし
 、氣も遣はねども耻しや、ささと念比致せしと由兵衛めがれたにこみ、何かな見出そふ
 くと言言知れぬ手形と書き、ささ親子に判とさせ旦那のお手に入し事、いかにしても覺
 束なく此手形取ん爲はあり、戸棚の内ぞ微お聞けば旦那のお耳へ入らぬとやら、何事お耳
 へ入れずに済む様に頼み上まする、彼の眞直な旦那殿お心の蔑視が、首切るゝより悲しい
 と隠居の膝と載さく、塵に喰つさ泣き居たり、やれ其言譯は己が心の了簡よ、主の涙の
 巾着あけ室内の錠と盗み取り、此だゝそれた言譯がでんとぞもや立べきや、由兵衛が我

儼な手形とは見たれども、其場は其日の亭主方無與と思ひ其手形は、とふに破つて捨たぞ
 やささめと、己と夫婦にして末では世帯に嫉んと、此年寄が苦に持たも斯う破れては水の
 泡、何程慈悲がしたふても理と非には狂られず、目の明ぬ主と由兵衛なぞが言立ては、朋
 輩共も氣がふれて跡で人も遣はれず、己に不憚もつけられず、思ひ切てささと由兵衛にや
 れ、時には四方圓くなり其方も茲に勤よく、主の恩も送らるゝ己が心持次第、池田の姪の
 中にては女房には事のぬ、ささと遣るの何様するぞと、我子に意見とする如く叱つ泣つ
 割口説、二郎兵衛も唯泣入て、暫時返事もなかりしが、一々のお詞聞入れぬは、畜生に劣
 る二郎兵衛なれども、あつと申して御恩はよも送るまい、元服も致したものと丁稚よりな
 と押下て、差でもない事言立お踏ぬ斗りに擲たき、虫でも堪忍なりがたき無念と泣き泣
 りしも、お家のお影で一日もささと一所に住居とせば、由兵衛が面と踏返した同然と、思
 へば今日の奉公も心まわしう勇しに、やみくゝとささめと涙し是や見たのと云ふ面が見て
 居られぬの口惜や、さふも私は堪えまいと無念涙は目にあまり、袖と喰切り我身と掴み身
 と慥はして歎きしは、心底道理にむざんなり、いや申す程お主の慮外、兎に角元の戸棚

に入り彼奴が致した通り、錠とあるして下されませ直に籠へ参らば、是今生のお暇乞御恩と報せぬ段は御免有つて下されませと、遣入る所と引出しやれ思知らずの物知らずと、腹立涙の隙よりも十二の歳より飼育てし、二郎七の昔忘れたる、三日にあげず煩ひて迎も用には立まじき、去せくと人毎に言ぬ者もなかりしと此婆一人じやうとはり在所へ戻さば死るは定、眞の慈悲とは此事と十八の春まで、呪咀薬よと孫子にもせぬ世話として、四郎右衛門も物入させ、やうくと人になし、別業共も嫉む程人に勝れ目とつけしに、籠ひつに入る時菱屋の婆が阿呆盡し、盗人ひたて親方は眼病なり、身代わけるも知ぬと四郎右衛門まで誹せても、己が一分立てたいな、御堂のあさじ参りにも、女子共起して苦勞あけては後生にならぬと、己斗り伴しに明日より朝に参られず、願ふ後生も願はせぬ淺ましい氣が附初た、此家に馴染ば犬でも猫でも眞法は酷いめが見ともなく、可愛さにこそ口たけ、此上にも我と立て己が情とじやうふたて、死たくば戸棚へ入れと泣つ感しつさまくに慈悲心余る涙の意見後世に入たるしるしなり、二郎兵衛聞き入れてや伊尤もく、今合點参つた、思切て由兵衛にきさと遣りませふ、夫が定ふら誓文立て、來月は母の

七年忌、此頃取越致した此母と、奈落に墮しませんと跡先知らぬ誓文の、ひとつは罰も當るべし、テ、出来いたく此家久しい重手代、由兵衛と張合て勝て負と云ふ物、何事も眞法が美しう濟して遣ふ、二階へ上つて最ふ寝めと戸棚の錠前しと、おろし阿呆めがかささ斗りが女房の、彼の様な洒落者より、おむくむくの手いらすと抱せふぞ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛とて、奥に入る心殊勝に哀れなり、二郎兵衛夢とも誠とも氣もうつとりと成りけるが、左もわれ彼の手形隠居の破つて捨しとや、今破つたは何じや知らぬと取出し、合せて見れば南無三寶、七貫五百目上本町の家質の手形、此晦日に元利残らず相濟む替、テ、テはつと明たる口も何に塞がん身の罪科、一災起れば二災起る、雨雲の空恐ろしく、よろめく足元判の破れと引寄せて、合せて見繼いで見て繼に繼れぬ命の難儀、とふも生ては居られぬ死るとも生るとも、きさは離さじ離れじ物、先此家と脱殻のひよろつく足と踏留めく、表へ出る中の間の合の戸密と明ければ、竹が蚊帳に丸裸身蚊と焼く紙燭めいくたり、テ、邪魔な爰と通らば咎むべし、テ、如何せん何と扇子の一煽ぎ、はつと消れば、悉し、僧の風めや火と消した、今夜一夜は蚕と蚊に此肌と手向るじや、あつたら物と久三でも

おじやらいで、二郎兵衛殿と云き殿挨拶見れば羨山しうて耐らぬ、此方も盆には在所へ
 いて、あは畑でしげると、ころりと寝たる音斗り郎の聞はあやなしや、漸々と門口の貫の
 木堅き家の風、鍵は久三が預りにて、朝比奈ならね門破り詮方つきて立居たり、預けら
 れたるさまが身の出ては姉の迷惑と、知れを夫の懐しさと、分て別なき割菊の紋の風呂敷
 引包み、菱屋の門口櫃の穴覗いても音信は、蚊の聲ならで便りなく胸臆死して泣涙の、内
 へ微に聞ゆれば二郎兵衛も櫃の穴、顔と寄れば髪の中の香の梅花の薫はふきさる、おいの二郎
 様の、語りたし事斗り愛がとふも明られぬ、此戸一重が關守と互ひに身とすり氣と踏き、
 泣くより外の事ぞなき、浪花橋の辻に寝し犬一疋吠ゆる、聲につれて方々より七八疋、
 ささど威して吠立る、恐ろしなんども詮方なく、放れがたなく門口に獲取付て立たりしが
 、中の間の竹目と醒しおれ久三門にいうふ犬が啼く、何も無い起て見や、おふと答ゆる
 寝聲の返事、夫やこそ久三と云きは東へ、二郎兵衛は中戸の影に隠れける、久三は例の
 編絆一ツ桿棒提げ貫の木明け、耳門開いてつとと出で、なんにもないもの非人がな通つ
 たの、来い〜〜と呼ば犬共尾と振ゆる、蒸暑いが外へ出れば極樂の西風、忝

ないと涼む間に二郎兵衛、積重ねたる染地のひの絹、晝反解いてくる〜〜身も頭も眞
 白に引包み耳門とぬつと飛出れば、なふ悲しや幽霊じや、幽霊よくと逃こみ門口はたと
 鎖す、危なや地獄極樂界と筋のら是れ愛と、招かれ寄りて何事も先此近所と退いての事、
 あては無けれと南の方人や答めんくる〜と、絹も包む世と包む、其風呂敷の木綿巾身
 のなり果てこそ

二郎兵衛おき道行

下之巻

一ツとやひとつ涙の灘の糸落ちて三津の川となる、二ツとや筆もあれし我心書て後世に
 留めたや、三ツとや見たや聞きたや故郷の親の生顔夢にだに、夢さへ見せぬ死での夢醒て
 はいつら此娑婆へ、歸りこんどの歌入は女夫連でと約束の、盆正月の十六日と待ち樂みし
 我々が、哀地獄の釜の蓋開と待べき罪人と、呵責の責はよもやその、愛しいこなた可愛そ
 なた、脱すまいぞや脱さじと絶り抱よせ泣姿、答めて吠犬の責此世に地獄見せけらし、是
 も思へば親の罰私に親よりお主の報ひ、育てられたるお情けや後生願ひの親方の背にや和

諸夜中にや念佛、早辰夜中の月しるの空と力に東堀、澄行水に影映る我身の濁り耻し、耻
 は暫しの浮世なりとも戀とする身の手本町とは、二人が心ひとつに米屋町とも思ひ計りて
 彼生七生助ある、おれが殿御は日本おろの唐物町にも、稀な男のちよきりこきり小女房
 、花の様な和子設けて、久太郎町とてやがて寺入久寶寺町、其豫言もいつしのに空寝の
 夢の馬喰町、誠に私もこなさん後には親ののれ残る、老木の老の世はさのさまに願慶町
 も空ごとや、安東寺町も子故の闇に迷はせません不孝の罪何と脱れん淺ましと。又引よせ
 て泣く涙袖にさし来る隣町や、長らぬ世に長堀の樂な世界と心おら九之助橋や是やこの
 、瓦屋橋とや油屋の油しめ木の音に聞く、おそめに染めし久松はいつの時雨の一平洗へど
 落ちぬ戀衣、世にひろがりし浮名とよそに誦ひしことの葉や、其油屋の一節も隣月油が身
 の上に懸る涙とこぼれそひ、明日より同三味線に法の灯し油屋の回向となすこそ哀なれ、
 ひとつ有さへ惜き世に今宵限とはりづめや、命ニツとニツ井戸深い縁とて死にたいも皆罪
 障の大和橋、あの千日に立つ煙無常の雲のさつき雨、降ぬ先にと死に場尋ねて露にしみつ
 く帷子、肩と裾とはおぼる花色腰に弘誓の舟に帆掛て、妻に磯馴の松原是と最期に京橋や

ら西に川口舟の帆柱、此處に惠比壽の松原松のくろみる雨雲の、降らぬさきとて道急ぐ早
 曉の旅人や、死に行くものよは知らいで人の浮世渾口曲もなや、知らいで人のよは知ら
 ずや人の浮世念傳も頼もしく、傾く月と知る邊にて空と拜めばおちのたに、とるるくと
 遠くなるとの海のと聞けば、あれくよそに轟く雷鳴の落ちのる共、我妻と避て涙の袖
 おほふいや我は男よそなたとと、互に覆おははれて今死ぬる身も生身には、目に恐ろしき
 稻光野なの水に飛ぶ壺、御堂の影はまがはじと歩みよるく足た、ぬ惠比壽の森にぞ着
 ける、二人は松の下蔭にぞうと座と組み泣けるが、男は氣弱若者、譯もないことした
 はいの内に居る時はしりのさきの薬刀でなりとも一人死ねば能いもので、死ぬるに連と拵
 らへて旦那には事欠せ、家の名と出すと云ひ、女房の親兄弟に難儀とける大肝やつと、
 死類とまふられ日頃立てた正直も無になり、よしない者に縁ふれたとそなたも世間の評議
 にあふ、許したもやと斗りて涙正体なりけり、なふ死際送玉様に私が事思ふてあ
 嬉しう御座る、忝いと供に打伏泣きけるが、左れども夫は愚痴じやぞや拵好こそは大きれ
 なれ、昨日今日の前髪と姉と云ふても大じないきさめが酷や殺したと憎みは我身一ツにて

と諸共に一度に息絶へ目と塞ぐ、桁丈崩ひし死姿、乃に伏すは古手にて、これ心中の新巻と聞く人回向となしにける。

今宮 心中 終

心中又ば氷の朔日

近松門左衛門作

さりとても戀は曲者みな人の。地金とへらす焼釘は敲き直ひて意見して。焼直ひても悪性の酒と色との錦や。煮ても焼ても噴れぬは鉄橋焙煉鉄火箸。其癖細工は器用にて精さへ出せば二人前。せねば釘貫抜てぬく讀書かな文鐵挾。兎角万能一れん物鐵鎚こたへぬ糟釘で。後は吹わけ鞠ふく鍛冶屋のてこの衆。てつららりころり。てんくららりちんからり。ちんくららりと打わけて。帳面斗り合に合槌。いゝな打出の小槌なり共。續くべき様なおりけり。弟子子大勢遣ふ身は油断させじと旦那のら。灰まふれなる灰ねこの顔振わけて。まゝ虎が涙の兆が見へて空が曇つた。五月廿八日雨三つふでも降ねばとぬ。女房や子供が不動参り氣の毒や雨に逢ふ。仁介でも長三でもちやつと傘持て走れ。大降がそるならばおつまが帷子濡そふより。八分ぐらゐで蓑籠とかれ。女房にも足袋とぬぎやと云へ。雪駄と腰に挟むとも新しい紙遣ふまい。釘包んだ古反古一二枚持ていけど。そこく氣のつく職人の。金出来す氣ぞ格別なる弟子共は不肖顔。雨が降ふが雪が降ふが。平兵衛の供のらば氣

遣は御座らぬ。堂嶋新地観川茶屋くら屋煮賣屋で。鍛冶屋の大盛平様と。誰知らぬ者もな
い平兵衛殿。傘の五本や十本と借のねは仕やるまい。私等が持た傘では。お山衆の濡のけ
は堪るまいとて動かねば。親方利右衛門やいこりや。又しては汝らが誇りはしりに兄
弟子の申言と云ひやる。平兵衛めは是の見世と任せる程の久しい者。なんぼうでも身
どうつて仕損ふ者でない。平兵衛が真似したら汝等當が違はふぞ。同じ様に己等が文の使
ひも仕とるげな。違立たも知て居るあの邊は人とする。甘い餌に喰附お山の味と喰覺へた
ら。夫限りに退出すと苦々しく云ひければ。いゝく私や文持てたつた一度。仁介は先度
も違立てお山喰ふて来たげな。おの人の虚吐やる我がこに喰ふたぞ。我身先度いや
らぬ。おん山寺の開帳のら平兵衛殿と新地へいて。喰ふて来たど。なんど云やらぬ。
あゝそれはの平兵衛の茶屋へ連れていて。旦那様に云ふまいなら甘い物喰はせよとて。主は
奥の座敷でお山と喰やつたそふなれど。私は端の上り口で鯛の蒲焼ばつり。お山は口へ
も寄せなんだがめいよな鯛といふ物は。喰へば喰ふ程お山が喰ひたふなつてくる。さ
な物じやと笑ひける。親方も返答と他へそれたる鐘の音。てんく天氣も照降雨に五十余

りの女房の。とつて置とば濡さじと嬉しや此方そふな逆。走り込しは誰でござるぞ何方の
らぞや。御免なりませふ。大文字屋の利右衛門様とはあなたか。北野鉄砲煎餅三郎兵衛と
申す者の女房。こなたの若衆平兵衛殿一寸呼び出して下されませ。中々や。平兵衛は
今日のや娘が不働参りの供として。こなたの近所へ往たが今に戻る。煙草でも香で待
つしやれ茶進せやと云ひければ。お精ひなされますな。平兵衛殿とはふとした縁で念頃
に致しあひ。今では親子同前。とふに内方へもお禮に参る善なれども。夫婦の手はつり
の商賣。手があけば口があくで自づからの御無沙汰。今日は平兵衛殿に用ついで。内儀様
にもお目にあらふと存じ参りました。是はどの手焼の鉄砲煎餅。さまに進せて下さり
ませ。皆平兵衛殿の朋輩衆が暑い時分に熱い仕事。御太儘でござんせる。あれく辻迄平
兵衛殿お供して見へます。お系様をふなと云ふ所へ内儀娘平兵衛が。差掛傘の印にも新
地平野屋墨ぐるに。櫻の丸の花の露花の車もなまめきて。人々歸れば戻つた。雨にあ
ふて氣がせのふな。いやく平兵衛の近附多ふて傘も借たり休んだり。ゆるりくと観
川の新地と。おつまに始めて見せましたと。語ればおつまもなふ父様平兵衛の案内で。美

しいお山衆とたんど見て來ました。さ、そりやよい慰み一段く。北野の煎餅屋のお方平兵衛に逢ひたいと。先にから待てじや噂土産がある禮といや。煎餅屋殿も先内へと亭主は奥に入れれば。おゑ様でござりませう。今日は宿にかりましたら。誰いお茶でも上まじよものお残りおはやと挨拶す。さればの事平兵衛の念比と。おねく咄し家も知てるまする重てうら寄りませふ。あれみなおこゝの時分じや。先内へそれ平兵衛。馳走まやんと人おいよく。皆々奥へぞ入にける。平兵衛あたり見廻し傍へ寄て小聲になり。なんとしてござつたぞ今日立ながら平野屋で。小ゐんにちよつと逢ふたれば物案じ顔して。今夜中には非共ちよつと來て下され。ひよんな事ができましたと。跡先もなふ云ふたれ共供の事なりや二言と聞らす。あふと云ふて戻つたが。どふしたいはくじや氣遣ひな。万事こなたと頼んでよく。何事ができたぞと恨み顔にぞ見ぬにける。女房も早涙ぐみ、道連れ。去ながらついで云ふて濟ぬ事。せうすと様子と聞らつしやれ。今迄はわしが身と。小かんの肝煎取次のことなたへも秘したが。眞實はわしが姉の子現在の伯母姪。父親は播磨で應匠頭の奉公人。五十石に五人扶持二本指た人の子なれ共。親ごせが殿様の御秘藏のお鷹とそらし。お氣

に逢ふて浪人しあの子と大坂へ。伯母と便りに何方へも仕附て呉れと登されしが。折節悪ふ不仕合こらの夫の長煩ひ。やうく本復めさつたりや一昨年の大地震。私はきじやくで床に附。身代どもも立兼既にのまどと破る處。あの子が私等に隠して肝煎頼み。堀江の茶屋へ三年と十二兩に身と賣て呉れました。私は聞て目とまはす夫は男の腹とたて。身を貧なれ大坂三郷隠れもない。鉄鉗煎餅三郎兵衛か、が氣色が本復して。千年百年生よふが大福長者にならふが。女房の姪に身と賣らせ其金取て立物の。腹と切るとて喚られたと可愛やあの子が涙と流し。伯母様許して下さりませ。國の父様母様が浪人でなければ。こなさん達へみつぎの筈。其ならぬが悲しさに私が身と捨ました。他人でも有ることか伯母は親の片はれ。こな様達ばのりじやない。國にござる母様への孝行と思ひます。伯母様と母様と私と思ふてゐますと。病はふけた伯母に抱附て。聲とあけて泣やつた顔。今に忘るゝこともない。其蔭で人參の百服余りも飲た故。病の根と抜此様に身代の尾もみせず。暮そは小ゐんの孝行故。こな様元は知らぬ人小ゐんが最愛がる人と。云ふて互の念喚わひ。命と助け身と助け姪ではなふて親じやもの。如在にせいと云やつても。私等に如在はな

ものと。恨みがけくで聞へぬと。透りと忍びまぐくと。泣くをきてぞ語りける。平兵衛手と合せ。余り氣遣ひ切なさに恨みらしい詞つさ。眞平／＼御許し。こなたと伯母御と云ふことも。小のんがいふて知つてゐる。先此度ひよんな事できたといふが氣遣な。落つてせて下されと猶氣とせくこそ道理なれ。マさればいの。内々國の親御せへ茶屋奉公はらくして。大坂の歴々の奥様へ預けた分。所に今度小のんの兄御。殿様より呼返され御奉公にありつられ。それもへあの子と國で縁につけるとて。乳母の息子の乳兄弟が。昨日の朝おつや様迎ひにきましたと。幼名いふて登つて安治川に宿ととつてゐる。こちと夫婦は當惑して。様々思案して見ても。今で請出すあだてはなし。耻と捨ていふたらば國の迎ひが難屋敷で。つい銀と調のへ國へ連れて歸らふし。時にはこなたと縁切れる。どうした物で有らふと小のんに問ふて見たれば。いとしやあの子も泣入て。國へ歸つて親達の顔も見なふはござれども。平様に一寸も離れふとは云ひますまい。協はぬ首尾に極つて國へ下るが定ならば。私に見事に死する伯母様と頼みます。國へ遣すに平様と長ふ添はせて下されと。歎くもいとしと道理なり。恩と受けた大事の姪は一つと思ふても。手わざにいぬぬは銀

事國の迎ひは早ふといふ。あの子はさふじやと氣とせさやる。詮方つきてこなたと議合に來ました。三年と十二兩一年半は勤める。變つて半銀六兩なれど。ひき日の何のとつさり七兩は入ませふ。私の方で二兩二分は身の皮脱でも調のへましよ。まあ四兩二分あればあの子としやんと請出して。こなた様と疾うら夫婦にしたといひなし。國へ遣るとも夫婦づれ婿入させて濟せ共。其四兩が見へぬ故大事の姪が望みも透す。死に生も出來ぬまいと思へば胸も塞つて。今朝は稀粥ばかりで何も喉が通らぬ。是程しきで御身様へ身代打明け咄すこと。耻しい口惜い無念にごさると。手拭も絞る斗に泣居たり。平兵衛はあと吐息とつさばて扱思案に行わつた。私も近年彼故に旦那の懸錢も何もあも。まやちらさんばら近附中に痛手と負せ。動のれぬ身になりし故。少借錢と輕めん爲あちな商ひのらくんで。三兩余りは今日明日に請取る等の約束。はてはうはつら此銀と請取次第遣ませふ。二分や三分の足ぬ口夫は其時さふもなる。何とぞ首尾して。小のんと手へ入れる様に。頼みます。國へ下るに極れば此平兵衛のら死にませる。二人の命と助ける慈悲本の後生に成りませふ。伯母様偏に頼まると又手と合せ泣ければ。いや願ひ事ではござらぬ私が身に掛つた

事。其銀さへ調へば何の案ずる事もない。ちつと胸が開た平野屋へも立寄て。小のんに云ふて落つるせふ。そんなら早ふ歸りましよ。内方へも能様にと出れば。是々此傘小のんに返して下さりませ。なふ／＼是は幸と差て出たる傘や。どらが涙も引のへて牛天神ののべの露。消ゆる間近き命なり。見送る道もしみづさし。草鞋に編笠の田舎商人二人づれ。平兵衛殿いかい暑さでござるの。誂へ物共出来ませふ。今日受取て銀も濟し明日下り度と云ふ。いかにも／＼上物は皆出来たが。急な細工が支て中ら下の並物が揃ひにくい。銀と先請取て出来次第に跡ら下しませふ。銀と持てござつたの何程持てござつた。四兩おしもござるかどそゝるに高とぞ聞たがる。いや上物さへ出来たれば並は違ふて大事ない。誂への分算用は今日残す仕切て。腰のうちがひ取出し。先度手付に一貫文渡し。今三兩三分。相場は金六十目。錢十五匁合二百四十目。しりけの代に引がないこなたの方には是が徳。ちよつと一筆請取して出来た分下されと。いひも仕舞ぬ半分聞き三兩三分にづのみ付。是でござつと濟みまする。まわ二分や一分は伯母がとふぞ仕やりましよと。我斗合點の數もよむやら誂ぬやら懷中に押入れ。請取でも手形でも起請でも。仰付られと硯紙

取出し是旦那様。上物の裏金二千足戸棚に有ふ。取出して下さりませとぞいきりける。亭主は裏金束ねながら持て出。平兵衛が咄して聞きました。大和の雪駄屋殿は各で御座るの。是はあはぬ細工私が聞ば請取まいに。平兵衛が在所から。念比中じやと申てとこでやら請取た。重て斯は成りませぬ夫おつまお茶進じや。あいと返事も色づさしあゝるの茶碗手にすへて。出花一ツあげましよと差出せば。是は／＼忝ないと取らんとせしが。いや／＼お茶は吞ますまい。御無用になされと云ふ。お前はいやならお連様。いやわしも御免なれ。平にお一ツあがりませ。何しにお辭儀申しましよ。兩人ながらお茶は吞たべませぬ。そんなら白湯でも上ましよ。いや／＼所望に御座らぬと。いへばおつまも打笑ひて愛想もなふことやこりや仁介。煙草盆持てこいとて入にけり。仁介が奥より煙草盆鍛冶屋炭火のこり立。有る火はといて懷中より火打に火口打出し。煙草のひ身は石の火の。光りの間も待らねて身の程知らるゝ墓なと。亭主是に心付。何も大和のお衆と有る。ならこはり山おんでめて。吉野郡の奥迄も雪駄屋衆は皆存じた。御兩人の御在所は。何方と問へど聞らぬ顔。あちらへすべらし縋ららし只名所と秘すにぞ。平兵衛も親方に根問させては悪か

りなんと。請取は仕舞たり渡して早ふ戻しましよと。取らんとすれば亭主押へて。此商ひはせまいはい。銀請取たら早戻せ始聞けば請取らぬ。あの衆は大和の金銀たんと持た村の。牛馬迄持つた様々の衆の詭へ物。此利右衛門は請取らぬ。我等が家職に疵がつく。勿体ないと撞さらへひん抱へて奥へ入る。先待つしやれ夫では私が立ませぬ。損のいく細工でなし銀に一厘不足なし。手付取て手形して渡す段に變成して。職人が立まそか様子が有らば有る迄。夫なら私が内證の自分仕事にさせよ。時には家に難つゝ疵が附ば平兵衛が疵。渡さねばならぬと取付所と突倒し。はつたと白眼でうつけ者。疵が付ば平兵衛が疵とは舌の口で吐した。此利右衛門が目老るにして。弟子手間取とも引廻す已に疵と附まい爲よ。京御所方の御普請の下細工の釘請取。火水と清める最中に正しふもない銀と取。伴ひつきの己がささいきせふと思ふの。冥加が有ふと思ふの。五兩に足らぬくさり銀寶の山と惜みとる。根性の甲斐なで商賣がならふか。けつく丁稚の時分には人にも成らふと思ふたが。そこくに立ぬ根性と涙と浮め齒をしみし。向ひ隣りへ聞てへぬ中。銀と戻して去せとれと。怒りけるこそ尤なれ。平兵衛至極に詰れども。懐中の銀に離れ難く。よふ

ござる今の間に私が打てやる。地鉄は後で算用と横座に直つて足鞆。地鉄打くべ吹きたてく。丁稚ども朋輩の好みに相違ひとつ打てくれ。平兵衛が一生の思に受ふと頼め共。親方の顔色みて。誰の詞の相違さへ打者とはななりけり。平兵衛恨み泣き。そこふはせぬもの聞てへぬな。うぬらが草臥眠たがる時には。己が代りとして二人前と働らいて。背のら寝させたり休ませた恩徳と忘れたな。よい顔せぬとせよ。裏鉄の千足や二千足平兵衛が肩腕。半日の仕事に足ぬ親方朋輩ひとつに成て。此平兵衛が一分すてさせ。此首尾なら死ふも知れぬ死だらば此一念。己等が首引扱てとてこくとつてらこくとてこくと打鎚に。落る涙も溢れそひ湯玉とたぎる斗なり。親方土間に飛でとり棹鉄挾取て投げ。朝晩清める鉄床に涙とかけける罰あたりと。棹の柄とみつ取直し胸骨と四ツ五ツ。たゝきつけ。汝が敵は此銀と。懐中に手と押入れは銀と返せば云分ない。此方には請取らぬとこぞ外で詭らやと。投返せば二人の者詮議無益と思ふ顔。手附の一貫覺へたか。平兵衛重ねて取に来ると。云ひ捨てこそ歸りけれ。平兵衛わつと大聲上。近邊も耻す歎きしが。去とては旦那殿さうこうなしたかひたてと。可愛が定の憎いが定の只今の詞は。弟子子不便な

云ひ様で又此仕方は平兵衛に。首縊れどのなされ様鍛冶の道一通り。火と清めるといふ事は商賣なれば知つて居て。其上でする商賣一旦はさも有れ。一生主に逆らはず詞一つ返さぬ。此平兵衛が是程迄逆らふて申うらば。身拔のならぬ譯有と。大目に見て下されて。其御恩と忘れる平兵衛めではなき物と。但銀と引こんで損懸ふとの氣遣の。年の切は去年明さ身と質に置のらばお氣遣はない事。平兵衛が身一生生る瀬の死ぬる瀬の。大事の銀に行詰りやうく大和の宿村が。誂物と天のあたへ。時の間と合せ度奉公して十八年目。始めて旦那に叱られぬ身にはぬ金は。命と捨つるも世のならひ夫に悔みは殘らぬ共。額に毛質もあてる者見世の前で晝日中。町の衆道行く人友朋輩も見るぞのし。丁稚小者とする様に曲もない打擲さ。背骨は折ふが碎けふが。打たるは痛くない。隣れと知らぬ親方殿。見て居て打するおる様やおつま様の情ない。お心の鉄槌が身節にこたへ染渡り。いたい悲しい恨めしいと泣いては恨み。恨みては我身の科と悔み泣き。色に迷ひの心の闇押し置られて不便なり。親方彌く腹とたて。鹿とおふ狸師は山と見ずとは汝が事よ。お山狂ひに眼がくらみ。人の理非も身の上も一寸脇が見ぬぬよ。汝が身の立ことならば彼等に

に商ひする迄なく。五百目や六百目は此利右衛門が出しぬぬ。道ふてもく止りの知れぬ悪性金。氣儘にさするは汝が身に毒飼と云ふものよ。内外の者も町衆も三人寄れば汝が評判。聞いて無念な親方の心の内と推量せよ。さきにも仁介長三めが。噂ととると叱りつけ今で彼等に面目ない。去年の春のらさばくは。或は百目八十目懸の算用不埒にて。何時の際か帳面のさつぱり濟んだ事がある。夫のみならず堺筋の絹屋のら。紺縞子の女子帯五十六匁。緋縮緬八尺三十五匁と云ふ書出し。覺へが無とて返せ共跡のらは持て来る。不思議な事と思ふたに。今日と云ふ今日内の噂が緋縮緬の正体と見届けて歸つた。勿体ない冥加ない灰まふれの鍛冶屋の仁藏。身にさへ着にくい緋縮緬に。足と四本踏こんで其罰はなんとせよ。身の行末が可愛ひと。聲とあげて泣ければ。女房娘諸共に。悪ふ聞きやるな平兵衛と共に袖とを絞うける。罰利生有る親方にて涙とどいり。こりや平兵衛云ふて居ては果しがない今迄の事は皆許す。是のら魂入のへ世帯と持て出る迄は。茶屋の見世へも揚るまいお山と詞もかはすまいと。急度誓文たてふならば此度の金たどへ四兩が五兩でも。今出して取らするがきなんと云ければ。平兵衛飛退り兩手とついで頭とさげ。申か

る様おつす様。旦那様へ詫言して御禮申て下さりませ。道知らず思知ら大悪人の私に。金
 迄出して此難儀お救ひにあづかること。親も及ぬ主の慈悲今日は祝ひ日。廿八日御縁日不
 動の刃に喉笛と突通され。身の家職の鉄床に打みしやがる。法もあれ。又や二度悪性ごと
 ふつゝと思ひ切ましたと涙と流し云ひければ。マでかしやつたゝそれが其方の身の果報
 と。皆々悦びほめにけり。親方も機嫌と直し。流石男じや満足した。此上ながら此方の心
 の落附ため。誓文の證據にと三尺斗の棹鉄の。夕日の如く焼けたると鉄抜にて引出し。鉄
 床にぞうと直し。是は此度禁中様お内侍所の釘下地。此内侍所には日本の神々御ばん有り
 八万余座の神の司の御寶殿。其釘になる黒鉄。今の誓文偽りないと見る前で鉄火と握れ。
 心に誠ある者は水よりも冷やゝなり。少も偽り有る者は胸焼けたゝれ落ると云ふ。佛神に
 嘘はない其方も發起して。今の誓文立るのらは熱いことは有まぬ。マ握れと云ければ。平
 兵衛色変わり。只はゝゝと斗にて後退りにぞ成にける。女房笑止がり。マ愛なるうらたや
 る。思ひ切たが定なれば鉄火に怖い事はない。但は當座まかなひに念取欺しの空誓文の
 去とは悪い合點一生の病とぬき。身上の固まる事さつぱりと思ひ切りや。思ひあふた馴染

の中離れがたない筈なれど。それは一度の皮切なんぼ愛しい戀しいも。身が立ねば協はぬ
 ことと思ひ切られぬか。マいやおふの返事しや。とふぞゝと手詰になれば。平兵衛頭も
 心もうるゝと否と云へば主人の慮外。おふといへば年月の。小のんが情仇となる。思案
 涙に胸つまり。なふ旦那様おる様おつす様も頼みます。其の返事は私が身に成代つてぞう
 なり共。思ひ分て下さりませ。鉄火は御免と斗にて。うつばと伏して泣きければ。親方も
 是迄と焼鉄退取り大地へぞうと投げつけ。マ欺された偽られた十八年此方。たどへ犬猫飼
 たり共是程にはよも有るまい。半時も内には協成ぬ叩き出せと飛びかゝり。胴骨とぞうと
 踏む情なき丁稚共。柄長の鉄棍手々にとつ取り目鼻もわかず打出す。平兵衛大聲わけ假令
 御ふが叩のふが。此平兵衛は是の内より外往き所はよそにはない。死ぬる共此内より直に
 死ぬると。駆入と敲き出し走り入れば敲き出し。なんなく辻へ打出し打て清めの盥水や。
 跡は火と替水と替表ものもる備後町。へりも切れはて縁切れて。とこ離れ行懸路なり。

中の巻

懸草の種うへん迎のためしは。神の佛の堂島ときて見よとてや田々の橋。夜々と重ねて大
 心中又は水の朝日

江ばし。はしのゆきげた雪ならば。いくたび袖と拂はまじ。花のふくさの櫻橋。梅田のみどり會根崎の。青葉隠れの鳥の音も。法華長屋の名と立て。神祇釋教無常。中にこめたる中町や其家々の吉野川。流の敷の多ければ。よねが情のはなの潮。梅ひとられぬ人もなし。色里に誰が身の樂で身と捨る。人はなけれど取わきて。平野屋小のん一さまは。語るも聞くも哀なり。今日は六月朔日の正月納めの紋日ぞと。思ひくしの場の客小のんは田舎の侍に。初手は内にて二つめは濱筋の和泉屋。さが、許へと出うけたる。女子亭主の譯よしが穂長の煤と打拂ひ。人に情と掛鯛のむしり看と春めかそ。其のさもちの氷より。涙の氷どけやらぬ。うき身の上こそ無慚なれ。あれく勝曼参りの妓様達御籠が戻ると云ふ中に。早表まで昇よせて。簾打わけこそが様。今下向しました小のん様爰に。こなさん参ると云はんしたが。道寄せずにおとなしう。早ふ下向さんした夫も合點。早ふ逢ひたい人があるぞ。さめき戻る御籠の數々。衆人愛敬愛染の。ひとつも見へて頼もしく。さがもそれく接接して。松屋丸屋河内屋の。妓様達も此方の場で参らせました。遅いことやと云ふ所へ。程なく駕籠と昇入る、皆様緩りとやらしやんす。道頓堀でござんしよの。

よすいく三十郎の初日見て。芝居では大酒戻りは駕籠でむしたてる。熱いことく此暑さでは震亂して。信田森のうらみくす水。一ッ飲しやと喚きしが。小のん様。御身は参らすの定めし夕平様と。手と引あふて、御さんせよ。小憎いことやと云ひければ。小のんはつと肝にしみ。そうした事ではないはいな。今日の客は一げんの田舎の侍。日が暮て見へる等。うれ造は愛染様へ参らふと覺なれども。心に大願有る故に提灯二ッ紋付て。今日の間に合ふ様に一昨日のら詠へ。今にも提燈出來次第参りたふござんすが。提燈の出來ぬのも氣に掛りまそといふ所へ。提燈屋の息子走てきて。小のん様爰じやげな提燈が出來ました。二ッで四匁四分じやと云ひ捨てこそ歸りけれ。嬉しやくさが様つい参つてませよ。面倒ながら四郎兵衛殿。此提燈の紋の勝に。書附して下さんせと云ければ。料理人はお易い事目出たう一筆みしらせよと。提燈のぐれば紋なしに。眞白四郎兵衛與さましこりやとふじや。四匁四分で白提燈氣轉の悪い提燈屋。ちやつと紋と書せてこふと走り出れば。是々もふよいはいの提燈屋に罪はない。私が佛にうけられず。願の協はぬ知らしめそふして置て下さんせ。やがて梅田へ行時にとふで入らねば協はぬと。浮世とすねし言葉

のはし。一座の妓や下女久三仕直に遣たらば。多分晩のじわひにならふ。歸らぬことは侮まぬもの云ふて歸らぬく。云ふてな歸らぬ死出の旅。飲悪ふと祝ふても。定まる前世の約束と脱れざるこそ哀れなれ。平野屋の小めらうが風呂敷包うちかたげ。熱やとて走り入り。さが様ちとお目借と耳に口よせ。内儀様のいはしやんす。小うん様には。鍛冶屋の平様と云ふ間夫のお客が御ざんすが。様子あつて逢せませぬ。晝うらちら〜此邊で見へます。門より外へ出します。行水もそこで頼ます。氣と付て下さんせと呷き散し歸りけり。小うんははし〜聞附てさが様今のは何のこと。平様の事であらふさりとては氣の毒な。先の方は親方持淨名が立ては職人の。身の爲に宜らぬ噂人の云ふは皆悪口。私夫の何のと云ふ様な深い譯では更々なし。今でもふつと見へたらばどこで密と逢てや。此方うらんと時明て手と切て退ましよ。口には云ひて目は涙さがは五音で推量し。そんな事氣に掛て此勤めが成もの。世間の口に戸とたて、錠あるす其錠は。如何な鍛冶屋の平様に誂へてもなるまいと。夕暮近き入日かけお客様達見よふぞや。行燈の用意しや甜瓜も冷しや。湯もどつてたも小うん様もお行水。私も汗と流るふと奥に入れば一座の色。私らも行水してこふと皆々表に出にける。空も涼しき夕風に。流行今年のいののぼり雲に舞鶴どんびいか。から風招く唐團扇鬼の頭も色里の。うへにわがればたよ〜と。まだれ上る藤の花。誰ふみいの一結び。其思はくの紋つけて。袂すしき小袖いの。杯いかの品もよく。菊や牡丹の花簾と。戴さあぐるたいこの。鰻瓢箪鮫いの吹ぬ風もつ扇いの。雲とるるに異ならず。往來の人も立留る。此内に彼の人の見へよのしと紙鳶見る顔で表に出。上下に氣とつれば。梅田橋の西詰に淺黄縞に深編笠。あれそふなが夕顔の。黄昏たざる覺束なさ。先にも見付て編笠の下目遣ひ届ねば。心の中に招き合目はいかのぼり。爪先は其方の方へ行水の。橋の詰までそろ〜と。跡の恐さに身も慄ひ。傍へ寄り寄つたれども。人目にせかれ抱付れず。文と見てから私が氣は。死んで居るぞと手りにて。泣くにも涙落次第拭ふも人目つゝましや。男は笠のうち情れ。親方も道理の勘當是以て恨なし。和女と國へ下さずは親に不孝の冥罰。行末善らふ様もなし下したいも一坏なり。別るゝは猶愛し此平兵衛が胸一ツで。本國の親達まで歎とらけ苦とのける。許したても悪縁じやと。笠と傾け泣き居たり。あれやう〜と忘れて居たもの。親の事又言出

して泣きしやんと。打るゝ杖も床しいと云ふものと。拳一ッ當られず可愛がられた現在の親。是はさんげじや忘れぬ。迎に來たは乳兄弟顔恰好は覺へねども。親達と思ふて見たけれども。町方に居る分に言成した私が身が。ばしやれた容で逢れもせず。親の事と思ふやらこなさんの事思ふやら。心と推して下んせと。又さめくと泣きけるが。是ではすはといふ時に國へ心が引されて。未練の出來まいものでもなし。こな様に逢ひ次第死んでのけうと覺悟とすへ。髮剃は身と離さぬは見さんせと。袖口のら手と引入れて懐中の。髮剃の柄包みながら。男の手にしつゝと持せ持添て。南無阿彌陀佛と我腹に突立ると。腕取て引たくればこりやなせに。もふ逢ふとはうどんげこなさんの手で死にたいと。呟き口説を辨れなる。はて悪い合點なまだ人立も有る中に。思ふ様に死とふの其心底に極らば。まそつと爰に吟行て日の暮るに程はない。人顔見へぬ時分に足と限に何處でも。見事に身体と並べたい。ひらに待やと制すれば。おなじくは今爰で些とも早ふと。死神の勝負命の墓なまよ。和泉屋には小ゐん様くと呼はる聲々。南無三寶最後の邪魔去ばとばかり平兵衛。堤とありて身と何とぞび畑に隠れけり。和泉屋の男共門に出。そこに何してぞ屋内がな前

と尋ねて。太鼓鉦がいらふとしたと言ひければ。マ仰山な涼がてらに紙鷲見に出た。太鼓鉦がいらふとは朔日早々祝ふて貰ふて忝ない。太鼓鉦もによう鉢も頼ていらふと涙ぐみ。跡に心は殘る日の影と入つゝ暮にけり。空にたなびく紙鷲次第くと引下す。中に小袖の絹紙鷲風と含みて下うねしが。糸真中よりふつゝと切れ。和泉屋の小座敷の軒にひらめき落たりけり。あれよくと云ふ程こそあれ。紙鷲主大勢引連れて貰ひませふと駈入れれば。あたり近所の血氣者。それ通る物のと走りこむ。道行く人は是次手にお山見べしに込入ると。内の者共押へても我人差別あらざれば。天の與と平兵衛群集に紛れ奥座敷の。庭迄とやくと入りける。小ゐんは見つけ氣とあせる。兎角する間に漸と扱ひ詫言たらしくにて紙鷲と貰ふて立歸れば。皆入込の大勢も殘らず表に出て行く。小ゐんは男と招きあげ違ひ棚のづし戸と明け。夫と押入れすはと云ふなら此方ら。南無阿彌陀佛と聲のけふ。それと合圖に其髮剃で。私が助と襖越にぐいと剃て。うんと云ふたらこなさんも尋常に死んで下さんせと。戸と引立て寄のゝり口に鼻歌心には。彌陀の名號一筋の紙鷲の糸より猶細く。切のゝりたる玉の緒の。結び續れぬ二人が命危くも又無慘なり。はや家々に行燈

おげ面々約束の。客も見れば酒肴吸物にそる蜷川。水も色めき賑へり。小のんが揚の侍も一僕連れて。何とおさが遅らつたの。小かんは来ての腰のくる。是はく小のん様は今朝のら待のねて。たんと腹と立てじやふられさんすな。恐いといさ先奥へと伴ひける。小のんは色と曉られじと。此永い日とうつりどよふ待ぼうけにさんした。南の堀江のさつと吟味も仕たけれど。馴染が無いだけ許してやる。其だいに酒肴すと挨拶もおしませの。袂と戸棚に打覆ふ。北野の伯母は二三日夜も寝ぬ目元とぼくど。和泉屋殿は此方の。平野屋の小のん殿とちと呼立て下され。北野鉄槌煎餅と云へば合點。頼みますと云ひければ。さかも日頃は薄知の座敷に出てしなく。呷さ。ちよつと立て逢しやんせと。云へども跡の氣遣に棚の傍も離れがたく。座敷へ伯母も呼がたく。どよの斯らと思ふ顔客は見とどり。これく。我等は一見明日は國へ下るもの。お客衆でも苦うない。是へお呼なされと云ふ。いや私が伯母様咄したい事が有る。自由ながら其間端へ立て下さんする。何が扱く。咄の時分は立ませふ。近付にもなる爲早ふ是へと言ひければ。さが打笑ひ粹かな。當世は田舎衆程氣が通ると走り出て。これ伯母様お客へ断り申た。奥の間へ通らん

せ。それなら斯ふ通りまじよ。何れも御免なりましたと奥の座敷に通りしが。客と云ふは國本の迎の人。伯母ははつと尋りにて。小のんはわの人見知らずの。あれこそ和女の乳母の子乳兄弟。今度の迎に登つた人よ。知らなんだ耻かしや。いや和女より伯母が耻。此勤する事國の人に見付られ。最早言分ないはいのど。伯母姪ひしと抱きつき聲も惜ます泣き居たり。侍鎮めて是々些ども苦のらぬ事。親御達御浪人とは申せども。國では賤しき業もならず。大坂は誰知らず如何なる身過なされても。名字に疵は附ぬとて受悟の前で登されし。夫へ他人は差置て乳兄弟の拙者が参る事。御内証の耻耻辱承つて能様か。計へどのお迎ひいらにしても此間。伯母様の詞といひ萬事合點参らぬ故。客と偽り方々と聞合すれば。平野屋の小かんは鉄槌煎餅の姪の由聞届け。徳念の爲一昨日表向の御一座稚顔疑ひなしと藏屋敷にて金調へ。今日晝の間に堀江とやらんの前の親方。平野屋亭主も對談し。本金十二兩相濟し一札取て今宵のら。自由の御身に致したり。最早氣遣ひあそばすな私は乳母が悴。和田傳内と申して家中に若徒仕つる。おつや様と御同年稚名は石松。五ツの頃迄は夜晝お傍に附添ひ。一所に遊び育てられ七才より男の身は。大身小身隔てなく奥

へ参らぬ武家の作法。互の顔は見忘れても乳兄弟なり主従なり。私迎ひとゆるならば耻も
 耻辱も振捨て。御息才な顔面見せて下さる筈なるに。お心途が變つたは些と御恨に存する
 と。待泣にぞ泣き居たる。伯母涙にくれながら去とては面目なや。何もかも伯母が科、あ
 の人ばし恨みやんな身と賣せたも我もへ。此度國の出世に付下るは其身の仕合なれど、あ
 の人も大坂に思ひあふた方ありて。深い約束のがれぬ中、其方に隠して金調へ伯母が力で
 彼の男と。夫婦になして年月の望と遂て遣たさに。身とはたいても煎餅屋押ば碎ける身代
 の。そこと見せたる耻しや。此上其方が心入國へは能な言遣て。あの子が大坂で彼の男
 と。添るゝ様にはなるまいの道々登つた乳兄弟。能らぬ事と聞するも皆此伯母が身の因果
 世の中の浮沈、子と賣る親は多けれと姪と賣る伯母は我斗り。恨しの娑婆の境界やと。聲
 とばかりに泣きければ。小のんも共に涙に咽び。知ての通り胤腹一つの兄も有り。妹もあ
 れど如何なる縁にの母様の。私一人が秘藏子で。海にも山にも譬へられぬ。御恩と上げた
 此身なれば。明暮逢たさお床しさ身体は大坂に残つても。魂魄は母様の懐に入てゐる。
 是程に思へども生中武士の娘とは。薄知に人も知る。免れぬ義理にのらまつて。大坂の土

どならねばならぬ。其方に任する兎も角も煩ひとなりとも。いつと絶は死んだとも。何様
 なりとも云ふてたも。其方と頼む此儘お大坂に置てたも。國へは否じやと手と合せ。拜み
 口説も哀れなり。傳内わつと聲とあげ。兎角も言はず歎きしが扱もく淺間しや。口と心
 が皆違ふた氏より育か耻らしい。華美輕薄なる身に染り。うはの空なる世にならひ。親の
 事も古郷の事も忘るゝ程のお心には。いつ成果た情なや。心なき畜類も鳥は古巢と慕ひ。
 北國の馬は北風に嘶くとは申さぬか。鳥獸類もそうはない。親ない者は身と樂に旅他國致
 せども。親の墓へ詣るとて百里貳百里戻るも有。此度御國の兄御様。御知行拜領義御達に
 御隠居。髪と下して樂々と御法体の等なれども。かいとしやお母様つやが戻つて。二人の
 親が法体の顔見たらば。なんぼう残り多のらふ。ま一度髪の有る顔とおつやに見せたいは
 つらりに。惜のらぬ頭の雪解も撫るも子の可愛さ。早ふ連れて歸つてたも傳内様頼みます
 と。家來の我等に様つけて待憧るゝ親心。私ばのりすとと戻つて生てござるふの。手
 と出して双親と殺すも同じ不孝人。堅牢地神のいたゞきに釘と打つとの教あり。釘は鍛冶
 屋が細工にて打のねはなされまい。曲もないお心や我等が母はお前の乳母。養ひ君の顔見

んと日と敷へ指とあり。待撞がる、母が心思ひ遣れてお母様の。御心停の悼はしや則ち母御の御文と。懐中より取出し此直筆と御覽あり。とつくと御思案をそばせ。私が腹立も皆お最愛さ故なりと。泣つ叱つ、様々に詞と盡し諫めしは。奇特にも又哀れなり。小のんも母の文と聞き押戴き。上書見ればおつや殿参る母より此方無事と書れしが。お筆に年の老たご十五の年爰へ来て。八年おがまぬ親の顔見たふなふて何とせよ。生身は死身若しひよつと死病うけたりとも。母様の懐しさに臨終も仕損ない。如何なる耻も晒そふかと案じ過しする程に。親の事は忘れぬわんまり叱つてたもんなど。文と顔に押當て消入り絶入り泣きけるが。封目切て見たれども。文体見たらば氣も落て。彌心が引れふす平様に談合したければも。襖一重が七重の關。一人の思案に落かねて暫案じて居たりしが。いやく口で云ふは安い事とふなりとも間に合せ。今宵の所とのがれんと涙拭ふて。こそふじや今とつくと合點した。親には思ひ替られぬ此方とふつと思ひきり。成程國へ下りまじよ。伯母様も傳内も。今宵は歸つて明日早々といふ中にも。起請文と取られしと守袋と後手に。棚の戸と細目に明けそつと入れば。男も心得受取しが二人の心の危さよ。伯母傳内も悦び

御承引添なし。逆もの事に彼の男の誓紙と。只今被つてお見せなされよと云はせる果す。思ひさるからは起請は有ても反古なり。其上誓紙は男の方へ渡して。爰にはないとぞ陳じける。いやく今迄懐中に守袋が見へました。せひにお隠しなさるれば慮外ながら手とりけまどと。云へば男は襖の中。見付られては悪かりなると。守袋と戸の間より小のんが袖に。振ひく返せしはいよく危ふき契りなり。待やく尋常に破らふと。守袋と解く中にも。二世の固めの起請文。破るは佛神三寶の守りも切果た。片時も生て何にせん合圖の最期は爰なりと。襖戸棚に助と寄せ誓紙と披き。南無阿彌陀佛と合圖の詞。さつと引さき身と摺つけ待ども内より音もせず。南無阿彌陀佛と引さいては身と付。引さきく男の刃今やくと最後と待てと。内には疑ふ恨にや靜まつて音もせず。死ぬるとさへ叶はぬは。是が誓紙の罰をとて。寸々に引裂てどうと伏して泣きければ。尤も道理やつれなふ云ふも身の爲と。皆々袖とぞ絞りける。涙と留めやうくと。氣が勞れて頭がうつ母様のお文も見たし些と爰で休みたい。誰も人の來ぬ様に。障子も閉て皆起て下さんせ。道理く傳内も端へおじやと出ければ。申伯母様平野屋へござんしたら。女夫のお衆傍

輩衆。内外の者へも念比に。是のら直に遠い國へ往ます。もふ此世では逢ますまい。年月の御念比忘れはせぬと。つとに頼みます伯母様も去らばと。外に云ひさそ懐ます。さそや障子の薄紙一重。見へざる事こそ是非なけれ。はや臺所も仕舞頃丁稚起して。こりや。安治川の宿へ往て。明日明六ッに乗る程に舟の用意せよと云へ。内衆頼む七ッ過に駕籠二挺。安治川まで約束して貰はふぞ。伯母様は氣がつきやう夜食でもあがりませ。いやなふ此程胸がつらへて。夜食は思ひもよらぬと。歸つて夫にも悦ばせ明日見立に來ませふ。夫なら酒が宜ござらふ。なんの辭義があるものぞ。酒も何にもほしもない開夜と迎りて歸へりけり。傳内も氣くたびれ内衆酒の爛しやれ。一ッ飲で寐みたし。しゆらゐる書付あるならば代物遣んと言ひければ。心得たんはと濱生羨しはがひに花露。書出出し算盤に暫らく時こそ移りけれ。伯母も宿へ行つく頃門と明けて立歸り。なふく曾根崎の際まで往たれば。中町の方が騒しう。屋根へ上れのなんのと云ふ。手過ちの氣遣で夫故に戻つた。さ心元ない内男は退々に走つて出る。傳内刀押取て針卷引締の裾のらげ。身支度しつうと固め實に侍の心掛。奥へ入んとぞる所へ内の者共走り歸つて。氣遣ないく。

盗人そふなが二人連。襦袢の屋根傳ひ中町の辻へ入りて。福島の方へ走つた道通りが見つけて。聲と立て騒いだ分。お騒ぎなさるゝ事でないぞ。云へとも伯母も傳内も先おつや様起しませふと。連立ち奥に入りけるが案の如く小うんはなし。是はくど戸棚と明けつ庭の隅々詮索すれば。着替の帷子引ほき底の樽本に結びさげ。屋根へ越したに疑ひなしなふ悲しや小うんが居やらぬと。伯母が泣く聲落人ありと云ふ聲に。家内の男女驚き騒ぎ扱は今のじや程はない随分遅うけ。死ぬ先連て北野はあんまり近い。死んだら體と梅田は爰じや。町衆遂に御厄介近頃御無心ながらへ走れ。八ッの本鼓がでんくでんばあどがやどやのいたみへいけた。茶屋中組中駕籠の衆國の侍交りしは。鬼に鉄槌煎餅屋の。伯母はとばせへ急ぎける。

下の巻 平兵衛小かん夜の朝顔

よそのつらねも我命も。一よぎりなる愛ふしや。愛身の果は主親の。ばちらのゝりし三味線の。廿二三の糸きれて。殘る一期も暫しぞや。いやは今年のうら露も。哀れ袂のさみだれに。心は今も早月關。木の下關にまぐれて。還へし道も幾度う。同じ所にまひ戻る。

跡にたづぬる願立に。神や佛のひらへ綱。のばす命と知ばこそ。是又元の道なるは。是も今來た道ぞらし。此世のらさへ踏迷ふ。六道の辻覺束な。迷ふまいぞや迷ふなど。泣くぞ迷ひの種ならじ。あれ寺町の鐘の聲。二九十九は七々の七々の知死期。最後も早と來にけらし。狐狽て白たへ屈る鳥垣。仇の響の朝顔も。今咲るゝる花の露。夫より先に凋ひ身は。明日の朝日に此體。干ん曝さん淺ましと。絶る涙のりうこしやに。あひの水さへまのすらん。世の中に絶て心中なりせば。二世の頼みもなからまじ。誰の仕初し此契。音に聞きしは生玉の。それが初めの市之丞。つれて男も名の高き。大和の國や三笠山。笠屋三勝舞の袖。つまどつまど引よせて。結ぶ無常の薄けぶり。千日寺の果敢なしや。別れし跡の寝姿は。夜中の鐘に目と覺し。母よくと乳呑子の。歎きと捨し修羅の道。魂は冥土に到れども。魄となりたる今の世の。おつうは母の形見ぞや。此曾根崎に埋もれぬ。大坂三十三番に。名と残したる普陀落や。大慈大悲の誓にて。ついに兜卒天満屋の。お初も佛なるまのや。道具屋かかめ與兵衛とは。思へば近き町つゞき。世は何事も難波橋。よしとあしとの境解。中に立たる賤が身は。不便と思へ備後町。夫のみならず呉服屋の。手代

半兵衛は彼の池田屋の。小菊にたんと金入なれば。心どんとな者でもないに。身のしゆすこしに氣はちり緬の。見世の帳面皆ぬめりんす。らしやもないと云はしやりんすの。はや人玉も飛さやぬいて。共に刃の諸羽二重の。おなじ枕にふしつじぎ。重ね井筒の懸の水。結び汲む手は多けれど。色は様々紺屋染。胸はもへぎに紅ひはだ。さやけき色は是どこのとくさに染てさしも實に。心中みかく縁のや。花紫に薄淺黄。桔梗花色ちしるがた。紺屋のりの道廣く。到り先達つ此人々と。今身の上の知識ぞと。頼む外には菩提とも。若きは別ちあら人神の。天満の方に見ゆる火は。我と尋ぬる提灯の野邊の螢の。神の御燈の神垣や。神明宮にお暇の後世は鳥居の二柱。二人離れず立添へど。こぼと涙の雨にさへ。千代の老松つれなくて。地水火風の若草は。因果の嵐無常のわけ。時と別たす時ならぬ。夏の枯野に迷ひたる。あかつき露に身もひたれ。帷子襦に纏はれて。歩みおねたる二人が体。是なふ十里も來たる様なれど。また爰に吟行は爰で死ぬとの神明様の。教ならめど泣きければ。この町は老松町。伯母様の家も二三町。伯母様の近くで死したらば。縁に引れて後の世は。親にも逢に藍鳥。藍より出て藍より青く。罪より罪の重らん。來世と待つて

と果敢なけれ。男髪剃取出し。扱も因果な身の果やな。人は高さも賤しさも。死しては出家の髪剃と。頂くものに極まるにその髪剃で死ぬるや。生國は大和たはらもど。幼少で二親に離れ。今は在所の兄より外。一門香族一人もなし。鍛冶屋の鎚の一本立。親兄弟とも頼みたる。親方には勘當うけ。我身ばりの和女迄。殺して一家に憂とかくる此科は。地獄の火焰に輔かけ。無間の底の鉄床にのせられ。阿責の鎚に骨々と。打碎られんは今の事。よし夫は厭ねども和女は國の用ひうけ。六道の辻の愛別れ。是が今うら悲しいと。鎚り付てぞ泣き居たる。愛いと云ふて下さんそな。私とても親伯母の心と背き歎とあけ。幾瀬の罪とつくりし身が。よい所へはよも行くまい。無間奈落の底までも此手は離さぬ。こな様も私が手離して下さんすなど。互ひに引よせ寄せられて。抱ひてこそ口説けれ。母様の文と來世で讀んど肌につけ。封締も切らねども親子は一世。冥土にて阿責に逢ば目も眩み。妄執の雲に文字消て。讀むも此世の名残ぞと。親子の縁も封締も。切て披きし文の中。是なふのしとこふとに節分の。まめで下れの祝ごと。今が冥土の門出と。御存心ないう薄はしや。母様常が血の道持。長文書く事お嫌ひが。子の可愛さかこまんとぞ。

舟の中息才にはや／＼下り。待祝ひたりとあそばせし。父様今年は丁七十の賀の祝儀。一門衆の振舞も和女下りと待受て。生御魂の祝ひ一所にと盆まで延すと誓れしが。盆には我も新精進親子の盃みそはぎの。露の手向を引かへて。戴く我は草葉の影さぞ父母のお歎きと。思ひ遣れて情なや。何事も／＼追付目出たくもじにて。申／＼／＼めで度のしくと止られし。是がなんの目出度いと子と祝ふ親心。無下になしたる身の罪科は。先の世からの約束る二枚重の御文と。金水引にて綴られし水引の紅落て。かつやと云ふ字は血に染みたり。子の血は親の血の別れ。血筋が教へて此如く。先へ知らせの有るうらは。今の最後と物の告。さぞや夢見が悪のらふ。明日は占易夢ちがへ。違へても祈りても返らぬ後の惨言。いとほしの父母や名残おしの伯母様やと。文と抱締め肌につけ。悶へ憶れて泣きければ。男も共に伏沈み。皆此歎きは我故と二人が膝に凭れあひ。咽返りてぞ歎きけるあれ／＼明星様も高々と。明方に程はない此文口に呟へて未來迄も持ます。最後の苦患に離れたら合ませて下さんせ。念佛も心で申すこな様口で高々と。鞠めて殺して下さんせと。文ひん捲てしつろと呟へ。兩手は合掌心に念佛。顔で髪剃教へつゝ早ふと急ぐ目元

にも。可愛男と見終の涙は玉と列ねたり。夫も今と限りの詞さあどばのりに振あげて。見れば目も眩れ二目でも。塞き俯向き南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と力にて。襟引よせて髪剃の。柄杓でぐつと一刀突れてうんと反返り。のたうつ藍の虫の息苦む体に穿も迷ひ。うはい〜ん、うはいと。共に苦む男の心。南無三寶後れじと落たる文とくる〜巻。口押割て合ませ髪剃押取り。喉のめぐりと切さ〜。續くは首の骨ばり。刀で切たる如くなり。その髪剃の返す刃と。我喉管につく息もいる息もはや絶々の。ねなじ枕に死出の山。しでの田長のほと〜ぎす。さ〜に北野の藍はたけ。藍に染めたる魂魄と。回向に色とぞあげにける。

心中又は氷の朔日終

夕霧阿波鳴渡

近松門左衛門作

年の内に春は來にけり一日に。餅花開く餅搗の賑〜はしや九軒町。嘉例の日取吉田屋の。庭の籠は難波津の。哥の心よ井籠の湯氣の大杵。おろせの長兵衛が大汗で。やわあゝ。中居のまんがらす取のさつ。やわあゝ。さつやわあゝさつ。さつさつつけ〜。ハッ木遣で搗やれな。先恵方棚神の棚鏡とる〜遣手衆の。顔にとり粉の面しろいとて妓衆の笑ひ。禿が手折る柳の枝の。春も近づく年も近づく。やがて扉も谷の戸も。出て初音の鶯の。羽根づくろひの君もあり。正月がひの大々盡。太夫様より附届。門と賣る聲山草や。一寸祝ひましよ裏白ゆづり葉。こまめでござんせの春永に。

(此處 缺)

夕霧阿波鳴渡

(此處 缺)

格子へお出なされてより去年の今日まで。伊左衛門様とお二人一度もおはづれなされぬに。今年の餅搗ばつり伊左衛門様は流浪遊ばす。お前は御病氣嘉例とはづす所。此喜左衛門頭痛八百。一寸なりとも呼びましたいと願ふ折のら。今日のお客は四國のお侍。頭巾で頭は見へぬとも角前髪のお小姓らしい。其器量のよさ初心さ。道頓堀の若衆方女形ひつさへても毛もない事。四國西國隠れない夕霧と云ふ太夫に。近付になりたい連態々大坂で御越年。お氣持に構ふとて初對面はれ勤めなされぬも存ながら。呼に進せた流石お馴染の喜左衛門。いやおふなしの御出。身祝ひと申とつと云ふた餅つき。女房も尻餅ついて悦びます。是杉沖之丞。中間へ行って善哉祝や。爰は冷へます太夫様先づお座敷へと言ひければ。私しが氣色も能いがよいにはたねども。伊左衛門様と兩人連一度も欠さぬ今日の

日なれば。命の内に一寸来て伊左衛門様に逢ふ心。こなさん達の顔見たいと思ふ折節。呼に來たと幸に爰までは來した。座敷は氣儘に勤める。爾思ふて下んせ。何が扱お氣任せどふなりとも。にやらまやんせと座敷へこそは出しけれ。冬編笠も垢ばかり。紙子の火打膝のさら。風吹堪ぐ忍ぶ草。忍ぶとすれを昔への。花は嵐の願に今日の寒さどくひしびる。はみ出し鏝も頭鏝て小尻つまりし師走の果。辻散らしく吉田屋の内と覗いて。喜左衛門宿に一寸逢ふ。喜左衛門へ。鼻に扇の大柄なり。男共口々に。彼奴は何者じや。風の神の鳥威しの様な姿で。なんじや喜左衛門に逢はふ。百貫目もつらふ大盡の言ふ様な。捧まのれなと言ひければ。百貫目が夫程賈とい物でもない。喜左衛門と云ふべき者で云ふ程に逢はせて呉い。どりや逢せて呉れふ。此様な目にあはせて呉ふと。竹箒持て掛ると喜左衛門飛下り。ねだれ者のまらぬ粗相すな。誰様でござると笠と覗いて。伊左衛門様の。なんと喜左。是は夢の七ツの。扱お久しや懐かしや。京大佛の馬町に御運塞と承はる。霧さまよりは數通の御狀。飛脚も二三度奈良大津まで尋させ。たつた今もお噂先お馴染の小座敷で。二年積るお物語いさお通りと袖引けば。紙子さわりが荒ひく。

是引けば破れる摺れば跡に師走坊主師走浪人。昔は鎧が迎ひに出る今いやうく長刀の。草履とぬいで編笠の中の座敷に通りが。お寒のらふと喜左衛門。縮緬に紅裏の小袖とふはと打懸る。是は言はれぬ寒晒の伊左衛門。少も苦しうらねども心底と着致すと。頂いて着る有様喜左衛門熟々見て。エ、浮世じや藤屋の伊左衛門様に。此吉田屋の喜左衛門が着せまする小袖。假令蜀江の錦でも頂いて召ませふか。はんに涙が翻れまると目と擦ると見て。いや是喜左。此紙子の仕合さらく無念と存せぬ。惣じて重い俵物材木でも。牛馬が負は珍らしからぬ。犬の猫が負たらば是はと人が手と拍ふ。我等も其通り紙子の裕一枚で。七百貫目の借錢おはてぎくともせぬは。恐らく藤屋の伊左衛門。日本に一人の男。此身が金じや夫で冷へて堪らぬ。此身が金とは忝い。喜左衛門が餅搗に大きな金入れ入なされた。是女房未だ蓬菜は飾らぬ共。先正月の心三寶飾つて持ておじやとて入れれば。内儀はあつと。標に穂長折しく橙糍。密柑や何やのや勝栗お床しやく。久し振りで御無事なお顔お嬉し様やと出ければ。伊左衛門兎角の挨拶涙ぐみ。夫婦の糸が念比に蓬菜と迄氣が注ぎも。夕とも霧とも言出さぬ。はののに聞けば夕霧が身が事と氣病にして。命危なし

と聞及しが。いかふ重いか但無常の夕霧と。消失して仕舞ふたか。歎きとのけまいとて言出さぬか。誓文で泣くまい語て聞しや。泣ぬくと云ふ聲も氣遣涙に濁りけり。いやく是はお道理。霧様の御氣色秋の頃はさんくで。勤めもお引なされしが寒に入て少御快氣。即ち阿波のお侍正月もなさるゝ筈で。今日是にと言ひも果ぬに伊左衛門。さく夫は眞實の。はて詐の誠の隣座敷。覗いて御覽なされませ。伊左衛門はつとせいたる顔色にて誓し詞もなありしが。喃内儀。天地ひらけ始まりて誠ある傾城と。迦陵頻伽の雄鳥は繪に書たも見た者ない。惣嫁の様な傾城めに未塵も心は残らぬ共。知ての通り渠奴が腹ら出た身が悴。然も男子で明れば七歳。もとの遣手玉が才覚で里に遣たとやら。今日來たは其悴が事について來たれ共。定めて里にやつたも偽捨殺してらな捨つらん。阿波の侍と云ふは合點此前我と張合た。阿波の大盡平と云ふ者。つらく思へば傾城買より紙屑買がましじや。金出して此方へ取るものは狀文ばつり。七百貫目か紙屑では富士の山の張買も樂な事。仕合の悪い時は何んで損と爲ふも知らぬ。無用の涙で紙子の袖濡した。繼目が離れぬ先に罷歸ると立んとす。余より御短氣奥のお客は平様ではござりとせぬ。いやく平でも

壺でも此方仕度能ふと立上る。夫はお前の慳貪と申すもの。先夕霧様に逢せましよ
いや逆もけんぞんなら。夕霧より蕎麥切に致そふと。拗廻る其中に奥座敷より手と拍く。
われ禿禿は那處にぞと。言つゝ出る内儀に連れて襖の蔭より差覗けば。二人馴にし床柱凭
れ懸るも形見ぞと。忘れもやらぬ物としは儘に彼の人。何かな機會に座と立て。逢たや見
たやと心もせき背けて對ふ客の顔。然も大名の小姓立風よしの衣裳つき。ばつばの駈箱象
眼鑄若紫の法祿頭巾。懐中より香包名木火鉢に薫らせ。かゝ是へ來やれ。身なんぞが様
な奉公人は。殿の御前に相詰め。偶さか遊興所へ參るも氣晴しと云ふ内に。第一は夕霧殿
に戀有る故。君の機嫌のよい様にお身と頼む。一ツ吞やれ肴せんと。ひらり紙花七九寸木
枕に打敷て。横になる戸の阿波大盡夕霧が打掛に。兩足ぐつと入れれば扱もなめたりなめ
たり。此夕霧に足凭すはこりや些と慮外そふな。夫程足が苦にならば打折て捨たがよいと
。言捨てつゝと立ち次へ出れば伊左衛門。ちやつと寢轉ふ脇枕空寢入して高駈。はつと斗
に夕霧我身と俱に打掛に。引纏ひ寄せとんと寢て抱つき締よせ泣けるが。なふ伊左衛門様
く目と痛して下んせ。私しや煩らふて疾に死ぬる苦なれど。今日まで命生存たは今一度

逢せて下さるゝ神佛の扣綱。是懐のしうはないの。顔が見たふは無いの。目と明て
下んせと。揺起しく抱き起せばむつくと起き。横様に取て投げ。是夕霧殿とやら夕飯と
のとやら節季師走其方の様に隙ではない。七百貫目の借錢負て夜晝稼ぐ伊左衛門。此様な
時寝ねばならぬ。邪魔なされな惣嫁殿と。ころりと臥して又ころりと空朝。お身に覺へは
なけれども恨みがあらば聞ませふ。寢させせぬと引起す。は何とする。此体でも藤屋の
伊左衛門。今の如く奥座敷の侍に。踏れたり蹴られたりする女郎に近附は持ぬ。茲な万歳
傾城。万歳ならば春おしや通りやくと言ければ。此夕霧と万歳とは。万歳傾城の因
縁知らず。侍の足にうけて蹴らるゝと。万歳傾城と言ふぞや。誠に目出度ふ侍ける。然
も足駄はいて蹴るやら年立のへる足駄にて。誠に目出度ふ侍蹴る。聞へたの去乍ら何も
身すぎ。彼の様なよい業には蹴られても損は行ぬ。欲と知らねば身が立ぬ。惣若に御万
歳や年立のへるおしだにて。誠に目出度ふ侍蹴る町人もける伊左衛門も蹴る。蹴るゝけ
ると蹴散らし。是喜左餅でも米でもやつてやりやと。烟草引寄せ吹く煙管の。さらぬ肺に
てゐたりけり。夕霧わつと咽返り。こなさんとも覺へぬ。此夕霧とまだ傾城と思ふて。

はんの女夫とやないの。明れば私も二十五の暮のらわひのり。何年に成る事ぞ。設けた子さへまらつとで早七ツ。誠と言はば今頃は一門中の状文にも。伊左衛門内よりと書ても人の咎めぬ事。私に恨があるならば主様にも恨がある。去年の暮から九一年二年越に音信なく。夫は幾瀬の物業に夫故に此病。瘡衰へが目に見へぬ。煎薬と棟薬と針と按摩で漸くと命繋で遇さるに。逢て主様にあまようと思ふ所と逆様な。こりや酷らしいどうぞいの。我しが心變つたら踏んでば有り置らんすの叩いてばかり置かんすの。是死掛つてゐる夕霧じや。笑ひ顔見せて下んせ拜んます。こ、心強い胸欲な憎やと膝に引寄てた、いつさすつ、聲とあげ。涙亂れて髪はどけわけも性根もな有りけり。伊左衛門も涙に暮れ。チ、誤まつた外にさして恨みはなけれども。命に替ぬ大事の女房奥座敷の若い者。我物づらが憤として思はぬ腹立堪へてたも。我とても浮身の体誠の正体見玉へと。小袖くるりと脱ぎければ肌は袷衣の破れ紙子。四十八枚彌陀の願。つきは平等施一切胸懐ふこそ憐れなれ。伊左衛門涙と抑へ。扱彼の悴は無事で里にゐる事。なんとしたぞと云ひければ然れば其子と里に遣りしと申せしは偽り。儻ならぬお身の上苦勞にさせます氣の毒さ。彼の

阿波の大盡平岡左近と云ふ人と。私どが中の子と云ひかけて塗附て見たれば。人は愚なまんなまどたらされ受取て。腹は飯物武士の種と寵愛にあふと聞くにつけ。身の憂き時はいろくくの怖い智恵も出るものと。語りも敢ぬに伊左衛門へ。然もあらふ事。去ながら我が昔への手代共。其子とつさ立母へ訴訟し。藤屋の家と取立たいとの談合ある。何卒難と云ふて取返す思案が仕たいと云ふ所に。奥より内儀色髪へ喃ふとまじやく。お二人爰の咄が奥の座敷へ筒抜け。お客様は不興顔直に逢て云ふ事ありと。今此處へお出なふ喜左衛門殿こちらの人と。皆々怖がり竊語く所へ客は刀と提げ。是伊左衛門殿夕霧殿。愕く事は少しもない是其証據と頭巾とればつさ出し髪の下笄。籠甲指櫛さしもの粹ども呆れて不審晴れやらす。如何にも不審の立つ筈。男に化たる其間は何んのそのと思ひしが。女子の姿と現はして此中で物申とはおはもじ乍ら。彼の阿波の大盡平岡左近が本妻雪と申すは我身こと。夕霧殿の飯の情連合の子と誕生とて。此方へ請取言はば我が悦ぶ子。腹も痛ます苦勞せず産で貰ひし悉さ。仇にもせず守育て。手習讀物弓鎗までも器用に。國隣の土佐駒ひるせ乗た姿は。天晴平岡左近が世繼。七百石の主なりと御家中の褒め者ぞ見たらふ

し見せたり。一ツはわの子が冥加の爲夕霧殿と請出し。一所に伴ひ暮さんと。心底も聞んため鉄漿落しつゝあらぬ体で。只今聽ば我連合とたらしめて伊左衛門の子と突付た。聞よりはつと胸塞がり。夫の武士は廢つた。ま、恨めしむ夕霧。男に化たと幸飛懸つて刺通し。我も死なふと刀と取りは取たれ共。死んだ跡で此雪が傾城に愴氣して。阿呆死と言はれては彌々男の名と出すと。止まるも殿御と思ふ故。無事さへ云ふ世の悲なさ。阿波の平岡左近ころ。町人の子と傾城に突つけられたと取沙汰し。殿様のお耳にたてば能い仕合せで御改易。阿房拂ひる切腹か死ても悪名消へばこそ。此所と了簡しわの子と其儘下されば。侍一人の取立生々世々のお情ぞや。我人我子は大事の者ことに思ふ人の子と。思はぬ人の子と云ふは何しに心能らふぞ。夫は流れの身の愁さ。侍の妻には又此様な憂事あり。女子と生れし此因果女御更衣に成る迎も。浦山しうは思はぬと。心の底と口説たて。涙わりなき物語。夕霧夫婦吉田屋の一家袖とぞ濡しける。伊左衛門つゝと出。賢女かな貞女かな。左近殿とは夕霧故意恨はわれ共夫は私し。拙者も彼の悴と力に出世の望みとされども。武家のお名には替られず進ずると云ふ迄もなし。以前夕霧が申通り。左近殿の御子息伊左

衛門が子ではござらぬ。ま、悉い夕霧殿も爾じやぞや。はて主の合點の上うらは私しが否とは申されぬ。去年ら命の内。ちよつと見せて下さんせと涙に咽ぶぞ道理なる。ま、心得た。万事胸に込ました身請の事も吉田屋と。近々に談合しませふわの子が成人するに付。伊左衛門殿も樂み。契約の固めの盃。彌々彼子は此方の子平岡左近が總領。さらりくと手と叩て曲輪でさゝんぞ珍らし。日も暮かれば若黨中間駕釣らせ。阿波の旦那のお迎ひ。是下人も忍ぶ此姿。元の男と姿振り造り。頭巾大小印籠巾着亭主さらば。夕霧事は追付是より便宜せふ。万事頼む受込ましたと。膝と折める腰折める。腰元つれると引かへて。駕夫が送る大もんや。口とさこより奥様の深き情や立飯る。

中の巻

春や延寶六年と明渡る世も昔しの京。難波のけさは珍らしき妻子引具し舊冬より。上本町の道場の玄關構へかり座敷。御國の御用新玉の爰に年とる豆男。阿波の國平岡左近と宿礼も。門の飾りに時めさて武家は綺麗ある春なれや。表の物見に女中の聲。申奥様珍ら

しい大坂の正月と。始めて見物致し御國へ歸つてよい咄し。是もお影と悦ぶにぞ。多く其方達が云ふ通り主のお蔭は忝い。御用について左近殿。我々連て僅の逗留の旅宿へ。今朝のら禮者の絶ぬと。皆殿様の御威光。左近殿は源之介連て。天満とやらの神明様へ惠方詣り。親の子辻をほらしい六や七で馬に乗る。追付け左近殿の名代御奉公勤めると。見るであらふと御悦の所へ。旦那のお歸り先供走る黒羽織。すつゝ素道栗毛の馬。のつし巽斗目に麻上下親につゝて源之介。あけて七ツの乳香まふ饅頭なりの中刺も。目元賢さうない松千代と斬る土佐駒に。手綱搔くりまやんくく。響の音ははり、んりん。凜と塵はりし袴腰物見の前と乘廻せば。是々源之介戻りやつたの目出度く。嘸馬上が寒のらふ柔和しい出来しやつた。招かれて源之介申母様。惠方參に天満へよつて。是買て來ました。土人形の天神手綱に持添へ。私が是もつて居るのと道通が見付て。父様と見知てるやら。親は木夫のひ子は天神のふと云ふて笑ひました。己れにも大きな木夫買ふて下されど。あどなき詞に腰元共氣の毒がり。是るるくく目ませすれば源之介。駄賃馬の様に老のくとは不調法な。侍の乗馬は是此様にはい。はいくく親の心も白泡の

ませ。門内へ乗入し振り幼稚におとなし。今の詞に腰元衆口とどちて奥様の。機嫌どうのいふ躰なれば。是々源の咄と聞たの。道通りが左近殿と木夫買と云ふたげな。此前大坂お屋敷役の時。新町通ひに夕霧と云ふ木夫に馴染とつけ。源之介とまふけたは定めて皆も聞つらん。人の見知るも理り大名高家も母方の吟味はなし。大事なとは言乍ら。あの子が心は此雪と産の母と思ふてゐる。必ずく夕霧が子と云ふ贈禁制ぞや。其夕霧とも請出しわの子がお乳に置はづ。傍輩並にわしらやと仰も果ぬに腰元中口々に。奥様の余まり結構過ました。我々が何んぼ沙汰と致さず共。あの傾城のばまやれ者夫と言はずに居ませふの。お袋風て鼻高ふお家とわりたい儘にして。奥様と踏つけるは今の事く。まだ夫れ引りの下地がにやこい旦那様。小むたゝるふ仕掛たらばつりやと喰付て。田も遣ふ畷もやらふで。奥様はうつそり鼻明て仕舞んしよ。小むやくしいわたぶの悪い。こりや御無用に遊ばせと焚付らるゝ女心。言へば爾じや已はいのい阿呆じや。祈りものけたい戀の敵持ていて宛がふは。盗人に庫の番磁石に針。皆に氣とつけられて早もやくと腹が立。後に悔の出るは定請出す事と止にやらふ。皆出來た能ふ云ふて呉た。扱は彌止になされませすか

。はて止にせいで何んとせふ。ゝ氣がさつぱりと成ました。おりん殿能い氣味。我や痞が下りました。お俊殿はなんと。こちや金拾ふたより嬉しいと。身に徳もなき法界悋氣是ぞ女の慣ひなる。あれ北のら十文字の道具。お藏屋敷の小栗軍兵衛様年頃のお禮。御一門の中でも彼人は堅いそりや〜と。物見の簾下す間に早立關に物頼う。ぞれい。小栗軍兵衛御慶申す。旦那幸ひ宿にありいざお通りと言ければ。軍兵衛立關に立て是家來共。御用について左近殿と申合する事あり。暫らく隙が入べきぞ。屋敷へ歸て八ッ時分迎ひに來い。ない。其中少し早くこい。ない。油断するなど入ければ。若黨始め草履とり袂箱皆々宿所へ歸りしが。道具持の榎右衛門。獨り残つて臺所覗き。誰を頼みませふ。飯焚の竹呼出して下されと。云ふ所へ馬取の角介苦い顔して。榎右衛門俯や見事武家に奉公するのやい。此角介が僅かな切米の内五百五十と云ふ錢ととりへた。冬年一言の斷りもせず。今も先身に逢たいといふべし所。竹と呼出しくれとはのぶとい者だ錢の濟までは是ととると錢の柄に絶りつく。さて角介鎗持が鎗ととられては。榎右衛門が首がない。五百や六百で賣る首じやないならぬ。取て見せふと競合最中。竹走り出。角介殿道理じや。錢は竹が

濟す堪忍して下され。ゝ情なの性悪男めや。世間と見て耻辱と知りや小人町の久六は。こなたより若い人入間やの龜とたつた一年念比して。小錢溜て宿持て。冬年も鶴が橋のお老母へ。大きな錢にめぐる添へて据へられた。藤の棚のねち兵衛はこなた程鎗は振らぬ共。お萩のねり衆御番替り人の氣に入り雇はれて。まじやう者と言はれた故片町のふりと内へ呼入。師走に弘めがあつたぞや。是でこそ女房の肩もいるはいの。こなたと言交して明けて四年。給分一文身につけず皆こなたに入上る。夫になんじや能い年して。長家へびくにん引入れ日が暮とはませり。未だ其上に稻荷透りの裏屋小路と覗き廻り。揚句に此頃は夜見世狂ひも付たげな。我とても木竹じやなし悋氣も仕たい腹も立。ゝ憎いとは思へ共。ゝ爾じやない。女子に生れた因果じや。男の善悪と顯はるといど随分私か身と詰め。三度付る油も一度つけ。雪駄履くと草履にし。草履はくと裸足で仕舞。鍋釜の墨前にもこなたの髻に入ると思ひ。能い所と退て置我身の事には元結一筋買はぬは。男と大事に懸る故じやないのい。女房には苦勞とさせ榮耀が余つて色狂ひ。聞へぬ人じやとしめ泣に恨み口説を不憫なる。是茲の御奉公は中途に參つて馴染はなし。お國までもお内衆が悪名立

るが悲しい。此上張の裕と脱ぐ。角介殿これで済して下されと。帯と解らんとする所へお腰元のりん走り出。是々竹。其方の心底奥様物見よりお聴なされ。扱々奇特な。上々までも女たる身の鏡と殊なふお感じなさる。奥様にも少お氣の濟ぬ事あれども。其方と手本にお心がおさまつてお嬉しさ。馴染共思召お褒美に。此鳥百足下さるる。扱角介は慮外な。余所の大事のお道具に手と懸ける狼藉千萬。重ねて此事言出さば旦那様へ仰られ。打首に成さるゝとの御意じやと云へば。天窓角介佛頂面。竹は悦び、冥加もない難有い。兎角お禮は能い様にと頂上頂上。是雄右衛門殿是持て行つしやれ。何と目的に此様に可愛どと譬のはたの百足と。直ぐに男に鎗持に過たる妻がやさしさや。人の情に夕霧が。思ひも寄らぬ此春の子の日と根あら根引の松に。ゐる藤屋の伊左衛門我子の顔の見欲しく。慣はぬ鴉の片はなと隠れて忍ぶ頬冠り。夕霧も簾越子と見る今日の嬉しさより。夫に別るゝ物憂は上本町にぞ着にける。宿札と見て喜左衛門。どなたぞ女中方頼みませふ。とされららぞと腰元出れば。私は九軒町吉田屋喜左衛門と申者。奥様よりお頼みなされし扇屋夕霧身請のこと。随分と駈廻り金子は當月一ぱいに。お渡しなさるゝ約束であいやおふと首

尾なり。只今是へ同道。扱々節季の忙がしい中私の働さ。春の用意正月のお客の詮索。銭かねの請拂としつめての節分。大豆で打出す鬼の首とつた様にぞ申ける。成程奥様にも其お噂。扱は渠が傾城どのの瀧と覗いて。ハッ、けいせんと云ふ者始めて見た矢張當の女子じやと。走り入て奥様。傾城が参りました。さのしましい皆物見のら聞て居た。傾城。云ふまいぞ。今よりは源之介のお乳の人。侍町人の歴々に附逢て。心も至り目耻のしい。粗相して笑はれな盃の用意せよと。ひそめく聲に。左近勝手へ入れれば。是なふ環て申せし夕霧の事。吉田屋の喜左衛門が。埒明け連立来たどの案内。なんと此雪が様な情氣せぬ。氣の通つた女房はござんすまいかと笑はるれば。お奇特。去ながら。座敷に固い軍兵が居らるゝ今内へは呼れまい。表に置ても目にたつ。とふの斯のと思案中途。門前には喜左衛門、いゝふ冷たい。夕霧様は御病後早ふ内へ入れまし。火に成共暖ましたい。頼みませふ。と呼はる聲若黨中間ばら。と。小栗軍兵衛迎ひの者と。奴の聲揚屋の聲。やり手はなくて傾城に鎗持交り入の間敷し。漸日も長て軍兵衛お暇申とぞ立出る。左近親子送つて出色代あれば軍兵衛。源之介殿おとなしうござるよ。追付殿の御用に立召さ

れふ。随分弓馬の稽古精出し申そふぞ。永日く暇乞して歸りけり。左近親子を關に立
休らひて見送る体。伊左衛門遙のを見て。われは我子の昔の伊左衛門ならば。人の子に爲
さふの大小こそ差せず共。夥多の手代若い者若旦那と待かせ。京大坂の町人の誰にかは劣
るべき。侍迎も負まじき母親の駕と父が昇。我が子の門に這座ふ我親に反きたる。其罰ひ
つしと思ひしり。悔み涙に頬冠りの手拭浸す斗りなり。奥方も端近く。なふく喜左衛門
ら。其駕是へも他事なき風情夫と力に夕霧は。駕も思ひも洩れ出て平様お入しうござんそ
。奥様の御慈悲にてあのお子のお乳母に。附けらるゝ等乍らの粗暴の私しが身。氣色も
志のくはのどらねと先和子様と見たさに。つくくんと打守り。あれ喜左衛門様扱も氣
高い能いお子や。聞き及びしより温和さま常体の者の子が。七ツや八ツで斯ふ有らふ。
人は血統が耻のしい流石父様のお子程ある。父様のお心が然こそと推量せらるゝと。表の
方へ目と配れば伊左衛門も首延し。魂脱て嬰兒の袖に飛入ばかりなり。左近夫婦は氣もつ
のす喜左衛門。まづ少なりとも金子渡そふいざ座敷へ。是源之介あの人是我が身の姪
衆とつけて愛しがり。此母も同前に。大人に成つても姪は見捨ぬものじやぞや。吉田屋こ

ちへと微笑に打連座敷に入にけり。夕霧邊りて見廻しなふ懐のしや先刻にのら。抱付たふ
てならなんだと。縫りついて泣ければ伊左衛門も走り入。思はず知らずやれ可愛の者やと
。抱付所と源之介飛退き。やい駕昇め。穢い姿で侍に抱付慮外者めと。脇指に手と掛るゝ
く申真平く御免なりませ。私が悴に丁度お前程ながござれども。稚い時より人手に渡し
。見たいくど存する折ふし。お前と見付けよも堪へられず。心亂れて慮外の段御免遊
ばし。阿漕な申ごとなれど。お侍のお慈悲に。父かと云ふて私に抱付て下されませと。額
と邊に摺付て手と合せて泣わたる。何んの已れと父と云はふおりや父様に云ふて來ふと
。走入るところと夕霧抱留め是申。乳母が始めての御せせう頼上ると泣ければ。乳母の言
やる事なら云ふてやらふ。父様なふと抱付と。チ、忝い父じやくと嬉し泣。夕霧も浦山敷
次手に私しも母と云ふて下されし。チ、云ふてやらふ是は母様。我しが子じやは是は父様
己が子じや。兩人が中の思ひ子の親子夫婦の寄合は。又今生では叶はぬと泣つ笑ふの様々
に。寵愛こそは道理なれ。奥より左近が聲として。藤屋伊左衛門。くと呼ぶ聲と南無三
寶と逃出れば。續いて左近走り出袖と扣へて。是古へ參會せし。阿波の大盡と異名と呼れ

し平岡左近。ろなたに恨みはなけれども夕霧に云ふ事あり。夫れにて聽聞致されよとがばと突退け涙と浮るめ。そ、偽り多き遊女の慣ひ擧ぐべきにあらねども。是程まで能ふもく此左近とつもりしな。此子は伊左衛門が倅とは。先年死したる遺手の玉が咄にて。疾より聞付無念とも口惜とも心一ツに堪へ兼しが。いやく改めては侍の身分立す。殊に此子も。我々夫婦と誠の父母と思ひ睦まじく。不憫さも増と故に縁でがなと諦め。二世と連添ふ妻にも深く包み。夕霧が産んだる某が實子と詐りしうば。流石女房の優しくも夕霧が心と憐み。乳母と名付此内へ呼取しは皆此倅が可愛さ故。夫に何んぞや淺ましい体にて忍び入。親よ子よのと名乗あひ。知らぬ子に智慧付る。ヤ幼くても此子はな。馬に乗鎗つるせ生先立身樂しむ身の。倅に耻と與へん爲の左近が武士と捨ん爲の。色に迷ひ馬鹿つくし女共が手前も羞のし。そ、恨めしや是非もなや倅と返と連歸れ。町人の子に刀脇差無用なりと引寄せて。襦取る所へ奥方は走り出。喃情なや此子が事は我迎も。じきの咄と聞しかども調べてはお侍の一分癒ると思案して。貰ひ切たる此子なり今返しては武士が立ぬ。一寸も放さぬと抱さ上ると引放し。身と立名と立。一分と立ると云ふも子孫の爲。實子も持ぬ此左

近誰が爲に身とおしまん。一分捨る合點と大小腕取り突出す。いやく假合こなたは返しても。契約して子に仕たからは此雪が返さぬ。夕霧も戻さぬと取付と引退け。絶付と引放し夫ともぞく見苦しと。奥方引立て玄關とはたど戸さして入にけり。伊左衛門も夕霧も前後に暮て途方なく。源之介泣出し。父様母様。かりや鶴昇の子ではないはいの。傾城の子には爲りともない父様の子じやはいの。母様の子じやはいの。爰明てくれや侍共。明とれやいと泣叶び玄關の戸ととんくと。叩く楓のわくらはに答ふる者もなありけり。夕霧息も絶々乍ら是源之助合點しや。眞實其方は左近殿の子ではない。母こそは夕霧父御は夫れ藤屋伊左衛門。さもしい人と思やるな江戸までも知られて。左近殿より大身の武家に親子も在ぞいの。母故の御半人そなたも愛目見せまじと。左近殿の子と云ひしが誠の親と假親の。心はさしも違ふのや。左近殿も其方とよも憎ふはあるまぬが。我身の無念一旦の腹立に。愛しい其方と捨らる。あの父様や此母は今の如く人中で。踏れぬ斗りに耻とるさ。言下げられても其方と抱が嬉しい。逢ふが嬉しい肉身分し本の子は。斯も愛しい物のいの母が此氣色では。最ふ逢ふ事はなるまい父様の事頼むぞや。切めて一年まつとりとひと

の寝臥も仕たいぞと。掻口説きまみくと眞實盡す愛涙。源之助聞分て。こなたが本の母様の父様はこなたの。傾城でも駕身でも本の親が愛しいと。涙交りの笑ひ顔血の筋見へて哀れなり。う、でかいたく待とても貴ならず。町人とても賤しめらす貴とい物は此胸一ツ。氣遣ひせまい伊左衛門が妻子。憂目はさせぬ力落すなくと。言へ共我も力なく只茫然と成にけり。吉田屋喜左衛門駕身雇ひ是非なしともお笑止共。参りかゝつて我等の迷惑。外の事ならば何とぞ思案も致すべきが。申ても霧様は親方がより。殊に病中大事のお身。先連飯つて扇屋へ手渡しせねばお爲にもいひ。いざ召ませと掻寄する。扱は再度別れて曲輪へ飯るのや。と計りにあつばと伏し。既に息もたへんと伊左衛門抱起し。吉田屋は印籠の氣付様く看病し漸々性根付けけるが。昔しより幾人の斯した身の憂難義。嘶にも聞つれど是程の愁い事。重なれば重なるのや今逢ふて今別る。あの子と切めて合襦でいさかじやと。抱寄すると引放し夫は喜左まで迷惑。これ世にも人にも恨みなし。左近も言は、尤至極。女房が情けと言ひ誰か親子三人に仇する者はなけれども。親に逆ひ責と費し身と奢りたる其報ひ。あれあの天道に睨まれていつくにて身の立べきぞ。百里來た道は百里歸る。昔しの榮耀は憂目と見ねば罪消へず。男故の苦勞と思ひ歸つて呉と泣涙り。すのし乗れば弱々と言たい事の數々も。堰來る涙せき來る胸命の内に今一度。顔色見たい逢たい末期の水とあの子の手うら。頼むくと夕霧の名にたち變る夕霞。見送り見送る門々の。松に太夫が俵と残して。別れ歸りける。

下の巻

夕べあしたの鐘の聲。寂滅爲らくと響けども聞て。驚く人もなし。野邊よりあなたの友とては。結脈ひとつに珠數一連。是が冥途の友となる。エ、物貰ひでもめりときさのしや。是程醫者の出入やり神子の御符のと。屋内がもてるやひて。七種嘆す問もないが目に見へぬの。通りやくと云ふ所へ梅庵御見廻四枚がた。折るの衣長羽織醫者は奥へぞ通りける。伊左衛門編笠のたぶけ小聲になり。やれ源之介。母が氣色が重そふな。命の内に最一度見せたく此姿にて來たれ共。最早見せる事も見ることも。成まいと囁けば源之介。早ふ逢たい事じや迎父に絶りて泣るたり。梅庵様お歸りと。表へ出れば遣手杉家内の上下附て

出。病氣はどよでござりませ。梅庵頭りと振て音婆扁鵲でも叶はぬ。物に譬へて言は、乾上つた土器に。燈心一筋灯ひて風吹に置様なもの。今日の日中の運ふて初夜限り。最早毒も何も擲はず氣任せにしたがよい。惜しい人じや。夕霧くくと云ふて。親方にいらぬ金儲けてやつた女郎じや。達者な内に此梅庵わの人と一年もてば。今頃はど取らぬでも樂するもの。あつたら金とあの世へ遣る。是がほんの來世金じやと言捨歸れば。扇屋一家は打蕪れ返答とる者もなし。源之介醫者の言分聽たる。最ふ叶はぬ思ひされ。悲しや何卒母様の。死なしやれぬ様にして下されと。取付歎くと不憫なる。扇屋了空夫婦。涙片手に薄團手づのらおうへに敷き。今の相の山が奥へ聞へて。太夫の慰に是へ出て聞たいとかしやる。是へ這入て面白い事唄ふて慰めて下され。あつと親子は笠のたふけ奥と見やれば夕霧は。芙蓉の眼尻衰へて夕べまつ間の玉の緒の。今ぞ切れ行く息づのひ。遣手禿に手と引れ。肩にのりし其姿。親子は目も眩れ胸塞がり。涙る、涙と夕霧も。夫と見るより飛立つ如く。心と胸に積み疊む蒲團の上のつばと伏し。思ひと涙に通はせて。人目と中に憚りのせきたぐるこそ哀れなれ。まぐ相の山早ふくと言ければ。あつと涙の玉さゝら。

唄ふ聲にも血の涙。子は安方の囁りや

相の山

夕べあしたの憂勤め。花一時の詠めとは。知れ共迷ふ數々の。文に染めても誠は薄く思ふ方へと駿河なる。富士も麓の戀の山。我階分て我迷ふ。夢の中戸の夢枕。月と憎みし夜半もあり。愁い座敷と貰はれて。余所に行く身と彼の人に。一寸らしの神も知れ。神ぞ嬉しと可愛さの身にも堪へて忘れめや。初手二度迄はふる雪のつみも恐ぬ無理起証。神も佛も二ツの耳に。嘘と誠と呷るのはしの雲手に物思ふ。格子叩くと合圖にて穉の御見も離越し。何と歎くぞ歎きても身は十年の繫舟。出舟の今日の名残の床。翌日の朝ごみ枕より。跡より遣手の攻くるは。苛責の責より猶愁く。仕舞太鼓の音迄も。寂滅爲樂と響くなり。死出の山路は誰とてもひとづ泊りの旅の宿。浮世へ立る涙川此世に浮名更科や。姥捨親捨身と捨て櫻花のや散々。五ツでは糸と搓初め。六ツや難波に此身沈めて。八ツで遣手に附添ひ。九ツで戀の小使。十チや十五の初姿。髪入れずの。地髪房々衣裳の (以下缺)

梅 忠兵衛 川冥途に飛脚

近松門左衛門作

身とづくし難波に咲くや此花の。里は三筋に町の名も佐渡と越後のあひの手と。通ふ千鳥の淡路町龜屋の世繼忠兵衛。今年二十のうへはまた四年以前に大和より。敷銀持て養子分後家妙閑の介抱故。商賣功者駄荷づもり江戸へも上下三度笠。茶の湯俳諧甚雙六のべに書く手の角取れて。酒も三ッ四ッ五ッ所紋羽二重も出す入す。無地の丸鍔象眼の國細工には稀男。色の譯知り里知りて暮ると待す飛ぶ足の。飛脚宿の忙しと荷と造るやら淋くやら。手代は帳面算盤とかく口共にとやくと。千萬兩の遣りくりも筑紫吾妻の取り遣りも。居ながら銀の自由さは。一分小判や白銀に翼の有るが如くなり。町廻りの狀取り立歸つて夫々ど。留帳つくる所へ誰頼もふ忠兵衛に居やるのと。案内するは出入の屋敷の侍。手代共慇懃にヤア是は甚内様。忠兵衛は留守なればお下し物の御用ならば。私に仰聞けられませ。お茶もておじやとあひしらふ。いやく下りの用はなし。江戸若旦那より御狀が來た。はお聞やれと押披さ。來月二日出の三度に金子三百兩差登せ申べく候。九日十日兩日の中

冥途の飛脚

其地龜屋忠兵衛方より。右三百兩請取内々申置候事共埒明申さるべく候。則飛脚の請取証文此度のぼせ候間。金子受取次第此証文忠兵衛に渡し申さるべく候。是此通仰下された。今日迄届のぬ故大事の御用の手筈が違ふ。なせ斯様に不埒など。鼻としりめて云ひければ。ハ、御尤。去りながら此中の雨のつゝ。川々に水が出まれば道中に日がこみ。銀の届のぬのみならず手前も大分の損銀。もし盗賊が切取る道ならふつとでさ心。萬々貫目取られても十八軒の飛脚宿のら辨へ。けし程も御損かけませぬお氣遣われなど云はせも果す是さ。云ふ迄もない御損のけては忠兵衛が首が飛ぶ。日限延ては御用の請取により。夫故の詮策迎ひ飛脚と遣はして。早速に持參せいと徒士若黨も刀の威光。銀こしらへも迂散成なまり散して歸りしが。又頼みませふ。中の島丹波屋八右衛門のら來ました。江戸小舟町米問屋の爲替銀。添へ状は届いたが銀はなせ届させぬ。此中文と進じても返事もござらす。使遣れば酔の蒺藜のといつ届けさつしやるぞ。此者に渡して人をつけて下され。手形辰と申さるゝサア。金子受取らふと立はだかつて喚さける。主思ひの手代の伊兵衛さはがぬ体にて。是お使。八右衛門様が其様に理窟臭い口上は有まい。五

千兩七千兩人の銀と預つて。百三十里と家にし江戸大坂と。廣く狭くする龜屋。そこ一軒では有まいしとそい事もなふては。今でも旦那歸られたらば此方から返事せふ。五十兩に足ぬ金あたがしましう云ふまいと。のさのら出れば氣と飲れ使はまじめに歸りけり。母妙閑は火燧の側放るゝことも納戸と出。ヤア今のはなんぞ。丹波屋の金の届いたは當十日も以前の事。なせ忠兵衛は渡さぬの。今朝から二軒三軒の金の催促聞て居る。親父の代のら此家に銀一匁の催促をす。終に仲間へ難儀とつけ十八軒の飛脚屋の。鑓と云はれた此龜屋。皆は心もつかぬ。忠兵衛が此頃の素振がどふも飲込ぬ。昨今の者はしるまいがじたい是の實子でなし。もとは大和薪口村。勝木孫右衛門と云ふ大百姓の一人子。母御せはお死にやつて繼母がりのわざくれに。悪性狂ひも出來るぞと父御せの思案で是の世取に貰ひしが。世帯廻り商賣事何にゐるのはなけれども。此比はそはくど何も手に付のぬと見た。意見のしたい事あれと養子の母も繼母も。同前と思はふのせはく云ふより云はぬ身と。耻入らせふと思ふて目とねふつても。聞所見所は見て居る。いつの間にやら大氣になり。のべの鼻紙二枚三枚手に當り次第。重ねながら鼻拭やる。過行れし親父の咄しに。

鼻紙びんびと遣ふ者は曲者じやと云はれたが。忠兵衛が内と出さすにのべ三折づゝ入れて出て。何程はなとのむやら戻りには一枚も残らぬ。身が達者なの若のどてあの様に鼻のんでは。とぞで病も出ませふと。よまいごととして入れれば。丁稚小者も笑止がり早ふ歸つて下されうしと。待つ日も西の戻り足見世さし比になりけり。駕籠の鳥なる梅川に憶れて通ふ廊雀。忠兵衛はとぼくど外のくめん内の首尾。心はくもでうくなはや十文色も出てくるは。南無三寶日が暮ると足と空に立歸り。門口にの着ければ留守の内の方々の催促。妙閑の耳に入つては如何様の。首尾になつたも氣遣はし。誰ぞ出ようし内証と篤と聞て入りたしと。我家ながら敷居高く。内と覗けば飯焚の万めが酒屋へ行く体なり。彼奴は木で鼻もぎとふ者只は云ふまじ濡のけて。欺して問はんと思案する間によつと出る。樽持た手と確としむればあれ旦那様のと聲立る。ア、喧しいこりやすいめ。れれが首丈なづんで居る。思ひ内に有れば色外に顯るる。目つきと汝も見て取たか可愛らしい顔付きで。氣の毒がらすはとふじやいやいづと殺せと抱付ば。よ、虚つらんせ毎日く新町通ひ。のべの鼻紙二折三折。結構な鼻とかまんすもの。なんの私等に手ばなもろみたふあるま

い。あの虚つさがと振り切ると又抱ついて。汝に虚ついてなんの徳。實じやくと云ひければ。夫が定なら晩に寢所へ御さんすか。チゝなる程く忝ない。夫について今ちよつと問ふ事有り云ひけれ共。それも寢所でしつばりと聞ませふ必欺しにさんとなる。そんなら私はお湯沸いて。腰湯して待まると云ひ捨て振切り走りけり。忠兵衛は虚腹の立わづらひて居る所に。北の町からいづつげにくるは誰じや。ヤア、中の島の八右衛門。彼奴に逢てはむつろしと。東の方へ出違は是忠兵衛。はづすまゝくと聲のけられ。ヤ八右衛門此中は久しい。昨日も今日も一昨日も。人道くと思ふて何やかやと延引した。めつさりと寒いが親父の疝氣はば様様の虫歯は。ア、いのふ酒臭い過しやるなく。明日は早々入遣ふやれそが言傳したぞや。近日一座致したいとたくしおくれれば八右衛門。とけやい口三味線に乗のけても乗様な男でない。其方が商賣は三度でない。身が方へ上つた江戸爲替の五十兩は何として届けぬ。五日三日は了見も有ぞのし。心安いは格別高懸賃のくらは大事の家職。十日に餘れと婿明す今日も使と遣たれば。手代めがらさ高な返事した。よもや外へはそふ有るまい八右衛門となぶるの。北濱うつば中の島天満の市の側迄。親父共云

はるゝ八右衛門。なぶつて能ばなぶられふが銀は今日請取。但仲間へこたへふか先お我に逢ふと。内へ入ると引留め去とては誤つた。是手と合すたつた一言聞てたも。拜むゝと叫ば。又口前で濟そふや梅川と欺したと男の意氣は違ふた。云ふ事有らばサア聞ふと苦々しくさめ付けられ。是其聲と母が聞けば死んでも一分立ぬ事。一生の御恩を去とては面目ないとはらゝと泣けるが。何と秘そふ此金は十四日以前にのぼりしが。知つての通り梅川が田舎客。銀すくめにて張合のける。此方は母手代の目としのんで。僅二百目三百目のへづり銀。追倒されて生た心もせぬ所に。請出す談合極まつて手と打ぬばかりと云ふ。川が欺き吾等か一分既に心中する筈で。互の咽へ脇差のひいやりと迄したれ共。死なぬ時節の種々の邪魔附て。其夜は泣て引別れ明れば當月十二日。そなたへ渡る江戸銀がふらりとのぼると何のなしに。懐に押込で新町迄一散に。とふ飛んだやら覺へばこそ段々宿と頼んで。田舎客の談合破らせこつちへ根引の相談しめ。彼五十兩手付に渡しまんまど川と取留しも。八右衛門と云ふ男と友達に持し故と。心の中では朝晩に北に向ひて拜ぞや。去りながら如何に念此なればとて。前に断り立と置いて遣へば借も同然。跡では如何と思ふ中其

方の方は催促。虚に虚が重なつて初手の實も虚言となれば。今何と云ふても實には思はれじ。され共とそふて四五日中外の銀ものぼる筈。如何様ともしとくつて一錢一ヒ損のけまじ。此忠兵衛と人と思へは腹もたつ。犬の命と助けたと思ふて了見頼み入。是と思へは世の中にお仕置者の絶ぬも道理。此上は忠兵衛も盗みせふより外はなし。男の口から斯様の事云はれふものか推量あれ。咽より劔と吐とても是程には有るまじと。絞り泣にぞ泣居たる。鬼ども組ん八右衛門はるりつと涙ぐみ。云ひにくい事よふ云ふた。丹波屋の八右衛門男じや了見して待てやる。首尾よふせよと云ひければ忠兵衛土に額とつけ。忝いゝ父二人母三人。親は五人持たれども其恩よりは八右衛門。貴殿の御恩忘れぬとどのふは涙ばかりなり。そふ思へば満足サア人も見る其内と。立別んとせし所に内より母の聲として。八右衛門様か忠兵衛是へ通しましやと。聲懸られて詮方なくもぢく連立入にけり。母は律義一偏に。前程はお使ひ又御自身のお出御尤。是彼方の銀の届いたは十日も以前何として延引ぞ。胸に篤くと手と置てよふ思案して見や。とそふ届けば飛脚はいらぬ。何がそなたの商買ぞ。サア今渡して上ましやと云へども渡す金はなし。八右衛門も底意は聞

はお袋。耻しながら八右衛門が五十兩や七十兩。急にいる事もなし是より直に長堀迄参れば。明日でもと立んとすれば。いや。大事のお金預ければ氣遣ひで夜も寝られず。なふ忠兵衛さりと渡しやと迫立られ。あつと云ふより納戸に入り。うる／＼しても金はなし入れもせぬ戸棚の錠。あける顔してびんと云ふ鍵も手前も耻しく。胸にくはんだて神おろし狂氣のこどく氣取揉しが。ヤレ有がたや此櫛箱に焼物の髪水入。これ氏神と三度頂き紙押し廣げくる／＼と。するが包みに手ばしこく金五十兩墨黒に。似せも似せたり五十はい。母には一ばい参らせしその悪智恵ど勿体なき。是々八右衛門殿。金渡さいでも濟む金ながら母の心と安める爲。男と立る其許と見て詮方なふ渡す金。さつはりと請取て母の心と安めてたも。包みは解に及ぶまじいらふて見ても五十兩。どふしてたもると差出す八右衛門手に取て。ハテ誰ぞと思ふ丹波屋の八右衛門。請取に仔細はないはお袋。江戸爲替儲に請取ました。不動参りに待ますると立所と。妙閑誠と思ひてや忠兵衛。仕切替錢の作法は金と手形と引替。もし御持参なきならば一筆ちよつと書せまじや。物は念じやと云ければ。テ、夫々母は無筆の一文も讀ね共。記はのりに一筆と硯出して目くばせすれば

易い事。忠兵衛文言は見やと筆に任せて書散と。一金子五十兩請取申さす候。右約束の通り晩には廊でのみのけ。我等は太鼓實証明白なり。何時なりとも騒ぎの節さつと参上申すべく候。依て紋日の爲髪水入件のごとしと。阿房のたら／＼書散し去ばお暇申そふと。表へ出れば妙閑は書た物こそ物云へと。又欺されし正直の親の心や佛の顔も。三度飛脚の江戸の左右待夜もやう／＼更にけり。表に馬の鈴の音こりや／＼駄荷が着たぞ。中戸／＼と聲高に手々に葛籠擔げこむ。忠兵衛親子機嫌能サア拍子がなとつた來年も仕合馬。馬子乘に酒と煙草よと。硯ひのへつ帳付て家内とんと賑へば。手代の伊兵衛けうとげに。なふ堂島のお屋敷のら。金三百兩九日にくる善前さ狀が登つた。何とて遅いとお侍の甚内殿が脱付て歸られた。何と／＼と云ひければ幸領が打がひより其三百兩合點。是急々の御用今夜中にお届け。方々の替錢金高八百兩ぐらりと取出す。忠兵衛彌いさはひよく白銀の内蔵へ。金子の戸棚へ母者人私に直に此小判。お屋敷へ持参する人の銀と預れば表も氣と付早ふ締火の用心が一大事。戻りのちつと遅ふても駕籠でいけば氣遣ない。夜食しまふてはや寝よと金懷中に羽織の紐。結ぶ霜夜の門の口出なれし足の癖になり。心の北

へゆく〜と思ひながら身みの南みなみ、西横堀にしよこほりとらう〜と氣きに染しつさし妓よめが事こと。米屋町こめやまち迄歩あゆみきて。ヤア是こゝの堂嶋どうじまのお屋敷やしきへ行いはつ。狐きつねがばのすの南無三寶なんぶさんぼうと引返ひきかへせしが。我われ知らず爰こゝ迄來きたの。梅川うめがわが用有もちありて氏神うぢがみのお誘まねひ。一寸寄ちゆうきよて顔見かほみてあらど。立歸たちかへつてのいや大事だいじ。此金こゝね持もての遣つひたあらふといて呉くれふの。往いつてのけふの往いもせいと。一度いちどの思案しあん二度にどの思案しあん三度さんど飛脚ひやく。戻かへれば合あせて六道むだうの冥途めいずの飛脚ひやくと。

中の巻

あゝ〜鴉からすがな〜。浮氣うき鴉からすが月夜つきよも闇くも。首尾しゆびと求めてあつ〜とさ。あゝ編笠あみかさのもみぢして炭火すみびはのめく夕ゆふべ迄思おもひ〜の戀風こひかぜや。戀こひと哀あはれたね〜。梅芳うめかほしく松高まつたかさ。位ゐのよしや引ひしめて。あつれ深こほさつ見世女郎みよぢやう。さらさ禿かぶつが案内あんないして。橋はしが掛かたや佐土屋町さどやまち越こ後の女主おんなぬしとて。立寄たちよる妓よめも氣兼きかねせず底意そこい殘のこさぬ戀こひの淵ふち。身みのうさしはで梅川うめがわも爰こゝと思おもひの定宿ていしゆくと。余所よそこの勤つとめものさの本島屋ほんじまやと一寸島隠いちゆづゐかくれ。申し清きよさん。今日けふの島屋じまやで彼の田舎のちんかのうてすに。せびららされて天窓てんそうが痛いたい。忠様ちゆうさまのまだ見みへぬのへ。切きてのめうりに此方こゝさんの顔かほが見みたさにらしに來きた。ゐるさの門かどの障子戸しょうじ戸も明ある翌日あしたの形見かたのや。扱あてもよふ御ご

座ざんしたあれ二階にかいにも。女郎ぢやうぢやう様達さまたちが大勢遊おほいびにござんして。お客待間おきゃくまちまの酒さけと拳けんとしてござんする。此方こゝさんも氣晴きせしに。一拳けんして酒さけ一いつつ傍輩はなは様もござんすと。上ある二階にかいの隙間すきま風男かぜおとこ交ますの火鉢酒ひばちさけ。拳けんの手てじなの手てもたもく。るませさい。とららい。さんな。同じおなととよとよがいに。聲こゑのたうせがさとかひなにい。はい。さんさう。さうらう。すむ井いそれ〜何なにと。じたい一いつついなるとせ様さま。あれ梅川うめがわ様さまのござんした。なふよい所ところへ來きて下くだんした。こなさん拳けんの上手うで。背せのらちよとせ様に仕付しつけられて無念むねんな。敵かたきとつて下くだんせ銚子しやうし直なしやと云いければ。もうたての酒さけや拳けんとする氣きもあらばこそ。此梅川こゝが今の身みと少しすこ泣ないて貰もらひたや。田舎いんかの客きやくが見請みまかの事こと今日けふも今日けふとて島屋じまやにて。理窟りくつと詰つてねだれ言腹ことばはらが立たつやら憎にくいやら。と云いながら是こゝの先せん。忠兵衛ちゆうべゑ様さまの後手ごてと云いひ宿やどのせいりさ一いつつにて。手付てつけも渡わたし約束やくそくの日限ひかぎされるも言いひ返し。今日けふ迄ひは繋つりしが忠様ちゆうさまも世帯持せたい。養子やしの母御ははごの手前てまへといひ屋敷方やしきかた歴々れきれきの町まちがたと引受ひきうて東路あづまぢのけての大事だいじの商賣せうばい。如何いかなる事ことが邪魔じやまになり田舎いんかの客きやくに請まかされてい。我身われみ一いつつい死しんでものけふ天神てんじん太夫たゆうの身みでもなし。さあましい金かねに氣きがふれた見世女郎みよぢやうの淺間あさなしさ。世間よじんの唱朋輩なうほうばいのうもん殿とのと始はめとして。格か子ご女郎ぢやうぢやう衆しゆうの手前てまへも有あ

。忠様と本意と遂げとやのふ人に謠れし。めんがぬきたふござんすと。泣しみづきて語るにぞ。一座の女郎身の上に。思ひ合せて尤とつれて涙と流せしが。このふ氣が沈るわつさりど淨るりにせまい。禿共鳥渡往て竹本頼母様のつて来い。いや先に鬘附買ふとて聞きました。芝居のら直に越後町の扇屋へ往んしたげな。私の頼母様の弟子なれば。よふ似た所と聞んせ。三味線と。夕ぎりの昔と今に引のけて。傾城に誠なしと世の人の申せ共。夫の皆僻言譚知らずの詞ぞや。誠も嘘も素一ツ。譬へば命抛ち如何に誠と盡しても。男の方より便なく遠ざかる其時の。心矢竹に思ひても。斯した身なれば儘ならず。自のら思ひぬ花の根引にあひ。あけし誓も嘘となり。又初めより偽りの勤ばのりにあふ人も。絶す重ぬる色衣つものよるべとなる時の。初の嘘も皆誠兎角唯戀路に偽りもなく誠もなし。縁の有のが誠ぞや。あふ事叶ぬ男とば思ひくして思ひが積り。思ひざめにもさむるもの憂やしよざいと恨むらん。恨まば恨め尤愛いと云ふ此病。勤る身の持病と。戀に淨世と投首の酒もしらけて醒にけり。中の島の八右衛門九軒の方より淨るり聞付。皆聞知た妓の聲々。花車内にとつと入り。ゑ差帯木逆手にとり。二階の下から板敷とぐりたく

と突鳴し。女郎衆あんなまりじや愛にも人が聞てゐる。如何なる男で夫程に戀しいぞ。男がなふて淋しくばお氣にいらすと。是にも一人あしてやろのと喚さける。梅川の夫ども知す。逢たいが定じやもの。憎いなら来て擲おんせ。清様下なり誰さんじや。大事ござんせぬ中の島の八様と。聞くより梅川はつとして。是々あのさんには逢ともない。皆様降て下さんせ私が二階に居ると。必ずいふまいぞ。そこらの粹じやと打領さ皆々座敷に出ければ。ちよとせ様なるとせ様。歴々の御參會。梅川殿の宵の口島屋と囉ふて去れたげな。忠兵衛もまだ見へそもない。花車愛へ寄つしやれ。女郎衆も禿共も忠兵衛が事につき。耳打てとく事が有る愛へくとひそくすれば。何事やら氣遣ひなど云へとも二階の梅川に。悪い噂も聞せんると皆氣と配る折節に。忠兵衛の世と忍ぶ心のこほり三百兩。身も懷るも冷る夜に越後屋に走りつき。内と覗けば八右衛門よ座としめて我評判。はつと驚き立聞す二階に梅川が。心とそまを壁に耳漏るぞ仇の初めなる。斯と知らねば八右衛門。斯云へば忠兵衛と憎み嫉む様なれど。あすくみぞあの男が身の成果がのいひ。尤も千兩二千兩。人の銀ととつり暫の宿と貸すけれども。手銀とての家屋敷家財のけて

十五貫目。廿貫目に足ぬ身代。大和の親が長者でも、龜屋へ養子にこそこの高の知れた百姓。もういふ此八右衛門も若い者の慣ひ。一年に五百目一貫目揚屋の座敷も踏ねばならぬ。身にも應ぜぬ忠兵衛が梅川に登り詰。島屋の客と張合五月より此方大方の揚詰。身請も此頃極り。百六十兩の内五十兩手付渡したげな。夫故に方々の屈銀が不埒になり。あたる所が嘘八百いふ小尻が詰つてきた。今でも梅川がさ出るに極まらば。借銭も有ふしなして二百五十兩。天のら降ふか地うら湧ふか。盗せふより外ない。この手付の五十兩をこのら出たと思召す。身が方へ来る江戸爲替中で取て遣ふたと。夫とも知らずこひに行き養子の母御がいとしばや。登つたは知てなり渡せくとせつられて。忠兵衛が戻した小判お目にうけふのと。一包取出し見所の五十兩。然ば正体顯して獄門の種御覽あれど。包と切て切解けば焼物の髪水入。主も一坐の女郎もはあゝと斗りに怖氣たち。身と縮むれば二階に。顔と疊に擦付て聲とくして泣居たり。短氣は損氣の忠兵衛傾城はぐの物。五十兩の目くさる銀取替たせんせう。若い者に耻のせ川が聞たら死たゐる。懐るの三百兩五十兩引ぬいて頼へ擲つけ存分云ひ。我身の一分川が面目雪いで遣ふ。これをも

是は武士の銀。殊に急用爰が大事の堪忍と。手と懐るへ幾度の兎やせん斯やしやうげ鳥。鬮の嘴のくひちがふ心と知ぬを是非もなき。八右衛門水入取わけ。是も買ば十八文。いゝに相場が安いとして五十兩と二分五厘がへ。神武以來ない。友達さへ是なれば他人と騙るの御推量。此次の段々に巾着切から矢尻切。はては首切いのにしても笑止な。あの如く亂れては主親の勘當も。釋迦達磨の意見でも。聖徳太子が直に教化なされても。いかなく直らぬ曲輪で此沙汰ばつとして。寄せ付ぬ様に頼みます。梅川殿へも吹込で此方から挨拶さき。島屋の客にさらりと請させて仕舞たい。皆あのうらが心中の女郎の衣裳と盗むの。碌なこの出のさす片小鬘剃こぼされ。大門口に曝され友達の一分捨さする。人でなしとわれがと。可愛くば寄せて下さるなど。語ると聞ば梅川も。悲しいと愛しいと身の敢果なさと掻ませて。胸引裂る忍び泣。刀物がな鉄でも。舌と切ても死たいと。悶へ伏たる苦みと。下には各推量してひよんな心おならんした。あたの悪い梅川様。いとしばいの川様お一人にとめたと。下女料理人うら若き。禿も袖と絞りけり。忠兵衛元來悪い虫。抑らねてすんと出。八右衛門が膝にむんずと居かゝり。是丹波屋の八右衛門殿。常々の口

程有つて、男じや見ごとじや。三人よればくがい。忠兵衛が身躰の棚下し仕てくれる忝けない。此水入も男どし。母の心と安める爲請取てくれる。謎とかけて渡したと此忠兵衛が五十兩。損うけふと氣遣さに曲輪三界披露して。男の一分捨さとの。但又島屋の客に賄賂取りて。梅川にわらと焚き彼方へ遣ふといふ。措てくれ氣遣すな五十兩や百兩。友達に損のける忠兵衛でいごわらぬ。八右衛門様八右衛門め。銀渡す手形戻せと。金取出し包と解んとする所と。八右衛門押へてこりや待てやい忠兵衛。余程の戯言と盡せ。其心と知たる故意見としても聞くまじと。曲輪の衆と頼んで此方からよけて囃ふたらば。根性も取直し人間にもならふと。男づくの念比だけ。五十兩が惜ければ母御の前で云ふのいやい。てんがうな手形と書き無筆の母御と和めしが。是でも八右衛門が届ぬか。其金がさる三百兩手金の有ふ様もなし。定めてさこの仕切金。其金に疵とつけ。八右衛門したやうに髪水入で済まいど。但代に首やるの登詰るその手間で。届ける所へ届けてしまへ。性根のすいらぬ氣違者と。割つ碎いつ叱れどもいや。仁義だて措てくれ。此金と余所のどい此忠兵衛が三百兩持つまいもの。女郎衆の前と云ひ身代と見立られ。

猶返さねば一分立ぬと。包解いて十廿三十。しうう詰らぬ五十兩くるくと引包み。これ龜屋忠兵衛が人に損うけぬ証據。請取れと投つくる男の頬へ何とする。忝けないと禮云ふて返し直せと投戻と。おのれになんの禮云ふと。又投つけつ投返し腕捲してさしみあふ。梅川涙にくれながら階子駈あり。なふすつきり私が聞きました。皆島八様のがお道理とやこれ手と合せる。梅川に許して下さんせと。聲とあけて泣けるが。情なや忠兵衛様なせ其様に上らんと。そもや曲輪へ来る人のたとへ持丸長者でも金に詰るの有る慣。愛の耻の耻ならず何とあてに人の金。封と切て撒散し詮議にあふて牢櫃の。繩のゝるのどいふ耻と此耻と替らるの。耻らく計りの梅川の何となれといふと。どつくと心と落しつけ八様に説言し。金とつゝねて其主へ早ふ届けて下さんせ。私と人手にやりともない夫の此身も同じと。身一ッ捨ると思ふたら皆胸に籠て居る。年とてまわ二年下宮島へも身としさう。大坂の濱に立てもてな様一人の養ふて。男に愛目のけまいもの氣と静めて下さんせ。淺ましい氣にならんした。斯の誰がした私がした。皆梅川が故なれば忝けないやら尤愛やら。心と推して下さんせと。口説立く小判の上にはらくと。涙の山吹に露置添る如

くなり。忠兵衛氣も有頂天。前後くらぬ間に合楚數金のこと思ひ出し。はて暗しい。此忠兵衛と夫程阿呆と思やる。此金の氣遣ない八右衛門も知て居る。養子に来る時大和から。敷金に持て来て余所へ預け置た金。身請の爲に取戻した花車爰へと呼寄せ。先へ手付に五十兩今百拾兩合せて百六十兩。是川が身の代是又四十五兩。いつぞや締た帳面買がりの借銭。五兩の遣手九月からの揚銭。万事拾五兩程と覺へたが。兼用が暗しい甘雨で帳消しや。此拾兩の御身へ御祝義やら骨折分。りんも玉も五兵衛も壹兩宛じや来い〜と。金銀降す邯鄲の夢の間の榮耀なり。今今に埒明今夜の中に出る様に。頼む〜と云ひければ主人俄に勇となし。無い程無いも金有る段に有る物か。氣とまなそふとでなし。川様嬌う思ひんしよ。大事の金と持ていく。りんも玉も供しやと引連れ走り出にけり。八右衛門の濟ぬ顔誠とと思ひねども。唯さへ貰ふ此小判返す物と言れぬ辭義。五十兩儘に請取た手形返すと投出し。梅川殿よい男持てお仕合。妓様達是にと銀懷中し出ければ。私等もいさ歸りましよ。川様目出度ふござんすと皆宿々へぞ歸りける。忠兵衛氣とせいて花車のなせ遅いぞ。五兵衛往てせつてくれと立に立て急げれども。身請の衆の親方が濟での

ら。宿老殿で判と消し。月行事のら札取ねば大門が出られませぬ。最些と隙が入りませふ。そこらと早ふこりや頼むと。又一兩投出すおつとまのせと足軽く。走る三里の灸よりも小判のさゝぞこたへける。まぐ此間に身支度べた〜した容姿。帯もさりと仕直しやと減多に急げ。何ぞいの。一代の外聞傍輩衆へも盃ごと。暇乞も譯よふして緩と出して下さんせと。何心なく勇む顔男のわつと泣出し。いとしや何も知らずか今の小判の堂島のお屋敷の急用金。此金とちらしての身の大事の知れたと。随分堪へて見つけ共。友女郎の真中で可愛ひ男が耻辱と取り。和女の心の無念さと晴したいと思ふより。ふつと金に手と掛てもふ引れぬの男の役。斯なる因果と思ふてたも。八右衛門が頼付直に母に吐と顔。十八軒の仲間ら詮議に来るの今のと。地獄の上の一足飛とんでたもやと斗にて。絶付て泣ければ。梅川はあど慄出し聲も涙にわなくと。それ見さんせ常々言し爰のこと。なせに命が惜いぞ二人死ぬれば本望。今とても易いと分別据てくだんせなふ。命生やふと思ふて此大事がなるものか。生らるゝだけ添るゝだけ高の死ぬると覺悟しや。そふじや生らるゝ丈此世で添ふ。今にも人がくる爲爰へ隠れてござんせと。屏風の影に押入れ。私が大

事の守袋と。内の簞笥に置てきた是が欲しいと言ければ。斯る悪事と仕出して。いかな守
 の力にも此科が脱れよう。兎角死身と合點して我の和女の回向せん。和女の此忠兵衛が回
 向と頼むと屏風の上。顔と出せば。悲しや思々しい。ちやつと止て下さんせ嫌なものに
 能ふ似たと。屏風にひしと抱き付咽返りてぞ歎きける。越後主従立歸りてこそものも埒明
 た。お出の勝手近ければ西口へ札が廻つた。言ども夫婦のわななくと。去ばくも慄ひ
 聲。おさふそふなが酒のいの。酒も喉と通りませぬ。目出度と申そふのか名残惜いと申そ
 ふる。千日いふても盡ぬと其千日が迷惑と。いふつけ鳥に別れ行く榮耀榮花も人の金。果
 の砂場と打過て。跡の野となれ大和路や足にまのせて

下之巻

忠兵衛

梅川相合かて

翠帳紅圍に枕並し閨の内。馴し襖床の夜すがらも。四ッもんの跡夢もなし。去にても我夫
 の。秋より先にあらす。あだし情の世と頼み。人と頼みのチ綱されて。夜ののなのと
 も引替て。人目の關にせのれもく。昨日の儘の髪つきや。髪の鬢目のはつれたと。わけて
 進じよと櫛と取り。手さへ涙に凍つき。冷たる足と太股に。相合火燵合としの。駕の息杖

生てまだ。續く命が不思議ぞと。二人が涙こぼれ口。あけぬ間の暫しとて。駕の簾とわけ
 てさへ。膝組交す駕の中。狭き局の有りし夜の。逢瀬に似たの似たれども。炭の埋火いつ
 しかに。朝の霜と置のへて。夜の嵐に呼れて。答ふる野邊のかふる松。過し其夜が思
 入れて。いと、涙の種ならん。何とぞくと思ふぞや。是ぞ一蓮托生と慰めつ又慰みに。
 比翼煙管の薄煙り。霧もたへと晴渡り。夢のはへに風かれて。朝出の賤や火と貰ふ。
 野守が見る目耻しと。駕立させて暇とやる。あたひの露も命さへ。惜のらぬ身は惜のらす
 猶も惜まぬ徒歩跣足。惜むの名残計りぞや。ついに着馴ぬ綿帽子。私が顔よりこなさんの
 。肌は是と風防ぐひらり帽子のむらさきや。色で逢し早やむるし。今日の眞みの女夫
 わひ。頼まば願ののへ申。庚申堂よと伏拜み。振り返りみるしやうまんの愛染様に愛敬と。
 祈る芝居の子供衆や。道頓堀のいろくや。馴し曲輪の夫どと。紋で覺へし提燈の中に
 果敢なや樵屋うち。此木瓜に打添ひて私が紋の松のいの。松の千歳と祈りしに。定めぬ契
 り灯燈の消る命の夕には此紋つけて我中の。經帷子と観念し。冥土の道と此様に。手と引
 ふぞや引れふと。又取交し泣く涙袖の氷と閉あへり。誰が關据ぬ道なれと。とひく行け

ばはのちもらず。今朝の姿と其なりに。素足に石駄しみづけば。空に雲の一曇り。霞まじりに吹く木の葉。ひらり平野に往らり。爰は知る人多ければ。こちへくと袖覆ひ。里の浦道畦道と。そぢりもぢりて藤井寺。あれくあれと見や。この田舎も戀の世や。瀬戸に菜と摘む十七八が。門に立たは忍びの夫へ。野風身の毒ち這入しやんせら。余所の睦言妬ましく。それ覺へてういつのと。あの初雪の朝ごみに。寝衣ながらに送られし大門口の薄雪も。今降る雪も變らねど。變り果たる身の行衛。我もへ染ていとほしや。元の白地と淺黄より。戀は譽田の八幡に祈請蓄紙の筆の罰。和女とよけてと泣く涙。暫し人目の許しあれど。申是なふ去とては。私か身とても儘にいと末の涙に果しなく。のへの三ッ折絞るにも。裾にやつるゝ小笹原。霜に枯野の芒原。ばうくさらくさつと鳴たの。我と追手の尋ぬるよと。覆重なり影隠しよりさけ見れば。人へのわらで妻戀鳥の。羽音に怖る身となるの。ゆるなる罪の報ぞと。口説敷きて往く姿。泣く笑ふか飛田林の群鴉。切て一夜の心なく。咎むる聲の高間山。あの葛城の神ならで晝の通路つゝましく。身と忍ぶ道戀の道。われら狭き浮世の道。竹の内峠袖濡れて。岩屋越とて石道や野越山へれ。

里々越て行くの戀もへ。すめる世の掟正しく幾内近國に追手かゝり。中にも大和は生國とて。十七軒の飛脚問屋或の順禮古手買。節季候に化て家々と覗きの機關飴賣と。子供に飴と嘔らせて口とむしるや良の鳥。網代の魚の如くにて。脱がたなき命なり。無惨やな忠兵衛我さへ浮世忍ぶ身に。梅川が風俗の人の目立と包のね。かりのこに日と送り奈貝の旅籠屋三輪の茶屋。五日三日夜と明し廿日余りに四十兩。遺果して二歩残るのねものすむや初瀬山。余所に見捨て親里の新口村に着けるが。是れ梅爰は我生れ在所廿才まで育つて覺へしが。師走の果に此如く諸勸進諸商人春とてもないと。あれ彼處にも立て居る野外にも二人。胸騒ぎもしてきた四五町往ればはんの親。孫右衛門の家なれども不通といひ繼母なり。此葉背の忠三郎とて下作あてた小百姓。腹の中ら馴染頼もしい男先爰へと打連れ。忠三郎殿宿に。久しうお目にのらぬと。つゝと入れば女房と覺しく誰でござるぞ。是の今朝のら庄屋殿へ詰られ。今留守でござるぞいふ。忠三殿におる様は無つたが。御身の誰でばしござるぞ。私も三年跡に是の家へ嫁入して。前方の知る人の何方がどふも知りませぬ。はんに皆様の若し大坂でござらぬ。是の親方孫右衛門様の繼子忠兵衛殿

と申すが。大坂へ養子に往て傾城買て人の金と盗み。其傾城連て走られたと云ふて。代官殿より御詮議。孫右衛門様は疾に親子の久離とさり。構ぬと一言ながら眞實の親子なれば。年老ての氣苦勞是のハ馴染の事なれば。若し此邊狼狽て見付られていとしいこと内外へ氣と注らる。庄屋殿のら呼に來る寄會の印判の。節季師走に此在所の傾城事にて名返る。なふうたてのお傾城殿やと遠慮もなく語りける。忠兵衛はつと思ひいかにもく大坂でも其取沙汰。我等ハ夫婦連で年籠に參宮の心ざし。懐しさに寄ました一寸呼でさて下され。立ながら逢て歸りた。大坂者と言はずに頼ますと言ひければ。叔のいふふ急ぎの往て呼で來ませふ去ながら。鎌田村のお導場へ京のお寺のお下り。毎日のおさんだん先から直にお導場へ參られたも。いさじるの下差焚て下されと。標かけして走り行く。跡の門口梅川がはたと鎖て釣鉄のけ。是はほんの仇の中大事ないかと言ひければ。忠三郎と云ふ者の百姓に稀な勇氣と持たもの。頼んで一夜逗留し死ぬるとも此所。故郷の土に身となして生の母の墓所。一所に埋まれ嫁姑の未來の對面させたいと。目もうるくとなりければ夫の嬉うござんせふ。去ながら私が母の京の六條。定めし此間詮議に人が往つらん

。日比が眩暈持なれば如何ならんしたとやら。最一度京の母様にも一目逢て死たいぞ。道理とも我も和女のお母に。響じやと云ふて逢たいと。人目なければ抱き合。涙の雨の横時雨袖に餘りて窓とつ。降てきたそふなど西うけの竹連子。反古障子と細目にわけて見やる野風の畠道。後しぶきに降る雨は傾けて急ぐ阿彌陀堂。道場參り打連しはわれ皆在所の知た衆。先なハ梅井端の助三郎是も在所の口さ。あのお婆の荷持瘤のでんが婆。いひ茶飲じやがのそこへ見へる剃下。昔ハ大貧乏。年貢に詰つて娘と京の島原へ賣り。大盡に請出され奥様に供り。響の陰で田も五町藏も二ヶ所の富限じや。同じ傾城請る身が我ハ和女のお母に。憂目とあける口惜い。あの爺ハ弦掛の藤次兵衛。八十八で一升の飯殘さぬ。今年ハ丁度九十五。そこへ來た坊主の針立の道庵。彼奴が針で母者人とたて殺した。思へば母の仇じやと愛に付ての恨言。あれくあれへ見へるが親父様。あの縁の肩衣が孫右衛門様の。ほんに目元が似たいの。夫程よふ似た親と子の。詞とも交されぬ是も親の御罰ぞや。お年もよる足元も弱つた。今生のお暇と手と合すれば梅川の。見初の見終私ハ嫁でござんせふ。夫婦ハ今とも知らぬ命。百年の御壽命過後。未來でお目にら

りまじよと口の内にて獨語。諸共に手と合せ咽び入てぞ歎きける。孫右衛門の老足の休み
 く門と過ぎ。野口の溝の水水り滑ると留る高足駄。鼻緒の切れて横様に泥田へがばと轉
 込んだり。悲しやと忠兵衛隣りも騒げども。身と返見て出もやらす梅川遠て走り出。抱
 起して襦袢りども痛みのしませぬか。お年寄のおいとしゃ。お足も洗ぎ鼻緒もどけてお
 げませよ。少も御遠慮なざるゝなど腰膝撫て勞れば。孫右衛門起上り誰様やら有難い。お
 蔭で怪我も致さぬ。若い上らうのお優しい年寄と思召し。嫁子もならぬ介抱。寺道場へ參
 つてもこれ。愛の一心が邪見でい參らぬも同前。御身がはんの後生願ひ。もふ手と洗ふて
 下され。幸い愛に蕪も有る鼻緒は私かすげまじよと。懐中の塵紙と取出せば梅川の。よ
 紙がござんせよこより擦つて進ませよと。のへ引裂し其手元孫右衛門不思議とふに。先御
 身の爰邊に見知ぬお人じやが。誰様なれば此様に念比にしてくださると。顔とつれと詠
 むれば梅川いと胸つらしく。我等の旅の者私が舅の親仁様。丁度お前の年比で恰好
 も其儘。外へする奉公といさらしく以て思われず。お年老た舅御の臥煩の抱のへ。給仕
 の嫁の役御用に立ば私も。なんぼうの嬉しいもの連合の猶親御のこと。飛立様にも有る苦

此紙と此紙と替て私が申うけ連合の肌に着させ。父御に似たる親仁様の形見にさせたふと
 さんすと。塵紙袖に押し包む涙ぞ色に出にける。詞のはづれに孫右衛門つくづくと推量し
 。流石恩愛捨がたく老の涙にくれけるが。御身の舅に此爺が。似たと云ふての孝行の。
 嬉しい中に腹が立つ。年たけた悴と子細有て久離さり。大坂へ養子に遣せしに。根性に魔
 が指て大分人の金と過まり。揚句に所と走つて此在所迄詮議の最中。誰もへなれば嫁御ゆ
 へ。近比愚痴な事なれども世の譬にいふ通り。盗みとる子の憎らで。繩かくる人が恨め
 しいこの此事よ。久離切た親子なれば能に付悪いに付。搦ぬ事とい言ひながら。大坂へ
 養子に往て利發で器用で身と持て。身代も仕上たあの様な子と勘當した。孫右衛門の白痴
 者阿房者と言われども。其嬉しさいふ有らふ。今にも捜し出され。繩のつて引る、時
 よい時に勘當して。孫右衛門の了した仕合じやと賛られても。その悲さいふあらう今
 のら思ひ過されて。一日も先に往生させて下されと。拜み願ふの今參る如來様御開山。佛
 に嘘の吐ぬぞと。土にさうさ平伏て聲とばかりに泣ければ。梅川も聲とわけ忠兵衛の障子
 より。手と出し伏拜み。身と揉み歎き沈みし道理とこそ聞へけれ。猶も涙と押拭ひ。な

ふ血の統ひ悲しい。中のよい他人より。久離切た親子の親みの世の慣。盗み騙とせふより。なせ前方に内證で。斯々した傾城に斯した露の金がある。密りに便宜もそるならば。親はなきより親子なり。殊に母もない。倅。隠居の田地と賣ても首綱の付させまい。今での世間廣ふなり養子の母に難儀とかけ。人に損うけ苦勞とるけ孫右衛門が子で候とて。引込で置れふの一夜の宿も貸れふ。皆彼奴が心から其身も狭い苦と仕とる。嫁御に道憂目と見せ廣い世界と逃隠れ。知音近付親子にも。隠れる様に身と持なし碌な死もせぬ様に。此親の産つけぬ憎い奴との思へども。可愛さざるとばりにてわつと消入り泣沈む。分たる血筋を哀なる。涙の際に巾着より銀子一枚取出し。是の浪花の御坊の御普請の奉加銀。今爰に有合た嫁御と存じて遣るでもなし。只今のお禮の爲此邊にふらついで。よふ似たとて捕へるぞ連合の猶以て。是と路錢にさせ海道へらつて。一足も早ふ退つじやれ。御身の連合にも詞こそい交さずとも。一寸顔でも見たいが。いや／＼夫での世間が立ぬ。とふぞ無事な吉左右と涙ながらに二足三足。往きての歸りなんと逢ても大事あるまい。い。なんの人が知りませふ逢てやつて下さんせ。大坂の義理の缺れまい。とふぞして逆様

な回向させなど。念比に頼みますると咽返り。振返り／＼。泣く／＼別れ行く跡に。夫婦のわつと伏轉ひ人目も忘れ泣居たる。親子の中ころ墓なけれ。忠三郎が女房雨に濡て立歸り。待遠にござりませふ。こちらの人の庄屋殿より直に道場へ参られ。夫故逢も致さずもふ雨も晴のゝる。追付今に戻られふと云ふ所へ。忠三郎息と切て駈來り。是の／＼忠兵衛様。親父様の咄で段々と聞て來た。御身の事で此在所は大坂から犬が入り。代官殿から詮議ある。刃の中へ晝日中。運の盡たお人じや御身の振と見付たやら。俄に在所家並の片端より家捜し。親仁様と今捜す是ら私家の番。親仁様いとしや早ふ振してくれよとて。在亂になつてじや鱈の口どの只今。まく裏道のらさせ海道山へらつて退つじやれと。云へば夫婦の狼狽る女房の譯知らず。私も一所に退ましよう。阿房らしいと引退て。夫婦に古箆古笠や雨のあしへも亂るゝ心。死しても忘れぬ此情深うく忍びて出にけり。忠三郎先嬢しと息と次たる所に。庄屋年寄先に立ち代官所の捕手の衆。忠三郎が門口青戸口兩手になりとや／＼と込入て。廷と捲り實子と積り。唐戸米桶灰俵打返してぞ捜しける。土間のけで二十疊にも足ぬ小家。何處に隠れん様もなし此家の別條なし。野道と捜せと言捨て茶園

燈の間々ど。かり立ててこを通りけれ。親孫右衛門の既足にて。さふじや〜忠三郎善の悪
 る聞きたい。さよ〜氣遣ない。夫婦ながら何事なふまんと落しました。さ、有難い
 忝けない如來のお蔭直に又。道場へ参りて御開山へお禮申そふ。なふ嬉しや有難やと二人
 打連行く所に。龜屋忠兵衛榎屋の梅川。たつた今捕れたと北在所に人たあり。程なく捕手
 の役人夫婦と搦り引来る。孫右衛門の氣と失ひ息も絶る斗りなる。風情と見れば梅川が夫
 も我も細目の科。眼も眩み泣沈む忠兵衛大聲あげ。身に罪あれば覺悟の上殺さるゝは是非
 もなし。御回向頼み奉る親の歎きが目にのり。未來のさのりは一ッ面と包んで下され。
 お情なりと泣ければ。腰の手拭引絞りめんない千鳥百千鳥。泣くの梅川川千鳥。水の流れ
 と身の行衛。戀に沈みし浮名のみ。浪花に殘し留まりし。

冥途の飛脚終

落平次 生玉心中

近松門左衛門作

上卷

今に傳へて老松の〜。替らぬ色を頼まるゝ。松が枝の宮柱今に榮て數萬人。心々の願立
 に。神のお身さへ〜いそもじの。増て流れの憂ふしや。日毎に替る身の勤けふ●くがいの
 神詣で。道頓堀を天神へ。かごも一里を飛梅や。社のめぐり浮れ出。見渡せば數々の花屋
 植木屋立並び。いろ賣く花の色うる。我もいろ賣る身は仇花の。花に價の高下がわれば。
 勤の品も段々の品々有るも理はりや。花と色とは元ひとつ。されば身を賣る銀の名を。花
 代とこそ名付けけれ。先鉢植の作り松。すんど流しの一枝は。太夫の威勢備りて。悋氣の嵐
 手くだの雨。無理な口説の霜雪も。騒す痛す彌増に。情の縁り蔓りて。松の位と譬られし
 も憎からず。春立行は色失て。淋しき梅も捨られず。是天しよくの姿にて。一夜流れの軒
 端の梅の。仇な袂に香を留て。さんざ思ひの種かひの。根からいやなら添ふ氣じやないに。
 だまされて憎やつらやを逆まに。客に泣せてさぬ〜の。別れあやなき菖蒲草。局女郎に

生玉心中

●は原本虫入にて不明

なぞらへて。牡丹鳥の名盡しに。大臣も目をやり手の玉が。忍ぶ懸路をせきだいの。女蘭
夫蘭は呂州の姿。白と詠めて白牡丹。しやんとしてからいや味無く。然も色香の深見卿。
思ひ切れとは死ねとの事か。生て添れぬ浮世なら。いつそ煙に成たやな。しん氣もやして
待宵に。似たりや似たりけいせん花。暫し休ふ木影を宿の。枝は木榭我身はちやくこく。う
るさき里の勤ぞと。誰かは黄楊や柏楨や。縦南天に小手まりに。いとし男と射干の。扇の
なりに未廣の。逢瀬を祈る神垣に。柏手ならぬ柏屋の。我名も嵯峨の若櫻。懸草千草思ひ
草。詠めらるゝも詠むるも。同じ色成る袂百合。扇かざして神々詣で。安井生玉清水坂を。
しやならくくくちよこく走り。しやんとして見よや。柏屋嵯峨のはすはにござる。
戀のいち酒ヤットンく手元で懸る。押へてかゝる。どうでも嵯峨はぬれ者じや。油壺から
出すよな女房。しんとろとろりと見とれる女房。すねる男をばつ懸て。そこらくをすん
づと飲ましやるく。サアエイトンく。エイトンくくく。しんぞ一夜はお手枕。
日影色どる五月棚。草の異名はさまざまに。よむ共よしや葭簾。西の茶屋から我を呼ぶ。
忙しない迎見残して。見すつる花や恨むらん。色の勤の愛ふしの。時をこへて伏見坂。懸

のないにも習ひ逆。あたら肌を柏屋の。嵯峨は大和の一言客が。今日は天満の社内の茶
屋で。酒と出懸て遊ばんと。一昨日からの揚つかけ。空も雨氣の駕の外樋。賣木の花に氣
を晴し。清水屋にこそ入にけれ。茶屋には待兼。嵯峨さま。駕の衆なんとして運かつた。
お客様は待こがれ唯獨り飲でじや。いざ先あれへと云ければ。さればいのこつゝ客のくせ
に。揚の日は半時も側におかねば。損の様に吸付て居たろうな。夫で勤が續く物か。是駕
の衆頼みます。私は雨氣で頭痛がして休で居ると間に合せ。盃の相手に成て日頃の手並に
いさつかして下んせ。どつこい氣遣ひ成されますな。任せて桶でもたらいでも呑付てやり
ませう。是おか様精出して豆腐焼しやれ。鱧も四五本焼しやれ冷飯も焼しやれと。からげ
おろして入りにけり。嵯峨は主の側により先刻に云ふておこした。蜷川の嵐の芝居へ便宜
して下んしたか。様子はどふでござんすぞ。何の如在致まじよ。お前からの書付を其儘持
せて遣りました。心中の狂言の口上の所。直ぐにふれて貰ふたど。使はとうに戻つたがも
うお出成さるゝ筈。定めし狂言に見とれて。夫でかな遅いかと云つゝ、あぶる豆腐より。嵯
峨が心や憶るらん。假初の薄茶茶碗も馴染は。濃茶茶碗や嘉平次は。嵯峨が情の錦手に。

染付られて親兄弟の。異見も耳に蓋茶わん。深編笠も隠れなく。嗟嘆は見付て是爰じや。爰じやと招けばちよこく走。床几に腰を打掛て側へ寄たい抱付たい。云たい事のわくせさも。主が見る目憚かりて。他人向なる折柄に奥より何ぞお肴。銚子かやと手を叩あゝいと引のおお定り。かまぼこ梅干すいな花車。氣を通して立ければ。のふ二日逢ぬはさうじやいのだ。顔差入る編笠の下こそ戀の宿りなれ。嘉平次も懐さ此中は田舎客で平野屋にじやと聞たゆへ。いさか戻りに顔見よと遠側を用有りげに。いつ戻つゝ入もせぬ和中散買ふたり。どころ天やの水がらくりもそうくは見て居られず。うろくすれば長町脇の子供が見知つて。ありやく東の難波焼が坂町通ひ。柏屋通れば二階からちよいと招く。のつ是なんとしよと。悪口云ば傍りからはさよろく見る。親の内へはいかれぬ首尾。出店にも尻すはらずいつその事とをがけに。蜷川の芝居の曾根崎の狂言見て。醬油屋の徳兵衛と我らが思ひ引合せ。憂を晴す合點で其通一筆書て。小辨を頼んで置て來た其多見てか。けふ爰へおじやつたは天神様の御利生。神も佛もなじみがはん。親仁の見せの焼物に壹文づゝでも天神様。お馴染故じやと云ひければ。さればいな其多見ると嬉しうて。客を進め

て此天満と云ふ思ひ付。幸と此清水屋は。わしが前方扇風呂に居た時からの近付故。爰を頼んで芝居へも呼に遣りやした。夫に付ても父御さんの内方へもまだいかれぬ首尾と有。是逢いたい見たいは私とても。ほんに寝た間にも忘れぬ共。終には末で女夫に成る大願ではないかいの。其間が互の辛抱人は次第に身を持上げるがはんなれど。扇風呂のさども云はれた身が。晦日節季は前だれがけで。裏屋せど屋けんぞん屋三界懸取に歩行よくな。勤するのも澤山に逢ふ爲め。こなさんが大和橋の濱納屋借ての出店も。わしが近くにいよふ爲め。念比な宿では断り立出店へ泊りにいくよさは。女夫所帯をする心。同じ寝のも身に付様で嬉しい。され共一度は父御さんのお耳へ入ねばどうもならぬぞえ。聞ば姉御さん堺筋の鹽町邊に縁付してごんすどや。此姉さんなど頼みまし。前方から父御さんによふ思はれて下んせ。昨日の晦日も内にいさんせす。わけの悪い評判聞ば。頭髮一筋づゝぬかるゝよりも苦しうて。氣をもんでももがいても身は裸なり工面はならず。大方は四日迄と私が請合おきやした。私一人なら死んでなりと仕廻ふが。こなさん悪ふいはするが口惜い悲しい。茶屋の勤する者は人の小むすく唆かし。悪道に引入れるの不孝者にしてのける

と。十人が十人で。町の衆は思はんす涕がこぼれてうとましい。私可愛が定ならば。父御さん共姉弟御とも首尾よふしてくだんせと。涙ぐみたる眞身の詞更に勤と思はれず。嘉平次も共涙。今に初めぬ和女の心底過分。たつた一人の父親なり。一ッ屋の五兵衛とて若い時は男をみがき。物の筋道りく儀を立て無理を云ふ人でもなく。子供が少しの色遊。五百目壹貫目遣ふたどて悔む人では無れども。何様ども斯様ども叶はぬ事が有るぞいの。今迄は隠したが弟の幾松とおれどが間に。十八になるおきはと云ふ妹が有る。元は在所一ッ屋の伯母の娘。後々は此嘉平次と従弟とし女夫にする約束で。藪の中から養ひ死なれた母の臆情で。物も書き縫針綿もつむ機も織。算用もやりをる顔も十人並なれど。和女を除て此世界に女子が有ると思ふにこそ。綿をつまふが機織ふが。おさは、愚中將姫の再誕が。蓮の糸で一重羽織おりやる連。見向もする平でない。され共親の契約ちいさい時から言名付。けふ祝言のす祝言とせがまる。一利屈これたの。是親仁様わしや畜生じやござらぬ。種腹分ねと兄弟妹よ兄様と言つとも。夫婦になるは犬雞のする業。男も立た一ッ屋の五兵衛は。畜生を子に持たと言せてはわしも不孝。こなたも一分すたる事成ぬくと云破る。そこらを誦らぬ鎌親仁。チこりやでかした。イヤム云た。ヤ畜生吟味する根性で茶屋者と腐合。親にも知らせず夫婦になる極めして。行先が借銭だらけ。人にうとまれ指ささるゝ是が又人間か。五兵衛が目には畜生と見へるはい。茶屋者と縁切ておさはと女夫になるまで。門爪も踏さぬと擲れぬ斗の首尾なれば。母屋へとは禁制姉嬢は他人なりすんぞ堅い商人。ひとりの弟は眼病氣問談合も誰とせう。いろは茶屋から坂町掛て負ふた門は七八間。銀高わづか壹貫目餘り。身を刻でも當なければ。欠落か自害と思ひ定た所に。なふ生身に餌食天道人を殺さず。覺へてか此前扇風呂で。和女の事で大喧嘩した。西國橋の印傳屋の長作。あぢな事で其喧嘩から。兩方心底見届け齒の根も喰合念比。彼奴は所帯持なれば少の取替もして呉る。此長作が肝煎で中國のお屋敷へ。親仁の棚から錦手建山音羽焼の。皿の鉢の茶碗のと十五六兩が物賣て呉。晦日にお銀が渡る請取書ておこせと。四五日前に取りに來た。定めし昨日請取つる。けふ嵐の機敷に侍衆に付て居た。おれも芝居を立様に機敷の裏から音信て。直に爰へ來て呉と旁約束して來た。今では此平に命も呉る挨拶。善達へる男じやない。芝居はてに長作が銀持て來るか。爰へもばつとはづもうし。こ

ちが出店の仕廻は少取る懸も有る。二百目あればさゝんざ。伏見坂から道頓堀。壹厘残さず物の見事に仕廻ふて。待ていや節句から面も笠もぬがせう。借銭の笠はぬいでも傘は放されぬ。又降つて来た南無三寶あれ見や。あの菅笠着てくる女房鹽町の姉じや人。眼のわるい角前髪は弟の幾松。よほんに恰好がよふ似やした。夫々爰へござんすこなさん達てもだんないか。いかな〜係も見せともない。あの幾松が手を引てくる。腰のふとい尻のひよつと出た女子。姉の内の竹と云ふ飯焚。彼奴が見た事聞た事。其日の中に大坂中に事觸れ。こちが取沙汰何のかのと親仁に告るがいやさに。少濡懸て欺したりや。惚られ自慢でもう其事を觸歩行。夫でわいつが名を筒扱と付て置く。そなたも姉の知てじやげな。うらさ。どこぞにちよつと隠れ笠。隠れ笠なき身の置所。駕の雨外樋打明て。二人が膝を組合せ身を抱合て身を忍ぶ。姉は夫とも道のべの清水が店に暫とて。爰借ますとぞ休らひける。奥には猶も飲しこり踊るやら謠ふやら。騒ぐとぞさくさ若草の妻もこもれる駕の中。わられぬ姿顯れて姉や弟の見咎めん。嵯峨は奥より尋んかど慌さに猶も身を寄せて。締むふ中の冷汗は。外樋洩る雨の如くにて肌着も絞る計なり。奥の客がだら聲にて。こりやさ

がは何してじや色がなふて呑ぬはい。頭痛がしやうば爰へ来て寝やしやれ。せりやお迎ひに自身お馬を出されふと。表へ出るひよろ〜足駕の者共生の酔。さが様〜迷ひ子に成てか。返せ〜さが様返せ。爰にか。酒飲まいとて手がわるいと。姉に取付く手をもぎ放し。エ狼籍な嵯峨とやらじやござらぬぞ。こちや道通り。雨宿りに茶やの店へ腰懸れば。賣物と思やるか。阿呆くさいと叱られて。南無三寶嵯峨のお山と取違へ。愛宕山へ登るとした。御免〜のちろ〜目傍りを見廻し扱こそな。愛宕山から見おるせば。嵯峨は一目に見付たぞ。駕から帯の端が見へるぞ。嵯峨をさがし出さうかと。寄らんとすれば。是々。出ます〜免さんせと。外樋の影より這出て。こなさん達欺して隠れんぼしたれば。つい探し出された。其の代になんぼ成と呑さんせ。どこのお内儀様やら魚相な堪へてくだんせ。皆なごんせ〜と奥に入れば。嘉平次は嵯峨を放れしさが松茸。より殘されし風情にて駕に縮んで居たりけり。姉は元より商屋の妻と成身の目も早く。鳥渡見るより一寸やらす駕ない弟の嘉平次。扱情ない身持かな。引すり出して叱らふ。いや〜供の下女が見る所。さながら若い者人中で恥もかゝされまい。身の成果が可愛ひ父様がいとしい。

おきは心が無残など。襟／＼胸にせめ餘る涙は聲に早漏れて。なふ幾松。其方は仕合な能時に目を病で。淺ましい事見やらぬ。今のお山が今日一日は奥の客に身を賣ながら。座敷を忍んで駕に隠れて居た体は。外に深い人に逢手管とやらで有ふが。お山はお山の道にもせい。其深い男は誰じや知ぬが。有るまい事じやないかいの。定てこちらの嘉平次もまわの通り。嘉平次の悪性ではお山と相駕で。外樋の下に屈んで居様も知れまい。見る目も悲しい淺ましい。是と云ふも親の恩を忘るゝ故。心もみだらに身を持崩し人にも人といはれぬ。父様や母様に娘は有り息子は有り。何を不足におきはといふ子を囉ふて。乳母を取り守を付け愛世話がやみたかる。小さい時から女子の手業も教込。心もたまかに育て上。嘉平次と夫婦に成したらば身軀の藥なり。商ひの勝手も能繁昌もさせたいと。嘉平次が可愛ひばつかりに。世話をやんで病死の。母様の恩を早忘れ。可愛げにおきはほんの天竺人。店の若い者共あの女子始として。とやかふ評判する時は。姉が耳へ八寸釘を打るゝよりも猶こたへる。若も自然此駕にお山と嘉平次と乗合て居る所。今の客が見付て引摺出して踏迎も。なんと言譯有るものぞ。見こそせね聞こそせね。定て再々行先で恥をかきつら

ふ。其身ひとりの恥かきの親兄弟は何になれ。來世の便はなけれ共。あの事故に迷つしやる母様がいとしひと。慈悲の涙も目に余る駕に當ての口説言。嘉平次は身も縮み命も縮まる斗にて。消も入たき心地なり。幾松は嘉平次が駕に有とも氣も付ず。曲もない兄さの心今ならでは申さぬが。私が眼病もあの事故聞て下され。有る事かおさはとそちと夫婦になれ其代に家屋敷。商ひの株共に親仁の跡を繼する。合點せいゝと道ならぬ事耳かしましく。所詮わしが死るか不具にして下されと。山上様へ願を懸たれば御利生で此病。つい時花目の顔すれど。目は綿線で線様で響いて物も云れぬ。天満に上手の眼醫者が有ると連れて御出成されし故。道すがら物語も是迄は参りしが養生はしませぬ。私が盲目に成つたらば。兄様のひとりして店の事も取捌。内に身がすわつたら。そのづからおきは様と一ツに成氣も出来ませふ。えわしら迄身を捨て。是程に思ふとは思ひやりも有るまい。聞へぬ所存な兄貴やと目を抱て泣ければ。供の竹が差出口。嘉平次様といふ人は虚吐のこつちやう。私にもさつち惚て居るいつぞ日の暮に出店へ來て。思ひを晴させて呉とくせかつしやる。いとしさにお使の序に寄たれば。今宵はのがれぬ客が有る重てこちらから便宜せう。

心ざし嬉いと錢三十程包で懐へ入れらるゝ。むつと腹が立て来てわしやてんや物じやないぞや。身を賣る女子じやないぞや。肌觸ねば聞ぬと喚いたりや。こりや誠の契りは重て。約束の印是じやと云ふて。引寄せしつぼりと頼摺して。いねくと突出さるゝ私も名残が惜うて。跡覗いて見たれば氣味わるそうに。店の手水鉢で頬を洗ふてけつかつたど。語れど二人は余りの事紛らす耳の余所の町。風に嵐の芝居果散し太鼓の聞ゆれば。南無三寶長作が來ぬ先に。姉もいんで下されかしと飛立計の駕の中。今にも來たらば何とせう。のめくとも出られぬ首尾。出ねばぐはらりと筈違ふ。氣を揉でも詮方なく。何御存知なき天神を俄に頼む計なり。約束なれば長作暖簾の書付見て。清水屋は是じやな。少たのも道頓堀の茶碗屋嘉平次は爰にか。約束の通り長作が來たと云ふてたも。嘉平次くくと云ふ聲に兄弟驚く其中にも。姉は知たる駕の中。思ひやりては諸共の心遣ひぞ殊勝なる。嵯峨聞付て走出。長作様久しうごんす。嵯峨殿か。嘉平次がくるからはこなたも爰にと思ふた。我らは今日侍衆の相伴で。嵐の芝居から直に鯉屋へいく筈で。是袴の跡なれど嘉平次が何やら内々の一物。今日いらいで叶はぬ持て來て吳といふ。棧敷の事武士の前。おふとはいふ

たが何の事ぞ。つんど此方に覺がない。嘉平次はどこにぞ早う逢ふて聞たいと。云へども嵯峨は姉の前駕に共云はればこそ。いや鳥渡あそこ迄追付てごさんしよ。今日いらいで叶はぬとは私も聞たが。あのさんの賣物をこなさんが取次で。屋敷方へ賣んした其銀が十何兩とやら。昨日渡る筈じやげな。請取もいつて有るとの事。大事な私に渡さんせ。さなかまらつと酒でも飲で待んせと。いへば長作くぐだいそれた事いひますの。酒所でござらぬ。いかに身がじゆつない逆不器用な氣に成おつた。いかにも賣物は取次銀高壹貫二百三拾目代。拾六兩儲にあれに手渡しして。則自筆印判の請取を握て居る。おたい是は九之助橋親五兵衛の棚の賣物。銀は己が遣ふて親の手前の算用立す。此長作を横道者にせうとは底意のこい盗人。此物騒の世の中こなたの所も裏は野じや。内の勝手は知っている必用心ざつしやれ。身があつければどのよな事。仕やうもしれぬと眞顔の云分。嵯峨はつと色違ひ。兄弟は猶身にかゝる難義を察して駕の中。嚇とせきわけ身をもがき、無念やかたられた。姉の手前が恥かしひいつそかけ出。踏で腹をいよふか出ては姉の恥辱か。早ふ歸つて下されかしと千萬碎く氣の働。胸の吹子にいかりの火炎。駕もゆらめく計なり。長作駕

には氣も付す。是さが殿驚く事ではない。ぢたいわの氣な生れ付。夫を知らず仇惚して此長作は捨られた。むごいぞや。なんと元へ戻しておれが念比してやるふか。嘉平次なぞは違ふた十貫目や十五貫目は。手の悪い事せずに見んと今でも。こなたも悪かる筈がないとしなだれ寄て手を取れば。いやくなめ過たおかんせ。あれ町の御内義様も見てござる。勤の者はあんな者かどさげしみが恥しい。譬平様が盗人で有ふが強盗で有ふが。いとしようて。命をやつた此さがじや。なんぼこなたが佛程正直でも顔も見たふないわいの。先一旦そういはねば譯が立ぬ。夫もここに合點じや。今に嘉平次が大盗人仕居て。一ツ屋の五兵衛鹽町の姉が首にも繩付。其身は此方の裏の西の方に。鳥のどまつた様に首計に成た時。長作様念比仕様と言ふより。今思ひ切たればあいつも仕合此方も徳。それまへの様にむつちりと肥てか嘉平次めが吸取たか。肌を見たいと懐へ手を入る。取て突除こみともないおかつしやれ。言悪ければ此嗟峨と。平様とは一心づくで逢て居る。此方の様な口先ではないぞやと。おろ。涙の腹立聲。嘉平次はもう是迄堪忍袋も破れかぶれ。飛で出んとする所へ。姉の内より迎の丁兒大息繼で申おる様。ちやつとお歸り成れませ。早ふ呼でこいと旦那様は門に出て。待てござります早うと急かくる。心元ないけたたましい何事が起た。こりや爰はくがいじやぞ誰も人の名は云す。様子斗ちやつと言搦て人の名を云ふなど。心のさいたる姉の利發。遣はる。丁兒も氣轉者。角屋敷の親仁様がお出成されて。彼板圍の物領殿が一昨日から有所が知す付届借錢を。親仁様も一分立ぬお前の留主も合點がいかぬ。兄弟の事成れば眼醫者にかこつけ物領殿を。かくまへたに極つた姉も共に勘當じやと。わめき散してござりました。夫で走て來ました。づなやと息を繼。そんならいなご成まい。いかひで叶はぬ所も有り。見捨難ない事もあれど。男も女子も親の命には背かれぬ。殊に夫の呼使。女郎様お邪魔しましたとけがのふりにて親にはつと行當り。駕が有るとは氣が付なんだ。是に限らず狼狽ては鼻の先な事に氣が付ぬ事が多ひ。商物の請取なら買主の手へ渡りそな物が。中使の手に握て居るとは。是も氣の付ぬ事と。教るちえや天神を伏拜てぞ歸りける。嘉平次憚る方もなく駕踏散し踊出。長作がたふさ取てひつすへ。此嘉平次を盗人の騙人のはどの悪類で吐いた。先は武家方中取したと思はれては出入がならぬ。先請取書て渡せ銀取てやらふと。うま。く喰せ

たなわ。今のは身が姉じや人。駕に居るのも見付てじや。姉の前でよう恥を與へた。人かと思ふてはまつた。涙が溢れて口惜いと齒がみをなして泣居たり。成程姉とは一言で見取た。買主の方へいくべき手形が中に留つて有るとは。なんじや女の猿ぢぢ。先へは此長作が請取して上たあれは身が方への請取。汝もせぢがな奴じや者。銀も見ずにあたゝかに請取をせうわいなわ。エ、さもしい騙子め。銀が欲くばきたない云懸せうより。奇麗に家尻されいやい。扱もたくだ〜今思ひ當た。嵐の芝居の曾根崎の狂言が。面白ふて再々見ると吐したがよふ見覺へた。取もなをさず油屋の九平次。惣じて狂言浄瑠璃は善悪人の鏡になる。已はかたりの手本にするか。師匠の九平次より倍越た大がたり。此春己に三百目銀借た。念比の中手形も入ぬと吐したれど。よい中の垣と預り證文して遣た。夫に引繼合點なら差引して算用せい。こりや油屋の九平次。醬油屋の徳兵衛を。だました格を出したらば些と腮を喰違よふ。ちよつと手を付るが最期じやぞ長作と。腕まくりしてねぢよれば。ヤ、ひこ〜するな。わやにしてもさせぬ〜。手形の銀は手形の通り取る所で取て見しよ。三百目の手形に拾六兩は得遣まい。遣まいとはどうして。先からして遣まいと

めつこうほうと打はする。ヤ、二才め擲れて居ようかどぶちかくる。腕ねぢ揚ひつくり返せば起上り。武者ふり付て擲さ合ふ。さがはあせつてなふ喧嘩〜と呼はる聲。客も駕も酔つふれさせぬ〜と割込で。ひよろつく足を踏こかされ。さへ人踏んだは堪忍せぬと。相手がどれやらめつたふち。大道へまくり出大盡も泥まふれ。駕の者もちんば引、嵯峨は嘉平次かこはんと身を捨て懸廻る。わめく人聲雨の音瀧を流すに異成らず。祝子宮奴棒突き散し。社内の騒狼籍千萬出よ〜と制すれば。どやくや紛れに長作は行方なく逃失たり。茶屋は思はぬ踏立早日も暮た御門が閉る。お客様も早お立嵯峨様は大事の身。駕の衆早う乗ていなつしやれ。お客様も笠貸ましょか。但お駕借ましょか。いや〜駕は錢が出る。唯貸笠を借ぬが損嵯峨は夜晝身共が揚。道の間も算用の内。駕に付て歸らふと跣足に成て出ければ。嵯峨は心も暗紛れ。何としてじやとこにじやと見廻せば、悲し。平は髪も掻亂れ亂るゝ雨の藤の蔭。濡て立たるあぢきなさ勤進口惜い。大事の男をぶち擲かせ。濡しはるゝを見て居ながら我身は駕に乗る事か。エ、儘ならば飛下て共に抱てもぬれう物と。見やれば男も目を合せ。憧る中の愛涙いと雨こそしきりなれ。なふ駕の衆先待てや。わしや此

といが鬱陶い。身は濡ても厭ぬ。是を爰に捨て置て俄に雨にあふた人。着て下されば本望。是は嗟峨が囉ふたと手を上げて引絞り。たゝんでひらりと拾ければ。平は立寄り拾い取押戴きて雨に着る。田袋の島の穿づる。鳴てたちたる哀さに。忝ない誰かは知ねとよふ拾ふて着てくだんす。私も其下に暫が程の雨宿り。こなさんも其通り其雨をを一樹の蔭。他生の縁でござんすと。駕は見かへる嘉平次は見送る中に降る涙。つれなや神の梅の雨降へだてゝぞ別れ行く。

中之巻

こゝろくゝの。商も皆世渡りの大和橋。下水水の淡よりも色にぞ銀は消安く。際は素焼の明德利けふの菖蒲の節句にも。店指身皿とや角と。人も火入や灰吹も碎て物や思ふらん。繁昌の地の紋日さへ更て淋しき五月間。駕の者共灯燈提嘉平次が店破る計に叩け共。誰と咎むる人けもなくしきりに叩けば家主。紺屋の若い者共大欠して出合。誰じややかまし。一年に一度の五月の節句我人皆休んで居る。嘉平次殿は晦日前から爰には居られぬ。二日の晩方鳥渡戻つて夫から影も見せられぬ。懸乞衆なら夕部乞たがよいわいの。節句しも何

事ぞ。惣じてそこは出店で火を焼事も御法度。母屋は松屋町九の助橋の角。一ツ屋の五兵衛殿隠れはない。いや懸乞ではござらぬ。伏見坂町柏屋の嗟峨と申が。是も二日の夜から見へませぬ。けふで四日様くにしても知れませぬ。こんな所によもやとは存乍嘉平次様とは深い中。念の爲でござると云ふ所へ利窟くさい白髪交り。嘉平次殿はまだでござるか歸られたら云ふて下され。西國橋印傳屋長作から参つた。手形の銀子不埒に就て。明後日お願ひ申升と。聞に及ばぬ爰は出店の棚貸。何事も存せぬ本宅へく。取合ねば詮方なく皆東へと走りける。紺屋の者共果れ果何と清介。此嗟峨と云ふお山見やつたか。よそなたは終に見ぬか。さいく爰へ泊りに来た。夫れはくよい女房。いかにもく嗟峨の釋迦。毘首翔磨の御作と云ふてもだんない。云へば一人がうなづいて。夫で聞へた嘉平次か。今は身にさへ秋のさが。平と二人が二日の夜身の憂儘にふつと出て。どこをどぼく行先の當もない駕かりの世に。死ねば成ぬ信濃紬の糸よりも。心が細く氣も弱く廣い國をも我と我。心で狭く住なせし日本橋にぞ着にける。なふ平様ぞれ顔見せさんせ。いとしや

漸々に気がくらくらならんす。どう思ふてぞいの其様にうかくと。唐高麗を歩いた迎。壹貫目と登つた銀降湧ふ筈もなし。其中人に見付られ見苦し目に逢ふ時。難波焼の嘉平次が死でも除す。茶屋の銀負ふてあのさま見よと云れた時。此比天満で姉ごさんのおしやんす通り。御一門迄顔よごし迎も生ぬ覺悟の上。早う死なふじや有るまいか。ア思へば姉ごさん。こなさんを大切にいとしそなお詞。嵯峨と云ふ名は聞てなり大事の弟を先度の奴が。殺しおつたか恨めしいと悪みを請うが悲しいと。手に取付て泣ければ。ア、今宵は延さぬ合點なれと先づつと出店へいて。小刀でも用意し我宿と名付けた出店の門口。夫婦手を取り最期の門出する心。嬉しや通りの人にも逢なんだ。アはいりやと戸を押して南無三寶。つい引櫃さいて出たれば。親仁からか家主からか門に錠を卸した。アこりやかう有る筈と傍を尋くり石拾ひ。力に任せしやんくく。しやんくく。と打響き傍は深く遠音のこだま。紺屋に開付すは盗人よ桿棒と灯燈と。若い者共駈出る音。嵯峨を後に羽織の下。裾をかづきのあまならで人の見る目も覺束な。ア嘉平次殿。此中はどうじや。際の日には商人の店を捨て何所へぬつくりはいいつてぞ。書出しやら懸乞やら今宵迄も尋て来る。返答にもこ

まつたエ、分の悪ひお人玄やなふ。尤々。京の清水焼にすんぞ安い仕廻物が有ると聞。人に先を越れまいと俄に登つて漸々今朝下つた。日比やだの有る此嘉平次。嘸也た走つたと評判でござらふ。親仁も商ひに精出す迎いつにない機嫌で。今夜は出店に泊れと云はる。どこも首尾に成ました。家主殿の錠どうなア錠が有るなら明て下され。迎も事に火も囁はふ行燈に燈して下され。何かさ者の御苦勞。其代に今度の清水焼には利が有る。わつさりと振舞とさがを圍ふて身をそむけ。此期に成つても口利口後を見せぬは兵なり。其間に錠明て是火も燈し付ました。茶でも所望にござらぬかと表へ出れば嘉平次は。跡しやうりして入替り。最休んで下され明日お目に懸らふ。いかふ眠たい寝ますと。碯とさして内より懸余しやんとれば。嵯峨は溜息身を振はし。早ふ死で除たいと叫くも只涙なり。表には猶不審を立小脇に打寄。今夜の歸り合點がいかぬ。云分と云ひ呑込ぬ清介は親御に此様子知せておじや。まつかせと駈出すことも是で二度起た。ま一度起るは定の物と謔き内に入にけり。嘉平次表に氣を付サ向ひの門も締つた。是迄こそ太儀なれ。どこに何の障もなし。二人から双ば夫婦住居し同前なり。是爰がそなたの内じやぞや。エ、口惜い世間廣ふ内へい

れ。親にも逢せ町へも弘めそなたに世帯を打任せ商ひも仕廣げ。嘉平次が女房は勤の者の風はない。何程の大世帯も捌き兼さい女房じやと。いはせうと思ふたに叶はぬ事は叶はぬもの。たつた纒か壹貫目餘りの。銀の瀬戸を越兼て浮名を取て死ぬる事。無念なはいのと齒ぎまみし頭も上ず泣ければ。さればいの私迎も。一日なりと父御様に御奉公。姉御様を姑御と宮仕せう物と。明暮の願ひ事叶はぬのみか此しだら。及ぬ願のさか罰か。此前去人に三世相見て囉ひしに。先生で佛前の。茶湯の茶碗打割し報ひ有り。慎めどの物語今思ひ合すれば。こなさんの此商買を打破つて身を果す。茶湯の茶碗打割し。因果が回り來ましたと又伏沈み泣居たり。斯なる身の三世相縁な事が有る物か。夜中も過たいさおじやと既に出んとする所へ。嘉平次用が有る愛明いと門叩く。誰じや夜更て蓄い。用が有らば其所から云。たはけ者親の聲を知らぬか。五兵衛じや明い。はつと云ふより仰顔したつた一間の濱納屋を。嗟峨が素振も見せともなし。どこに隠さん道成寺の鐘はなけれど即座の知恵。窓の貫に帯を乾と結びさげ。取付てぶら下れと共に手を懸つ、井筒。井筒に有らぬ釣瓶をろし。干潟の沼を踏足も淵に沈むが如なり。左有らぬ顔にて只今臥る折から。何事

の御用がなと門の戸明れば親五兵衛。常に數寄の大脇差遠慮せずこちおじやと。手を引入るゝは養ひ嫁のお際。思ひ悪なき嘉平次こりや何事が起た。嗟峨が嘸悲かると。挨拶も何するやら聲もうはもる計なり。お際は道々泣たる顔親も涙を目に一杯。ヤウつけめ。已商人の又しては。店を明て余所歩行晦日前物際は。武士の軍の虎口ぞい。後の廿八日より出店を出。朔日は天満にて阿房をさらし。大事の五月の節季を捨今日迄はどこに居た。たつた今家主より知らされし。清水焼の仕廻物買に京へ登つて今朝歸り。親仁も機嫌がよいとは。五日にも十日にも親に顔をいつ見せた。嗟峨とやらが顔さへ見れば親の顔も兄弟の顔も。已れは見えたふ有るまい。鹽町の姉が禮に來て親子兄弟當浦の盃する連。今日の節句は嘉平次の顔が見へぬと汝が事悔んで。可愛や泣て歸つた。去乍こりや。此のお際が顔計は否でも應でも一期見せねば叶はぬと。云ばお際はわつと泣。情ない嘉平次様。嫌なもの私が無理に添ふと云ふにこそ。お前の心が不定で外を家に成るゝ故。親仁様の御苦勞一ツ屋の家も立ませぬ。心さへすはつて家を踏へる覺悟なら。お嗟峨さまを呼入れて兎角お身の立つ様に。わしや在所へ戻つて。尼になりとも成ますと道を正して泣ければ。

嗟峨は聞より氣も亂れいとしやあのお人も。心の内は嫉しかる。わしが離るゝ事も否父御の尤なり。死に様が遅かつた今汐がさいて来て。此身を取てもいけかしと。身を悶へて憤るゝ嘉平次は只何事も親の慈悲。御免とよりは一言も泣てうつむく計なり。五兵衛大きに腹を立。何事も親の慈悲とは。扱は此親は慈悲を知ぬと思ふよな。慈悲知ぬ。慈悲しらぬ親持たが不肖。此お際にも親が有る。己と夫婦の約束で人の娘を囃ふて。こつちの息子が合點せぬそつちの娘を返すと。寥々と戻して一ッ屋の五兵衛が世間へ頬が出されうか。親に恥を興へる子に慈悲とはとこへ。淺ましい根性。二本指を侍一本指は町人と斗思ふかうつけ者。大小は此胸に有る。武士に劣らぬ五兵衛とけん迄人に笑はれぬ。其世倅がどしやう骨茶屋の銀負て逃隠れ。死でも恥が扱はせぬ。己が身はすたつても此五兵衛は立通す。此お際と夫婦になれ。さとうじや。否か應かの返事せい。否と云ふと此脇指こりや。ハびつくりすな己は切ぬ人も切ぬ。お際が母は身が姉爺は他人。お際を娶にする替り身が腹に突込で。一ッ屋の五兵衛が一分立て見せう。返事。何と、扱悪て責つくる。お際は柄に取付て伯父様殺す事はない。わたしが死ば十方がすみますと。絶り止めて泣叫ぶ。嗟

峨が悲しき身に迫り。死にては爰に只ひとり父御前の目の前で。死で見せんと涙の帯。たぐり取付登んぐと心斗に力なく。足は泥に引締り帯は中よりふつと切れ。芦邊にどうと落水と共に涙ぞ流行く。逆も死身の嘉平次親の心を休むるは。安い事く一生の孝行納と観念し。誤り入て御尤。若氣の至り云交せしを捨難く。今迄お心背きしは不調法。是より魂入替御意を背かず。何にもお際と祝言と。云へども嗟峨は心を知す誠と聞て恨やせん。死際迄偽る事親を欺すか勿體なやと。思へば堪わげ聲吃り云としてこそ泣居たれ。いやく今迄幾度かたらされた。其心底に極つた證據が見たい。證據逆何と致そうぞ。證據には今宵直にこちへ来て。祝言の盃せい。夫は余りな親仁様。申交した女にも得と合點させ。何所も首尾よふ埒明た證據。明六日の晝迄待て下されと云へば。親も打點頭尤々。然ば祝言は其上。姉も呼寄せ一家集り盃せう。只今心の定まつた印の盃。一ッ香で身にさせ。否出店で終に酒飲ず酒迎はござらぬ。さう有ふと思ふて酒は身が持参したと。羽織の下より一升入の秘藏の瓢箪取出し。親の酌一ッ香。あつと云ふより素焼の盃取出す。否々小さい汝が飲は知つて居る。鉢でも茶碗でも大きな物で一ッ香。さのみ深ふはた

べませぬ。それか是かと茶碗尋る其音を。聞にも嗟峨が袖しぼる露の萩焼大皿出し。慮外乍と受ければとうと飲ど。瓢箪傾け懸る酒にはあらぬ麴の色。花の壹歩のからく。さらく。と七八十。皿堆く盛あぐる子は惘れうつかりと。親の顔のみ打守れば。親はわつと聲を上げ。やれ慈悲知ぬ親の酒を見よ。誠の慈悲の味はひを呑てしれやと泣ければ。有難しと計にて。親の膝に打もたれ。聲も惜まらず歎しは性は善なる涕なり。包むに余る親心不便や可愛や此春より。狼狽る躰を見て。此酒一献飲せたく幾度か思ひ寄たれど。否々氣の定らぬ間は却て毒酒と扣たり。此酒飲で方々の恥辱を雪ぎ無明の酒の酔醒ませ。身共は年寄氣じやうにて病と云ふ事知ぬ共。五六日は己故胸も痛んで不食する。兎角人の親には病となるも子の心。薬となるも子の心。今宵の異見を聞入て。彌心を持直し親の薬と成てくれ。長生したいと思はぬ共。切て卅二三迄得くと見立。人に成して死ば樂じやと咽返り。成人の子を引寄せて。脊中を撫て泣く泣く親の心を哀なる。嘉平次も人々の心の中を思ひやり。一言も無差うつむき。落る涕は盃の是もうへへす計なり。お際も涕にくれ乍晦日の夜から夕邊迄。案じて一目もおよらすお心疲お身の毒。歸つてお休み成されませ。

ナ、歸らふ是嘉平次。此脇指は死だ母と身共が祝言の時。聲引出物として舅より囉ひ。枕元の守刀と爲たる故家内に何の怪我もない。ぎろんのよい脇指今宵は身共がお際が親に成替り。聲引出に取ると仇とはしらぬ凡夫心。サ今宵こそ早歸つて明日の晝迄緩りと寝よふ。やい嘉平次孫明次第起にこい明日顔見よう。さらばくと立出る。さらばは誠のさらばにて明日見る顔は死に顔の。生顔見るは親と子の是ぞ此世の別れなる。嘉平次は親の影隠る、斗見送て。内に駈入り窓の下視けば嗟峨は消入ばかり。泣しみづいて音もせず。是々萬事皆聞いていある忝いと云はふか。悲しい事と云はふか是で結句嘉平次が。親の冥加に盡るわいの。否々そりやこなさんの不孝と云ふもの。今の酒とは銀そらな。どこも首尾よふ仕廻ふてお際様と夫婦に成。親御の心を悦ばせて下さんせ。私獨り死ぬれば濟。その道からどう云ふても。只こなさんがいとしい悪ふ聞て下んすなど。眞實見へたる涕の躰。ア獨り死なせてよい物か。囉ふた壹歩は百斗銀さへあれば何談合も仕安い。譬どふなれば迎其方を捨て。お際と添ふ氣は微塵もない南無三帶が切れたか。表から廻つておじや。勝手するまい連にいかふと表を明て出る所に。印でんやの長作究竟の者連て。嘉平次。親五兵衛

は爰にじやげな逢たい〜。譯もない長作何時じやと思ふ。親仁が爰へいつわせた事が有る。用が有らば明日なりと明後日なりと。松屋町へいて逢へ歸れ〜と押出す。是何とする親仁に逢もそちが用。内々の平形の銀子不瑤故。明後日お願申と斷に越たれば。松屋町へいけと有る夫故自身いつたれば。親仁は是へわせたと有る千も萬も入ぬ。銀戻すか戻さぬかと無躰に内に入れれば。嘉平次先へ懸込で壹歩を隠さん〜と。皿の上の中躰踞前打合せ合せても。膝の合より顯るゝ金は金にて銀ならず。嘉平次見事な。町人は神佛共主君共。額に戴く壹歩を股に袂で股が冷よふ。さ程澤山な壹歩を戻すまいとはそりやわやじや。奇麗にしやんと渡せ〜。コヤ長作拾六兩唯しられ夫がぞもどに嘉平次が。狼狽始め命沙汰に及んだ。お願ひ申さば申上仔細の有る此壹歩。粉に叩れてもやる事成ぬ。此長作が粉に叩れても取て見せう。ヤしやら臭い常々の嘉平次とは違ふた。口廣ひ事云ふと思ふな。命を先へ出して置て取て見よ。取て見せうと。掴み付く手をひんすと取り。店の小角へはつたと投付る。起上つて粗付をまつかせと引抱へ。上に成下に成店の焼物茶碗。花入て微塵五重の塔西行法師も痛手を負。ちやばの雞飛でちりけづめに蹴られて長作が。

轉ふ所をどうと乗り。備前鉢にて天窓の鉢たか〜と。打碎かれて錦手の。目鼻血みどろちんがいに嘉平次の生盗人。出あへ〜と呼はつて間に紛れて逃失せけり。嬉しや〜一期の本望とげたぞ。親の御恩の壹歩を己にのめ〜取れふかと。見れ共〜皿打明て壹歩はなし。今のとやくやに同道めが掴んで走つた。嘉平次死物狂ひ一寸もやらふかと。囉ひし脇指ぼつこんで懸出んとする所に。紺屋の手代若者どや〜と門口に。嘉平次殿余りな。偶歸つて何事仕出す。兎角評議は明日一足も出させぬと。外より門口はつたと紺夜明迄張番と。棒突並ていごかせず。譯を聞て下されと斷つても説ても。斷り立ねば男も立す。一分立ねば壹歩もなし。死ね〜と來る死神の引手は爰ぞと窓の子を。踏へてひらりと飛所を涕の袖にひつたりと。抱留てどふぞいの。どうとは死ぬるばかり足音しやんな泣聲すなど。身より余りて涕川堰も止めよ岩をこし。番は閻魔ぐしやう神。紺屋のもがり鉢の山。先には死出の大和橋。踏むは三途の泥の海迷ひこがれて

下之卷 嘉平次おさが道行

南無阿彌陀〜。南無阿彌陀佛なむあみだ〜。なむあみだ〜。南無阿彌陀佛南無阿彌

陀く。南無阿彌陀佛を頼みても。西を後に歩み行く極樂浄土に背く共。利劍即是と聞く時は死する刃も彌陀の縁。南無阿彌陀佛の聲細く。心細さや來世迄。かう手を引て行く事か。若や離ればせまいかと。引合し手を引寄せて。猶抱めて泣盡す。今日の祝の苜蓿の露も。我が袖には憂わしや愁や端午の紙幟。神にも世にも捨られて苜蓿刀の切先に。かゝる契りの悪縁と。返らぬ道を辿り行く。涙の雨に星消て可愛ひそなたいとしい殿御。顔も見せぬか五月間。命も世をも我身をも今一時に掘詰の。あれ井戸にも女夫有はひの。そちも妹背は替らねどちは釣瓶の繩切れて。横に切れ行く道筋の。是六道の新道と。花屋が辻にしよんぼりと。憂數々を今宵しも數へ盡して下寺町の。後夜の響も身にしみくと。今ぞ二人が一生の夢の寢覺を松屋町。是が父御の通りかや我が生れも此筋の。親兄弟も此身とは。しらで夢をや結ぶらん。結び留ても止らぬは。わしが人玉生玉坂の。草に瘦るゝ白露をわかれ出る玉か迎。拾へば消る初燈夜るは思ひに燃れ共。晝は名におふ遊山所の。貴賤群集の伊達盡し人をいさめの藝盡し。茶やが藁屋の軒綱。竹の柱に節込し。稽古淨るり太平記。琴の連歌引替て松にはげしき雨風や。我は初音か時鳥。迷土の友と鳴連て。

いと養るゝ袂かな。夫覺へてが此春の。花の紋日を此床で二人寢覺の小盃。そなたさ一ッおれ一ッさわる手元に萬歳が。あいも興ある相の山。花は散ても根に返る。人は返らぬ死出の山。死して返らぬ道ぞとは。今の憂身を誂ひしか。三途の瀬戸の焼物盡し。親は堅手の茶碗と茶碗。我疵付て我と我名をや流さん耻しの。我が噂も明日よりは歌祭文を身の上。坂町邊のな通り筋。柏屋内にお嵯峨とて。年は廿の。花盛り。客衆くの揚づめと。貸すの囉ふの暇無き愁ひ勤の中に扱。深い願ひは一ッ屋の。嘉平次故に身をはめて。替るまいとの七枚起請。書て二人が取替す。小指の血汐杉原に押て心をみかきもり。衛士の焼火と品替るかの小林が舞扇。是も浮世の形見こそ今は仇なれ松風や。無常の風も立騒ぐ辨財天の鰐口の。鰐の口より恐ろしき。追手の聲のあれくく。おはへて爰に北向の。八幡宮の燈明もおのれとしめり行く先は。罪業の程思はれて呵責恐し鬼踊りの。寺の藪垣物凄く。身を振はしてぞ立にけり。嵯峨は涙にゆきやらす。のふ夜明に間も有るまいが。何處で死なふと思ふてぞ。馬場先の松原を最期場と心ざし。來事は來たがこれ見や。星さへ一つない雨空。たどひ奇麗に死んだら共。血汐の體を雨にうたれ。むさい穢ない死に顔

と笑はるゝも口惜しい。此茶店を最期場に極めんと。羽織打敷座を組ば共に寄り添ふ床の上。今が最期ぞや。臨終の一念は無量劫を引と云ふ。何んにも心に懸らぬの。くどい事。思ひよふたこなさんと一所に死ぬる私じやもの。浮世の本望遂たれば。思ふ事も悔む事も露程もないわいのと。云へば平は猶泣出し。そこを云はふと云ふ事。今死ぬる今迄も我は親の顔を見る。親兄弟の事云ひ續けて我は死ぬるぞや。そなたも父母持た身けふが日の最期迄。父共母共云出さぬは我に未練を見せまい爲。嗜み深いそなたじやと思ふて涙が溢るゝと。語れば嗟峨はわつと泣き。忘れていたものひよんな事母様懐うござんすと。男にひたと取付て聲の下行涙の流れ。袂に溜る哀さよ。でかしやつた云ふて仕廻ふは懺悔の一ツ。罪を助かる種ともなる。夫婦が親の事云ふ其詞を冥途の引導。一時も急かんと氷の刃すらりと抜。既に血汐と鹽町の島づたひにわれ誰やら。南無三寶見知の有る柏屋の灯燈。一寸善尺魔いかはせんと狼狽ゆる。嗟峨は賢く茶店の圍ひ段賃廣げてぐるぐる。平もぐるぐる。二人簀巻の妹背川。流れの智慧も才覺も今宵限りの憂身かな。親方柏屋半兵衛小辨諸共方々と尋ね衆。下主の智慧は跡から。紋付の灯燈で尋

ぬるは無分別。嘸小辨もしんろかる己もくわをぬかした。爰で暫く休まふと蠟燭消て立寄るも。同じ茶店の床の上夫と知ぬぞ是非も無き。小辨しくしく泣出し尤惜や嗟峨さんごふしてぞ。傍輩と云姉女郎本の姉さん妹と。兄弟の契約してあのさん使りに勤たに。若心中なご仕て死なんしたら私や木から落た猿。親方さん頼みます。早ふ尋て下さんせと絶り付て泣ければ。チ、優しい事よう云ふた。親方の身に成つて見い。可愛計か嗟峨か死ぬると大きなたをれ。年の廻り合せで損するも有る事。夫は絲瓜共思はぬが。聞へぬは嘉平次。此半兵衛を男で無と思ふたか。嗟峨を連れて退手間でおれが内へ駈込。まつこうくした首尾で死なねばならぬ難儀。男と見懸て頼むとたつた一言云ふて見い。人にも知られた柏屋の半兵衛。否知ぬと云はふか。ほんにやれく家財賣ても救ふ心底。胸の扉に鍵がなふて無念なはい。是も跡へん今云ふて返らぬ事。さあ小辨。中寺町から藤の棚。ま一偏尋ふと云ふ所へ西東より大勢連。あの茶店に泣く聲は嗟峨と嘉平次。仕てやつたぬかるなごばらくど立懸り。半兵衛小辨にむさぼり付。死なば嘉平次獨り死ぬ。大事の奉公人よう殺さうと仕たなあと。鬚取るやら引張やら灯燈上て顔と顔。半兵衛でないか。町の衆か。

優長な人に世話をやかす事じやないわい。嗟峨が事を仕出せば損と云ひ大きな町の騒じやなたて〜いかい皆の苦勞じや。草臥た上に小辨がめる〜泣ので。共に氣が落ちて来て少爰で休んだ。どふでこいつら死のふはい。つんど足が進まぬと歸る柏屋止る柏。命枯葉の夜嵐に又東西へぞ別れける。人影なければ嘉平次も。嗟峨も蔑づはどいて溜息つき。今のを聞てか聞やつたか。半兵衛が情の詞、男じや過分な。小辨が優しい心ざし。忝いと嬉しいと。胸に餘れば聲にもる二人が歎ぞ至極なる。何のかの隙と程涙の種。今今と念佛申しやと引寄すれば。嗟峨はわつと泣出しまちつと〜。まわ待て下されと前後不覺に取亂す。待て呉れとは命が惜うなつて来たか。今になつて愛想づかし云ふて下す。命惜いはどなら高で身をうつ事もない。逢初めてけんが日迄鳥の啼ぬ日はあれど。顔見ぬ日もなかつたに。死ぬる今夜に限て顔さへ見へぬ雨空。未來の暗さが思はれて夫が悲しうござんす。歎けば男も涙ぐみ。道理我連も今生の名残。ま一度顔も見たけれど。燈連は夏草にせめて螢の影でもほしい。思ひ當りしと小石拾ふて脇指の。鐙を火打の石の火の光り待つ間の命の樂しみ。下緒の房のしげ糸を。はくちどなしてかち〜。かつしと打て

吹付る。火影も息も幽かにて互に見替す顔と顔。永い別れに成たかとわつと計りに絶付。大聲上て歎しは理り責て哀れなり。既に明行く鳥の聲。泣〜胸を押廣げ。何にも思ふ事は無い。でかした〜と抜たる脇指取直し。南無阿彌陀佛と差通せば。うんと斗りのり返るぐつとゑぐれば手足をもがき。又差通せば身を悶へ。ゑぐりくり〜目も眩めさ婆婆に出る息絶果て。終に冥土に引入たる敢なき最期を哀なる。死骸を繕ひ血刀よつく押拭ひ。同じ及と思へ共守にせよとの親の譲り。此及に死するは最期の不孝。二世迄夫婦抱帯。契りは先の世〜迄も重ぬる床の竹すがさ。死顔見せじと押包ひ羽織も空も黒羽二重。床凭をかばと踏はづせば。色も變じて目眩き忽息は絶てける。惜や五日の花菖蒲花の骸を血に染て。戀の及に伏見坂の世語りどこそなりにけり。

鎗の權三重帷子

近松門左衛門作

君八千代國は治まる御留守にも。弓馬嗜む梓弓。馬の庭乗遠乗と。遙のに出し濱の宮。鳥居通りの流鏑馬馬場。並木に落る風の音。とくろくと打波も。乗分つべき器量こそ。表小性の數くの。中にも笹野權三とて。武藝の譽れ世の人に。鎗の權三は伊達者の。ゆふでも權三はよい男。諸ひ囁らす美男草。女若二ツの戀草と。飼に飼たる月毛の駒。前脚とつてゐんつよく。雪囁碎く白淡に。さんせうよしや尾は青柳の。しつたりしたりしたくく。うつしくと歩まどる。大坪流の鞍のうち。稽古に心染手綱。あいくりく乗拍子。はいと懸たる一聲に。兩口はなそ奴が罷も。共に跳たる駿足や。袴の裾に風うけて。小波寄るしゆみののみ。しつくと乗戻し。引廻しゆる袖そりの松も女松の十八公。其年頃の振袖の。京染模様菅笠は。家中で誰の娘ぞや。お姥らしいが小風呂敷。權三見るめの糸薄。ちらりはらりと馬の先。除る振して邪魔とする。權三それぞと見し人の。心に受へ荒駒も。色にそばへて足早さ。はいく聲とることにて。馬ぞ迷惑らわの鞭打くれく

駈さす。響の音はりりん〜。泥障の音はた〜。叩く嵐や馬場先の。すゝの
笹原さら〜。さら〜と乗とび〜乗とばせ。蹄と陸路に付けばこそ。二町五反
の馬場の内。息ともつが半時ばかり。達者と見せてを責馬の。鞍も鎧も汗になり。乗止
むれば小者馬取。もふお仕廻りと走り寄。丁稚殊の外汗に成た。一走り歸つて若替の袷
持つてこい。馬取をも其間宮へいて休息せい。ないと云ふより中間共休む方には足早く。
立たる跡につる〜と立寄つて。足の爪先鎧をもにしつろと取り。久しう御座んす權三様
。御無事で目出度ふござんせぬ。是見ぬ顔もよい加減にしたがよいぞや。可愛そに馬も骨
折せ。今日一時に稽古せねば叶はぬ。左程私しが嫌ならば。最前より除すとも。なせ此
馬で踏殺させて下さんせぬ。こな様はなふ侍のぬけ〜と。よふ嘘と吐しやんと。脱
ひ目の中おろ〜と。女は涙もろろりし。是お雪殿人こそよれ川側伴之丞殿の妹御。君
傾城となふる様に權三が嘘と吐くものか。少しも心變らね其下々の奴等まらふため。中間
めらが見付ふのと。馬に乗る心もせず。氣が宙と飛ぶ様では此とく汗のいた。じたい姥お
主が不調法。屋敷の人目もある物。若い女中に異見もせず此様な遠かけ。御家中ふつと名

が立ては。この權三御奉公がならぬ。申し交した詞は違へぬ。同道してお歸りやれ。且
ふ〜と乗出す響とつて引どめ。姥が不調法とはよい手な事仰やれなやいの。權三様。よ
もや忘れは成されまい。去年の冬私しが宿でお雪様とお前と逢せた時。是限りと仰やれた
の。なんと。たつた一夜さりに切實にその娘御とやござらぬ。夫も夫の梨も櫻も
せず。お文の往く度毎に此方から返事せよ。をれをこに一度の返事も成された。お雪様
の父御様母御様は御座らず。めしむるになる此姥はぐるなり。伴之丞様へたつた一言。云ひ
入てつい御祝言濟む事。お奥様に持しやる。但いや。否なら否と今御意なされ思案が
有る。はんに私が育て、自慢じやないが。男に指も差させぬ甘い盛りの十八さき。柔り
な内と一口くふて。せ〜りさかして置ふや。そりや成ませぬ。おあへるこよとぞ喚さける
。女中の氣では怨み尤も。文は落散る遠慮ふらく。返事せぬは身が誤り。御舎兄伴之丞と
は。御膳番の淺香市之進に茶の湯の相弟子。心安い朋友なれ共申悪いがあぢな氣質で。ひ
さど物の云はれぬ仁。若い者の口から御自分の妹下されとは。何ともそれは恥のしし。然
るべき媒妁頼み兩方へ挨拶あれ。我等は合點伴之丞さへ呑込るれば。用人衆まで伺ふて其

上は繰次第。此詞と違へなばたつた今此馬のら。眞逆さまにころりと落。陥殺さるゝ法もあれ。心底變らぬ〜と云へばお雪が莞爾と。笑顔にひらく小風呂敷。是れこの帯の縫見て下さんせ。丸に三ッ引お前の御紋。私は裏菊。善はなけれを私が細工。大小の締るため中入に念は入れたれ。絆口がね氣に入まい。去ながら未永ふ縫ひ仕立て召させねばならぬ。これお媒妁頼みて本式の言入はお前より。是は先夫迄の心頼み。此帯の如くいづ迄も。ね腰元と離れず添ひ纏ふてや。そふじやぞやと。鞍の前輪に打懸くる。其手と取てじつとじめ。おふも云はれぬ嬉しい心。入替我等も心底變らぬ。此馬も聞て居る畜生の心は人よりも恥のしい。こりや證據にたて馬よ聞たろ〜と。言へともいふな馬の耳風に嘶くばかりなり。權三重疊んで懐に押入れ。おれ〜濱手のら栗毛馬の遠乗は。舎兄伴之丞。おはんに姥兄様が夫とこへ。マ旦那様おこりやならぬ。見付られては後の邪魔。マ先こつちへ〜と本社の方へぞ走りける。程なく伴之丞乗来り。權三お身も遠乗か。いのふ精が出て馬持がよい故に。その月毛も一兩年めつさりと能なつた。買てが有らば賣て仕まい。五兩も七兩も利と取て。又跡から安馬買置き乗入れて賣たらば。金持に成る筈。よい藝覺

へて。仕合と人よけなす口癖。權三氣立てよく知つて。マ小身者の馬の手入。飼とろくに飼はぬもゑ。見掛ばありで爰はの時の用に立ぬ。御身達は大身。人手は多し飼はよし。すはと云ふ時肝強く。歩み勝はお身の馬。秘藏めされと云ければ。其言ひ分は先度二の丸の櫻の馬場で。其月毛にこの馬が歩み負たあてとな。マ一ト馬場せめて勝負せよ。マ乗れ〜と氣と急たり。マ心得たといひたいが今迄乗てお見やる通り。人馬共に草臥れ只今歸宅。重ねて〜小者共こいやいと。言へともいふのな聞入す。草臥とは負用心勝負せねば堪忍せぬと。手綱とくつて乗出す。權三も今は力なく馬には一息つがせたり。我身の汗も入つたの。月毛の駒に櫻符。ひみつの手綱繰りひらへ繰りゆるめ。左り右に輪よけちがへ。互に敗じと二三べん。入るへ〜乗たりしが。權三が馬は逸物の。口と切ておくと入。マとのけたる聲のうち。一散に駈出す。伴之丞が栗毛馬鞭影に尻をみして。打ても引てもしやくつても。前脚かいて高嘶さし。躍り上り跳上り。鞍に堪らす伴之丞。屏風返しにさうと落ち。木の根に腰骨うち當わいた〜と云ふ聲に。馬取中間草履取。主人の恥も打忘れ。一度にどつとぞ笑ひける。權三驚き飛でおり怪我はないのと立よれば。こりや

權三相手は主が月毛馬。此方へ渡せ切て捨る。馬と渡せあいたく腰ともめ中間共汝等も首が危ない。權三が方と尻目にけ。相手知れずの獨りばら。權三もいはれぬ挨拶と。身と扣て立たる所に。進物番の岩木忠太兵衛六十八でも生得のたぎ。赤がね月代割立てい。御兩人是にか。お宅へも參るべきによい所で御意得た。東御家老衆より御狀到來。此度若殿御祝言相すみお悦び。お國に於て當月下旬近國の御一門方お振廻。馳走の爲眞の臺子の茶の湯なさるべしとの事。是に依て我らが鹽淺香市之進も留守なれば。御家中弟子衆の中眞の臺子傳授の方へ。御廣間本式の飾物等勤めさせ申せと。御留守御家老衆より仰付らるゝとは申せ共。何人が傳授されたも存せぬも尋申す。此度の御用に立ば第一は御奉公。其身の手柄婿の市之進も本望。何と御兩人聞登も有て。茶の湯の名と取らふなら。此度なりと語りける。我慢もの、伴之丞。眞の臺子やすい事傳授ゆるしは受ねども。秘事はまつげ何でもない事。種々我ら存じてゐる。數年の稽古は此度御用は拙者承はる。心安ふ思召せ。それは先づ珍重權三殿は御存ない。されば存じたとも申されず存せぬ共申されぬ。惣じて是は茶の湯の極意。家々の傳多けれども師匠市之進一流は。東

山殿よりの傳。一子相傳の大事なれば。權三体が茶の湯で傳授許し受ふ筈も御座らねども。師匠の話し聞はつた義もあり。大概非の入らぬ程の御用の間には合せませふと。詞の中より伴之丞。程大事の晴の御用。間に合せでも物の。此御用は伴之丞が獨して勤むる。忠太殿其通り心得召れと言ければ。いや我一人の儘にもならず。娘ながらも市之進女房彼が所存も有べき事。仮初ならぬ眞の臺子の傳授と。誤り有ては殿の耻。諸事談合づくがよい筈。御兩人お歸り。いざ御同道致そふ。兎も角もと伴之丞ちんばらがく腰とひく。忠太兵衛類にく。こなたは腰とお引さなるが。疝氣でも起つた。さればく拙者程の馬の名人なれ共。龍の駒にも騾さ。馬のら落て落馬致したと。方言やら重言やら忠太兵衛おのしさ。彼奴なふつて遣んと思ひ。馬のら落て落馬したとは。いかふ念が入た落馬。痛むが道理何方も落馬が流行やら。生駒新五左がおこりも。妙薬一服でのげもさす落馬いたす。我等は今朝他所へ參り。大事の精進といふ落馬致した。此様に落馬のはやる時。むざと言分なごなるな。首が落馬致そふぞと。溢口いふも茶の湯者と盤に持たる。身のならひ。昨日は今日の初昔。世の口にあふ茶の名所。人は氏より育

ちのや。淺香市之進の留守の宿。おさるは流石茶人の妻。物好もよく氣も伊達に。三人の子の親でも。さやしや骨ばるの生れ性風忍ばしく床しくの。卅七とは見へざりし。數寄屋廻りの掃拭ひ。下女中間にもいろはせず。帯はなさぬ奇麗好。路次の飛石敷松葉。石燈籠は苦むして。殿とされる手水鉢植込みの木の下影の。落葉かくなる迄夫婦ながらへて。子供未と高砂の。松の榮や祈るらん。中息子虎二郎棹竹よこたへ。年季の角助杖ひつさげ。路次の中に走入り。景清是と見て物々しやと夕日のげに。打物ひらめりて切てうれば。堪へずして刃向いたる強者は。四方へばつとど逃にける。るいやつとどどど打合ける。余程にあがけよ其所なぬくめ。見ごと男の數に入ながら。江戸の供さへ得しおらず。ちのやの子と相手にして。怪我でもさするの數寄屋の壁に。疵でもついたら何とす。是虎二郎の馬鹿と相手にして日がな一日悪あがき。一々に帳につけ。父様お歸りなされたら。きつと告る待てるやと。叱られていや母様。悪あがきはしませぬ。私は侍ぢや鎗遣ひ習ひます。是なふ。其方ももふ十々じや。その合點がいらぬか。侍は侍知れたと。去ながら父様と見やいの。御前も能御加増まで下された。武藝は侍の役珍しうらぬ。茶

の湯と上手になさるゝ故。人の用ひはんそうもある。幼い時ら茶杓の持ち様。茶巾さばきも習ふておさや。長々の留守の内。子供がわるふ育つたといはれては。母が浮名も耻のしい。男の子は男の手祖父様へ往て大學でも讀習や。馬鹿と供して暮方に連れ戻れと。内外までに氣と配る留守こそ心盡しなれ。お菊は流石姉だけの。母様いかひお世話。少とお休みとさし出す。薄茶を椀の音羽山。大人くれたる振りを見て。孝行なよふいやつた。優しうなりやつた。妹のお捨は姥と遊びに出たそふな。行水も仕廻ふてか。此の髪は誰が結た。万が細工と見へたの。鬘がまつとど下つた。額もけんで愛想がない。つとの出し様髪つさで。よふも悪ふも見せる物。顔の道具相應に眉が女子の大事の物。前髪もこふでない。母が直して遣りましよと。開く櫛箱鏡臺の此鏡より世の中は。人こそ人の鏡なれ。人の振みて我振の。善も悪さも身の手本書にうく筆のとさみには。京や大坂の上臈も。心で見れば今茲に。吉の初瀬の花も見る。殿御持ての朝ね髪。湯揚り顔や洗髪。人にな見せそ亂れ髪。寐亂れ髪の枕にも。寝顔は猶もつゝましや。容儀は生れ付なれば。只嗜みは黒髪。目出たのらんこそ。女はめやとるべしと。徒然卿にも有るといの。兎角女子は髪

かたち。千筋と成る櫛のはに。身持行儀のときはさき。子と思ふ手につやくと。見交す程に見へければ。それの格別よい子に成やつた。虚ならその鏡と見や。親の目の最負め他人が證據。万こいよ飯焚の杉もちやつと来て。お菊が髪付見てくれい。あいくと走り出。是は——奥様のいひお上手。額つき髪付で下地のよいお顔が。猶美うならしやんして。女子でさへしん氣がわく。裸身とむつくりと抱て寝たいと。響るもあり。杉がはたと手と打て。こそふじや日頃の不審が今晴た。私が鏡で顔と見て。木地は随分よけれども人が惚れぬ。異などと思ふたが。髪結び様ばつりや。あつたら此身が埋木とや。慮外ながら奥様の手に二三日のつたら。お國中の男は秋風に芒のは。靡けてやるとぞさゝりさける。親の子と響るは厭じけれど。此様な娘と大抵の男に添せるは妬ましい。常々つくくと思ふには。御家中で婿ととらば。表小性の笹野權三様に添せたい。器量はお國一番武藝よふて。茶の道も弟子衆に續はない。そして氣立と云ふ物が。万人にも憎まれぬ。可愛らしい堅氣。男のまつすいくと。いへばお菊は童氣の。申し母様權三様は大人でおち様の様に有ふ。私やいやくと頭ふる。ふわけもない。母は卅七の酉。父様は一廻り上のと

りで四十九。是十二ちがふても見事わが身達の様な子と持た。權三様は一廻り下の酉で廿五。そなたは酉で十三。十二の違ひは丁度よい似合頃。まわ二三年して顔も直し。藤詰たらしつくりの長門のんろう。ほんに四人酉の年是も不思議。榮耀いはすと殿御に持や。そなたが厭なら母が男に持ぞや。ほんに市之進殿と云ふ男と持ねば。人手に渡す權三様じやないわいのと。子と寵愛のあひたてなく。時の座興の深される。過去のあくせの縁ならぬ。此上に衣服させらへ。打つけさせて見せふぞと。娘自慢の鼻脂。手と引き奥にぞ入にける。玄關に物も。茶の間の方がぞれいと應へ出向へば。笹の權三一樽持せ。岩木忠太兵衛殿は是にござらぬ。毎日お見廻なされるれと今日はまだ見へませぬ。然らば奥様へ申てくりやれ。此中は無沙汰。お留主何となく珍重に存じます。ちと申度とござれ共。委細は忠太殿まで申入ませふ。此一樽は上方の名酒。幼稚方のお慰みお見廻の印しとお次手に申てくりやれと。言置き歸れば。お申先暫くと走り入る。女房はや立聞て。御口上聞たく。待受た様なと苦しうない。御通りなされと申ませと。櫛笥鏡喜片づけて。塵はく羽根の二ッ羽も。比翼の縁をこ深き。笹野權三は遠慮ながら。常の居間にぞ通り

ける。是はよこそお見廻と申し子供方へとお心づき。珍らしい御持參。折々立關まで御出下されても。わざとお目に懸ることもなし。して御用とは何事の。親忠太兵衛までもなく。直にお咄し遊ばせと。隔てぬ挨拶まめやのなり。權三手とつぎ御深切忝けなし。忠太兵衛殿。御舍弟甚平殿と以て申す等。近頃粗忽の願ひながら。今度御祝言お振舞の御馳走。眞の臺子ののさり。市之進弟子中との仰せ渡し。常々市之進殿お物語り一通りは聞覺へ。未だ指圖繪圖の巻物傳授口傳許し印可と受されば。押はなして眞の臺子。覺へたと申されず。天下太平長久の御代。箇様のと勤めねば。武士の奉公秀でがたし。數年の懇望。今度の犬願。巻物拜見と許されば生々世々の御厚恩と。願と疊に押さげて。師弟の禮儀見へければ。扱もく御執心な奇特なお心入れ。此傳授は一子相傳にて我子の外へは傳へられず。のがれぬ弟子は親子の契約あつての上。繪圖巻物も渡すと。夫に付き。次手がまじい近頃鹿相な。敷のら棒とやその寢耳に水と申るふ。思召も如何なれど。折がなくと兼々心に籠しゆる申出して見ます。姉娘のお菊と。御身様へ進せたいと常々私が望み。今も今とてお願申せし折のら。あふせばとふやら。臺子の傳授と替々にする様で娘の

威もあら。大事の傳授の詮もなし。夫はそれ。是は是の談合で。菊と其許へ進すれば。婿は子の相傳。市之進聞れて満足。第一私か戀婿。押出してよい女房と云には限りのないこと。まづ大体眼鼻揃ふた秘藏娘。添てる殿御はこな様退て外にない。なんと合點して下さんとす。いへ共耻のしげに差うつゝいて返事せず。まふでござんすぞ。まなんの是が耻かしい。扱は娘がお氣に入ぬの。天窓振しやんすは嫌でもない。こした。疾のら外に約束が有るとふな。そふじやく主ある花は是非がない。あつたら男に戀がさめたと立退げば。是は迷惑。誰とも我ら約束なし。木石ならぬ若い者。當座の色は格別。極めしとはめりくなし。師匠の聲とせせば聞へもよし。娘御れ菊の。私し妻にきつと申受ませう。忝ないお嬉しい。望み叶ふた。お侍の詞。そこをおすは如何ながら。媒人なしの縁慮證據のため。ちよつと御誓言聞きました。御念入は尤も再度具足と肩にのけず。市之進殿の差料に刻まれ。屍と往還に曝と法もあれど。言はせも果す。まふよふござんす勿体ない。今日は吉日今夜臺子の傳授の書。印可の巻物渡しました。それお供の衆戻せよ。まづ娘には逢せませぬ。私に似たらば定て倍氣深らふ。脇へ心散らす一筋に頼み

ます。悪性があつたらば。此姑が愠氣の腰押し。お持せの名酒お前と私が此樽に。こふ手とりければ契約の盃した心。橋が無れば渡りがない。臺子が縁の橋渡しし此樽も橋渡し。はしにて祝ふらさゝぎの。身も紅むに染るども。世に誑はるゝはしならん。又玄關に老女の聲。女子衆とこし頼みまじよ。川側伴之丞妹お雪と申者の姪。ついしのお目には懸らねど。お慮外乍ら奥様へ。密のにお咄し申たさ。お雪使いやら何やら押のけて参りし由。頼みまじると言入る。權三はつと色ちがへ。さて〜思ひもよらぬ奴。何用有つて参つたぞ。我らには大禁物。見付られては迷惑。よふを抜て歸りたいとらる〜眼に成ければ。伴之丞の侍畜生。その妹の姪なんの氣遣い。侍畜生の因縁聞て下さんせ。主ある私に執心うけ。度々の狀文。夫ある身と随付にする不義もの。御用人衆迄訴たへ。耻かゝせてと思ひしが。侍一人癡るといひ。市之進殿歸られては生死のあること。中使の下女に暇やつたれば。兄の不義の使に妹の姪が来たそふな。直にあふも口惜い。留守と遣ふて奥のら様子と立聞せよ。女子ども挨拶して。云ふと言はせてつい去せ。權三様ともあの婆が。見後にとつと抜して去せませ。夜に入り人も靜つて必ずお出。傳授の巻物渡しまじよと。云

すて奥に隠れいる。まんは氣轉才覺もの。目ませ領と權三と圍ふ袖屏風。なふ〜お姪殿とやら。此暑いに年寄の御太儀な。とれ汗拭ふて進せよと。顔にべつたり手拭の。ちやみと鐵どもみ草の。ととくさ紛れ忍ぶ草。權三は抜て歸りけり。あんまり拭ふて顔が痛いの。折角のお出に奥様は。今朝より親里へ参られ。ゆるりと逗留ある筈。何なり共私にお語りなされと云ければ。夫ならこなた頼みまじよ。養ひ君のお雪様と申と。笹野權三様と言交せのとわれ共。媒人がなふて御祝言が遅なはる。殊に此姪が働きで一夜の枕と交させた。其の禮に權三様より雪駄一足銀一兩。是が証據侍の妹に侍が疵付ては。退引ならぬ大事。爰の奥様ちよつとお口と添らると。波風立すついで埒のあく様に。權三様と内証の跡先しやんと締てある。お子様方も有らば。錢金出して御祈禱さへなさるゝじやござらぬの。人の爲のよいとは。山伏いらすの御祈禱。首尾よふ相すみ相應のお禮。そこは姪が香こんだ。御身も骨はぬそむまい。表面ばりの取結び。偏へに頼み上ます。始ての長口上まぐろ、おはもじやとしやべりける。是なふ其方の心に長ければ。聞く耳には猶長い。此方の奥様は禮物とつて。肝煎する奥様じやござらぬ。殊に酉のお年で御身の様な長なさが忌と

じや。早ふ往で下されど。愛想なければ手持悪く。私に成でちやう六十。狼狽歩いて棒にぬはぬ先に。長ばへせずと往まじよと。逃ばへしてを歸りける。奥には多くにはうのい格氣。曠志の怒綱されて。静め兼たる折節。父岩木忠太兵衛。只今是へと若黨先へ告げれば。家内恐れ鏡まりて。おさるも可笑うらねども。親に愛想の笑ひ顔。市之進の留守皆機嫌よふて満足。虎や捨めが。よく遊んで晝寝せず眠たい。歸つて早ふ寝たいといふて。連立つて歸つた。夜が短のい早く寝せて。とく起し晝あがせだが万病圓。姉は奥にの。娘の子は十三四のら。端近く出さぬがよい。姉や捨めはお身に似たが。虎めは市之進に生算し。こりや。市之進江戸より歸つたといふて。母が傍へちやつといけど。孫寵愛の戯ふれ。い久しう遊びやつた。祖父様祖母様喧ましのらふ。奥へいて姉と並んで寝やしや。乳母も寝冷させまいぞ。やい角介。戻つたらなせ石燈籠に火は點さぬ。日が暮れたが目に見へぬの。女子ども祖父様の御慰み。今の名酒とちと上ませともてなせば。いやく名酒より何より數寄屋の庭。毎日見ても見飽ぬ。市之進の物數寄心が伸て面白。兼て内意咄した笹野權三。眞の臺子の願ひには來せなんだの。いにも懸望なされしもある。糸物渡

と約束に極めました。出來た〜若いわろの奇特な。諸藝の心がけ頼もしい。仕損じあれば市之進の通り殿の耻辱。秘傳殘さず傳授めさ。去ながら家の大事。譯しらぬ下々にも。一言一句聞せまい穩密〜。更ぬ先に歸らふ提灯とばせ。皆宵のら寝ませ。夜ごとに留まると言付やれ。又明日見廻申そふ。角介男と云はとのれ一人。門背戸に氣と付い。何といふても晝でも角介介たど。老の戯言夕やみに。歸れば跡は門の戸と。さすが數寄者の庭の面。若葉の木立物ふりて。路次はの暗き燈籠の。火影宿るくま笹の。露は釜の蛙の聲のるまびすく。茅屋が軒に音づれて。しよろ〜流れ水の音。夜もしん〜と更にけり。おさるは椽先に家内は寝入はつしりと。何と思ふと答めての。なきが我屋の取柄にて涙も袖に落次第。思案とる程妬ましい。大体の男と可愛ひ娘に添せふの。わが身が連添ふ心にて吟味に吟味。思ひこふだまれ男なればこそ。大事の娘に添する物。倍氣せずにおこふの。晝の婆めが吐し類か雪様と權三様と。内證しやんと締てある。腹が立つ妬ましい。格氣者とも法海とも。云ひたう云へ。傳授もへうたなんもなんのせふ。臺子も茶釜もへちまのうは。恨めしい腹立やと。身と椽げたに打付て。こぼす涙の袖車。絞る茶巾のごとくな

り。思へば怪氣も因果の病。是程怪氣深ふては。我男と手放して。海山へだて、よふとくぞ。能々お主は怖いもの。みな心の氣隨から。姑が婿の怪氣とは悪名の種らりと思ひ忘れよと。拂へ共猶胸こがす。涙は癖と成にけり。契約なれば笹の權三供とも具せず静りに門と叩く音。内にも答へず走り出誰じや。笹のどばうりに明る戸と。入より早くはたと締。直に數寄屋へくと。手燭片手に傳授の箱。ふたり忍びし有様は。人の疑ひ有べしと。我身に見へぬ障子一重。明て數寄屋に入にけり。是は繪圖の巻物祝言元服出陣の臺子。是みその中の茶の湯の圖。誠の眞の臺子とは。此行幸の臺子の圖。三幅對三ツ具足。つばのざりの品々。印可の巻許しの巻是と讀ば口傳入らず。心静りに寛々と讀なされませ。權三戴を繰り返し。讀めば世間も静まりて。蛙の聲も更渡る。折しも川側伴之丞。四斗入の明燈下人に持せ。市之進が屋敷堀のめぐり。うるく耳とろばだて小聲に成り。波介。内にはよふ寝たぞ。おさるが寝間へ忍び込み。口説おほせ積る念と暗し。色の上にて睡しこみ。眞の臺子傳授の巻物してやり。權三めにうつそりさせよ。若し人が起あふても女小者。口へ砂でも喰はらせ。いさばねと揚さすな。それ鏡突抜け。まつかせと暗つ

ぐれば底も鏡もどつばりと扱たると。積穀垣にぐんぐつと。葉山しげ山茂けれど。笑さはらず思ひ入る振穴道とぞ成てけり。己れは四方見合せ跡から來いと伴之丞。そろりくと這くぐり。庭に出れば數寄屋の内に燈火の。影は障子に男と女。忍びあふ夜の私語。領さあふて顔と顔。寄せてしつぱり濡の露。寝て仕廻ふたうまた寝ぬの。しみく甘い花盛り。伴之丞も氣は上づり。すそはあらずと念かけて。先陣こされた宇治川に。膝ぶりくの流れ武者。喉と渴のし立けるが。權三が聲にて。誰ぞ庭へ來たそふな。晝さへ人の來ぬ所。夜更で誰が來るものぞ。今迄鳴た蛙が。ひつしやりと鳴止んだ。蛙も少とやすまいでは。さよろくせずと先巻物をも讀しやんせ。あれ又蛙が鳴きますと。いふ中に波介樽と俛つて庭の内。主従一所に立息らふ。あれ又ひつしり鳴止んだ。さふでも誰ぞ有るは定。一寸吟味と刀退取り出んとす。是やらぬ三方は高塚北は美垣。犬猫も潜らぬに人の來る筈がない。獨しての氣遣ひ。扱はれ前と私。斯してゐると妬む女子が。喚きに來る其覺へがござんすの。是は迷惑左様の覺へみぢんもない。いや有るいやある。煤が口と添ればつい埒のあく様に。内證しやんと締て有る。女の身のはるなさは。表面計

りに目がくれて。胸の中と知らなんだと。わつとばかりの腹立涙。これ宵のらくらく燃返ると。姑が婿の悋氣と浮名が嫌に。笑顔つくつて堪へ袋ふつりと緒が切れた。これ見よがしの其帯は定紋の三ッ引と裏菊と。小じたるい引並べ。誰が縫ふた誰が遣た。啗切つてのけんど。飛のり武者ぶりつく。此帯には様子が有る。様子がなふては。様子といふが如ましい。互に泣やら敵くやら。帯ぐるくと引解さ。墨みりけて擲り打。嫌らし手が穢れたと。手繰て庭にひらりとなげ。拾へと言はぬ計りなる。思ひの闇ぞ詮方なき。二人の影はばらく髪。いのにしても此さま。帯解ても居られずと。庭に出んとする所と。く帯に名殘惜いの。不肖ながら此帯なされ。一念の蛇と成て腰に捲付離れぬと。引解いて投出す。權三余りに憤として。二重廻りの女帯。致したとござらぬと。同じく庭に投出す。すうさす拾ひ伴之丞聲とたて。市之進女房征野權三不義の密通數寄屋の床入。二人が帯と証據。岩木忠太兵衛に知すると。言捨て脱て出る聲。南無三寶伴之丞弓矢八幡通さじと。刀引ぬき障子蹴破り飛で出。燈籠の火の影薄く。搜し廻れば波介が。狼狽廻るとしつかと捉へ。伴之丞は何とした。私と捨て出られた。切つてのれと冥途の供

と。肝の束とぐいぐい。抉ればぎやつと斗りにて。二刀にぞとまりける。直に逆手に取直し。弓手の小脇に突込む所と。おさる縫つて是やとふぞ。不義者は伴之丞。身に曇りないお前が。何の過まり死なふとは。ア、おろかな。兩人が帯と証據に取られ寝亂れ髪此体。誰になんと言分けせん。もふ侍が廢つた。御身も人畜の身と成た。く無念やと泣きければ。扱はお前も私も。人間はづれの畜生に成たの。いの成る佛罰三寶の冥加には盡果た。淺ましい身に成果てたの。はあつと斗りにとふと伏し。消入る様に歎きしが。是非もない。最早此二人は生ても死んでもすたつた身。東都にござる市之進殿。女房と盗まれたと。後ろ指とさへれては。御奉公はふるの。人に面は合されまい。逆も死ぬべき命なり。只今二人が密夫といふ。不義者に成り極めて。市之進殿に討れて男の一分。立て進せて下されたら。なふ忝ならふと。又伏沈むばかりなり。いや是不義者にならず。此儘で討れても市之進殿の一分たち。死後に我々曇りない名と雪げば。二人も共に一分たつ。いのにしても密夫に成り極まるは口惜い。いとしや口惜いは尤なれど。跡に我々名と清めては。市之進は女敵と討誤まり。二度の耻と云ふ物。不肖ながら今爰で。女房とや夫とやと